

真摯に向き合うこと

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たちのグループは日韓共通の課題ということで「女性の社会進出」を扱った。ジェンダーギャップ指数が先進国の中で特出して低い両国において、女性の社会進出を阻んでいるものを明確にし、解決策を見つけることを目標とし、それぞれの事前の調査活動を進めた。第一次発表会では同徳側は育児休暇の制度や職場での女性の扱われ方、お茶大側は政府の行っている女性の活躍を促す政策とその問題点について発表した。第二次発表会に向けてのディスカッションでは、お互いの国の政府や企業の現状を共有し、自分たちなりの解決策を話し合った。例えば日本側は韓国で一般的に普及している保育施設の通園バス、韓国側は日本の一部の会社が設けている社内の託児所を取り入れるなど、お互いの国で実際に行われている制度を参考にして両国にとって良い環境となるような解決策が挙げた。しかしながら、どちらの国でもまだ行われていない方法を考える必要性も強く感じ、最終的には新しい解決策を協力して見つけ実現していこうという決意表明でまとまった。

1.2 私の学び

日本と韓国は法律上の違いや制度の違いはあるにせよ、女性の社会的地位や女性の扱われ方は似通っているということがお互いの発表やディスカッションで分かった。グループで行ったディスカッションで女性の扱いに関する問題点を言うと、「日本でもそうだ」「韓国でもそうだ」と共感する場面が多くあった。特に家で夫が家事をしないということや、女性ばかりが家事と仕事の両立を迫られるということには多くのメンバーが不満を持っていた。これらは、今学生である私たちが今後直接的にも間接的にも直面し得る問題であり、決して軽く扱うことのできるものではない。この問題を国ごとではなく協力して変えていく必要があると感じた。特に日本は女性の人権を侵害した国であり、未だにその解決を先延ばしにしているだけでなく、女性に対する考え方そのものが進歩していないという印象を受けた。このことが、現在にも続く不当な扱いの根幹にあるものだとは私は考える。この現状を変えていくことは、長い目で見れば歴史を繰り返さないという意思表示になるのではないかと。反対に、現在の女性観や不平等が残り続ける限り、過去に行ったことに対して謝罪や賠償をしたとしてもそれは表面的なものではないということだ。実際に話し合ったことで、日本国内だけでなく韓国の女性に関わる問題の解決にもなんらかの形で協力したいという思いはより強くなり、法律や制度について調べるきっかけとなった。今後も文献を読んだり、実際に話を聞いたりといった活動を通して問題解決の方法を考え、実際に行動に移していきたい。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

まず、バディーが会ってすぐに手を強く握ってくれたことが印象に残っている。その瞬間は日韓で違うと感じた訳ではなく、突然のことに驚いて、そうしてくれたことがただ嬉しかった。一般的に韓国人は人懐っこく、日本人は他人行儀という見方があるが、実際に過ごしてみて思ったことは、韓国人にも日本人にもいろいろな人がいるということだった。韓国人と日本人という二つのグループに分けてしまうと、その細かな違いに注目する

機会を失ってしまう。例えば私は相手と親しくなるのにかなり時間を要する方だと思うが、お茶大の学生の中には初対面でもすぐに仲良くなれる人がいるだろう。礼儀正しいとか、時間に正確といった日本人の長所として挙げられる特徴についても、そういう人もいれば、そうでない人もいる。そのことが、同徳の学生とともに過ごすことでかえって見えてくるようになった。

2.2 日韓関係に対する学び

私は六月に新大久保の高麗博物館に行った。そのときは韓国における女性についての展示や、日韓の女性に関わる法制の比較展示をしていたので、今回のグループ活動に役立つと思ったからだ。見学をしている最中、偶然スタッフの方のお話を伺う機会をいただいた。この日韓セミナーに参加することを伝えたときに何度も念押しされたことは、私たちは歴史を真摯に学ばなくてはならないということだった。若者の文化や流行が国境を越えて日韓共通の話題になるのは、ある意味では当然のことである。だからこそ、どれだけ歴史や過去に真摯に向き合うかが、本当の友達になれるかどうかを決める。そのことをセミナー期間中ずっと考えながら過ごした。直接的に日韓関係を取り扱うグループではなかったからこそ、余計に意識しなければいけないと感じた。日韓関係や、それと繋がる南北の関係を考えることで、DMZや統一展望台に対する考え方や見方は確実に違うものになった。結果として、直接バディーやグループのメンバーと日韓の歴史問題や嫌韓などについて話し合うことはなかったが、歴史を自分に関与しないことと割り切らずに考えること自体に意義があったはずだ。問題意識を持って考え続けることがいつか今の凝り固まった関係を変える力になればよいと思う。

3. セミナーについて

外国語教育としては、慣れない韓国語で発表をしたということが良い経験になった。私は授業で韓国語を勉強しているため他の人よりは負担が少なかったはずだが、それでも通じるのか通じないのかも分からない状態で発表するのは本当に大変だった。このことを通して、日本語で話をしてくれた同徳側の学生の苦労を少しでも実感することができたように思う。ほとんどの会話を同徳側が日本語で行ってくれたことには申し訳なさも感じた。私が知らないものがあると辞書を使って調べて日本語で説明しようとしてくれたからだ。私も知っている韓国語をいくつか使うことはあったが、日本語で上手く意味が伝わらないときに韓国語を調べて相手に伝えたことは少なかった。この経験は自分の歩み寄ろうとする努力が十分でないことを実感するきっかけとなり、今後語学学習を続けるための励みにもなった。また、このセミナーを通して実際に韓国の学生と知り合ったことで、韓国は私にとって単なる国ではなくなった。顔と名前をよく知る人々が毎日生きている場所になったのである。何か事故や事件があるたびにその人々の安否が気になり、彼らの友達や家族が無事であることを願い、彼らと同じ場所に生きているすべての人々の安全を祈るようになる。歴史問題や領土問題でも同じことが言える。もはやそれらは過去のことでも、他人のことでもなく、今生きている私たちの目の前にあるものなのである。そう考えられるようになったのも日韓セミナーに参加したからこそであり、今後たくさんの人が機会を得てこのような経験をしてほしいと思う。

同徳女子大との交流を通して

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私のグループは「日韓の共通問題」というテーマをもとに活動を行った。中でも韓国と日本は双方ともに女性の社会進出が遅れているという事実から、事前学習においては女性の社会進出に対する政府の対応や政策などを調べ、その問題点を挙げた。韓国での発表では韓国側と日本側が互いに洗い出してきた自国の女性の社会進出に関する政府の対応の問題点をもとに、その問題を解決・改善するためにはどうすべきか、また私たちにできることは何だろうかということを、ディスカッションを通して考え最終発表で発表した。

1.2 私の学び

日本と韓国には女性の社会進出に関して非常に似た部分を多く持っていると感じた。ディスカッションにおいて私たちは、共通する問題点を改めて見直して主だったものをピックアップし、その解決策を考えた。その過程ではやはり同じような状況におかれている問題点が多く見つかった。しかしながら、その中に僅かながらその問題点に対する対策が日本と韓国では異なっている部分もあり、また時にそれは一方の国が見習い、取り入れるべきものでもあった。これまで私は日本社会の問題点についてどうしたら改善することができるのだろう、と考えることがあったとしても、それはあくまで国内のみの問題として考えていた。しかし、他国とその問題点を比較して視点を広げることが自国の問題解決につながるだけでなく双方にとってともに非常に有益なことであるということに気づくことができた。今回は女性の社会進出に関する問題を取り上げたが、他の問題点についてもぜひこのように複数の国の間で解決策を考え出すような機会があるときと新たな改善の道が拓けるのではないかと思う。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

同徳女子大の学生と交流して感じた違いは、韓国の若い世代は歴史に対する関心が高く、日本の学生よりも学校の授業外の時間に自分自身で歴史的背景を学ぼうとする姿勢があることだ。私自身、授業以外で歴史について詳しく調べようと試みたこともあまり無かったため、そのような意識の違いを大きく感じた。その違いの原因としては、日本側は戦争をもう昔のことで、反省すべき過去として考えている傾向があるが、韓国側は今でもその確執は続いているものとみなしているという点があるように思えた。私は高校生の時にKPOPを好きになったことをきっかけに、韓国の文化に興味を持ち始めた。そして韓国の文化が、韓国のことが好きになった。その頃の私は、浅はかで無責任な考えかもしれないが、正直歴史的な責任というものを謝罪という形でいつまでも私たち日本の若い世代が受け継いで行かなければならないという事実には鬱々とした気持ちを持っていた。純粋に韓国の人と仲良くなりたい、友達になりたい、という気持ちを持っているのにそこに先人たちの過ちを持ち込んでぎくしゃくとした関係にすることに意味はあるのかと思っていたし、私は韓国のことがただ好きだけなのに謝罪の気持ちや私たちは加害者の国であるのだという意識を持って韓国の人々へ接しなければならないことは納得できないし悲しいことだと考えていた。しかし、この研修を通してその考え方が変わった。今までは「謝罪」や「加

被害意識」というものが韓国と日本が“仲良く”なることへの妨げとなるものだと考えていたが、最終発表で同徳女子大の学生の話聞いて思ったことは、心からの謝罪の気持ちを持ち続け、そしてそれを韓国側へ示してゆくことは暗い妨げなのではなく双国が未来を向いて手を取り合うことができるようになるためのものなのだとことだ。目を背けるのではなく問題と向き合うことこそ、韓国の求めていることであり韓日の関係改善に必要なことなのだという学びを得た。

2.2 日韓関係に対する学び

今の日韓の関係の悪化を改善することは容易なことではないと思う。今の祖父・祖母や親の世代には古くの歴史教育などが原因で未だに反韓の感情を抱いている人が少なくない。しかし、実際に韓国の人の優しさや親切さに触れた時に初めて韓国を憎む気持ちや日本を恨む気持ちというもの癒えるのではないか。私もこの研修を終えた後は韓国に対する好意的な感情が韓国に行く前に比べ格段に増した。過去は変えることはできないが未来へ向けた取り組みのためにもこのセミナーのように寝食をともにする機会を多く設けて韓国人と日本人の直接的な交流の機会を増やすことが日韓の関係改善につながるのではと考えた。

3. セミナーについて

私は韓国の文化に興味を持っていたため、このセミナーで韓国へ行っても特別驚いたりするような新たな文化の違いはないだろうと思っていたが、それは違った。約9日間の共同生活の中で、一つ一つの行動や価値観に微妙な違いがあることを感じて、やはり実際に韓国で生活してみないとわからないことがあるのだと気付いた。また、それが彼女たちにとっては当たり前のことで大切な文化の一つなのだと感じることができ、そのような点で日本とは異なる文化を理解することができた瞬間だった。また、私の中での大きな変化としては、韓国語を学びたいという意欲が非常に強くなったことだ。韓国語でプレゼンテーションをした時には大変だと感じたが、やはり自分の考えを相手の言語で伝えて言語の持つ微妙な価値観やニュアンスまで共有したいという気持ちになった。次にまた韓国を訪れる際には、大好きになったバディへ韓国語で話をしたい。楽しいだけでなく、かけがえのない友人や自分の価値観や視野を広げるきっかけとなったこのセミナーは私の人生において大きな存在となった。

本音の語り合いを通して学んだこと

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私達のグループは日韓の共通問題として女性の社会進出について話し合いました。グループ内での話し合いの中で特に女性の社会進出について現在政府の施行している政策にどのような問題点があり、それを今後どのように解決してくべきかについて話し合いをすることになりました。1回目の発表では日本、韓国それぞれの政策とその問題点について、2回目では日韓に共通する政策の問題点とその解決策についての発表を行いました。また、話し合い後や2回目の発表の後には食事を皆で食べ、様々な場所へ行くことによりグループ内での交流を行いました。

1.2 私の学び

この日韓セミナーの中で私は2つのことを学びました。一つ目は話し合いの中で学んだ韓国の女性が感じている就職や出産に関する不安感です。高額な学費のために妊娠、出産する年齢になっても学費の返済を行わなければならない、出産、育児を行う費用を捻出出来ないという韓国特有の悩みや仕事でのキャリアを優先するために育休をとることが出来ないために出産を断念せざるを得ないという日本とも共通する悩みまで幅広く知ることが出来ました。また議論をするなかで共にジェンダー指数の低い国に生きる女性としてどのような悩みや困難を抱えているのかについても話すことが出来ました。これからますますグローバル化し、労働者が国境を超えることが多くなる中で各国特有の問題点、共通する問題点について知ることはこれからの社会を担い、女性の働きやすい環境を作るための先駆的な世代の私達にとってとても有益であったと感じます。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

話し合い以外の時間に国籍は関係なく、ひとりの友達として寝食を共にしたことは私の中での韓国の方についての「親切だ」という印象に確信を持たせるものであり、また日韓の問題について話し合う際になぜ溝が生まれてしまうのかということについての一つの答えを見つけさせてくれました。以前私が韓国に旅行をした際に、他の人とはぐれ、道にまよってしまいました。道を尋ねると皆その場所まで連れて行ってくれホテルまで電話をしてくれとても親切な人が多いという印象を受け、韓国の人は皆反日感情のみに基づいて行動しているのではないかと考えていたことがとても恥ずかしく感じられました。そして今回、グループで多くの時間を共に過ごす中で皆にとっても親切にしてもらい韓国の方は本当に親切であるということを実感することが出来ました。そこで、日本と韓国で日韓関係について考える時韓国の方は日本の本音と建前を使い分けた戦略的な話し合いではなく、本音の話し合いを求めているということを感じることが出来ました。日本と韓国の間で戦争に関する話し合いは何度も行われていますが、その意味では日本はまだ韓国と本当の話し合いはできていないのではないかと考えます。侵略してしまった日本は韓国の要求する形での話し合いを設けるべきだと思います。

2.2 日韓関係に対する学び

今後の日韓関係について私は政治以外の場面から日韓関係の改善がすすんでいくのではないかという考えを今回のセミナーの中で持ちました。この考えは日韓関係についてどこか私とは関係のないところで行われている政治の問題であるという意識を抱いていた私にとってとても進歩のあるものだと思います。政治では国益のための政治的戦略が存在します。本来であれば、国の利益について考えることは世界でコスモポリタンな市民を目指すべき今の時代に逆行するものでありますが、この考えを変えるためにはまず私達が行動しなければならないということに気づきました。私達が将来積極的に日韓の交流を行っていくことで戦争についても両国の考え方や過去の戦争についての真実が見えてくるのではないかと思います。

3. セミナーについて

このセミナーは私にとって初めて意義のある交流になったと感じています。今まで交流といっても親しくなろうという気持ちだけでしたが、今回のセミナーは親しくなることだけが目的の交流では絶対に避けるような戦争、反日・嫌韓感情、領土の問題などについて触れることができ、韓国の方の本音を聞く事ができ、また上記のような戦争に関わる感情についての発見もできとても実りのあるセミナーになったと感じています。また、このような本音を語り合ったからこそ本当の友情を手に入れることが出来たと感じています。交流において本音を語り合うことの重要性を感じました。そして帰国後、日本では戦後70周年を迎え、安倍談話が発表された影響で多くの人が韓国について話していましたが、そのほとんどがこれ以上謝罪する必要はないというものでした。私はそれを聞き、以前は何も思いませんでしたが、とても胸が痛んでいることに気づきセミナー前と後の変化を感じました。このセミナーで変化を感じる人は多くいると思います。韓国について悪く言われた時、韓国にいる自分の友達を悪く言われているような気分になる人が増えることはこれからの交流促進にとってとても重要であると考えます。

最後に、セミナーの中でDMZを訪問する機会がありましたが日本の学生はDMZに実際に行くこと、北朝鮮という未知の国が見えることにとても興味がある様子でしたが、同徳女子大学の学生は皆あまり興味がなくセミナーの中でなぜいくのかという話を同徳女子大学の学生から聞きました。今回のセミナーの中では日韓関係が中心でありましたが、実際に韓国の学生は朝鮮の北と南の分断についてどのように考えているのかについて聞いてみたいという気持ちが生まれました。日本の身代わりとなって朝鮮は分断されたという先生のお話をお聞きして、私は今まで日本とは関係ないと考えていましたが、反省し、またこれからは国の域を超えて活動することが増えることを考えると朝鮮半島の分断についても話し合ってみたいという気持ちが生まれました。

日韓セミナーを通じて

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私が所属していた1グループは「日韓共通課題」だった。私たちは両国で問題となっている「女性の社会進出の低迷」を取り上げ、それに対する解決策を議論した。まず、事前学習として日本の女性の社会進出の現状と政府の支援策等を調べ、一次発表内容を作った。同徳女子大学では、日韓学生それぞれの一次発表を聞いた後、両国に共通する問題点は何か、政策の違いや現状に関する情報等を交換し、両国が一緒にこの課題にどうやって取り組むかをまとめ上げ、最終発表とした。一方、日常生活ではバディと共にご飯を食べに行ったり、韓国語を教えてもらったりと友好を深めた。

1.2 私の学び

今回の活動中で最も有意義だったと思えるのは、5日に行った最終発表準備だった。韓国に行く前は、同じ東アジアの国同士であるから、抱えているジェンダー問題も似通っているのだろうと予想していたが、実際は様々な差異があった。中でも特に驚いたのは、「女性が子どもを産めない理由」だった。日本では、女性が子どもを産むことを諦める場合、自分のキャリアと両立できないから、自由が無くなるからという理由を挙げがちだが、韓国では子どもを産めるだけのお金がない、というのが一番の理由だそう。同じグループの韓国人学生が「大学を卒業するだけでもお金に苦労する。これ以上お金で苦労するのはもう嫌だ。だから子どもを産むつもりはない。」と真剣に話していたのは私にとって大きな衝撃だった。ジェンダー格差によって、子どもを産めないのは悲しい。しかし、賃金格差で子どもを諦めざるを得ないことも悔しいし、悲しい。確かにそこに立ち上がる壁は高いけれども、その一方で議論を通じて見えてきた希望もあった。それは、日韓両国で互いに女性の社会進出支援について学ぶべき点があるという事だ。議論の中では、韓国では導入が進んでいる託児所への通園バスを日本にも取り入れるべきという声が上がった。また、日本では地域別に組織されつつあるイクメン同士のコミュニティを両国で更に広めたらどうか、という案も出た。女性問題は両国の負の側面ではあるが、両国がより良い関係を築くための「共通の痛み」にもなる。この課題に日韓が協力して取り組み、互いが東アジアの男女共同参画先進国となれるよう行動、発信していきたい。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

文化の違いに様々な場所で出会うだろうと思っていたが、実際に来てみるとそこまで「理解できない」というような差異には今回出会わなかった。はっきりとした違いに気づくほどの韓国語力が自分に無かったことと、比較的大学周囲でずっと過ごしていたためだと考える。その中で気になった事は、どのお店に行っても店員さんが「감사합니다」や「안녕하세요」というと客も立ち去る際に必ず挨拶をすることだ。最初は慣れずに挨拶するタイミングを逃していたが、三日目くらいから積極的に感謝の気持ちを店員に伝えられるようになった。率直に、このあいさつはとても気持ちのいいものだった。日本のお店よりも、「対等な人と人」という関係を強く感じた。日本でも礼を述べる客はいるが、韓国よりは遥かに少ない。一昔前から「お客様は神様」とも言われ、自分の立場を勘違い

した客の態度の悪さがしばしば問題になる日本においても、店員への感謝を忘れないためにこの習慣を続けていきたいと考えている。

2.2 日韓関係に対する学び

以前、「言語と文化」で竹島・独島問題が扱われた際、島を両国共有領土にするという案が出た。当初、私はそれを名案だと思ったが、今回のセミナーで同徳の学生が「それでは皆納得しない」「独島を自国領だと思う根拠は何か」という言葉を聞いた時、自分はまだまだ韓国、韓国人に対する理解が足りないと痛感した。私は「領土を奪われる」という痛みが分からない。加えて、自国領とする根拠は一ページにも満たない教育と信用度の低いマスメディアのみ。それでも竹島を自国領と考えるのは「そうであってほしい」という愛国心だと気づいた。その他の問題もそうではないか。慰安婦も戦後賠償も、「なんとなく自国が正しい」という個々の曖昧な感情が水面下にあり、それをマスメディアが誇張し、それぞれの論点が両国間でずれていることを強く認識した。また、独島を自国領とする根拠を問うた学生が私の所属する「共通課題」チームであったことから、やはりどれだけ安倍首相が主張するような未来志向の内容を話し合っても、過去の蟠りを解消しなければ前には進めないことも理解できた。一方で、それを解決すれば日韓が国際社会において素晴らしいパートナーとなるであろうことも確信できた。

現在冷え込んでいる日韓関係は修復すべきなのは間違いない。約 200 ある国の中で島国である日本が隣人と呼べるのは唯一韓国のみと言っている。その隣人と和解し、共に歩む基盤を作らなければこの先の国際社会で大きなハンデとなり得る。それを防ぐ為にも、何より自国が行ったことを正しく理解する為にも、自分が相手国に持つ感情の根拠をもう一度よく考え、必要があれば調べ、愛国心を抜きにした各自の主張を形成する必要があると考える。また、戦後 70 年の今年、日本では 8 月に入ってから連日のように原爆の被害に遭った広島・長崎、被爆者の特集を組んでいる。その一方で、日本軍が他国にもたらした苦しみにはなかなかスポットが当たらない。メディアや教育によって被害者意識の隅に追いやられた加害者意識を一人ひとりが強く自覚しなければならない。加えて、私自身も今回の経験を様々な人に伝え、少しでも韓国と日韓問題について日本人が再考するきっかけを作れるよう尽力したい。

3. セミナーについて

外国語教育、異文化理解教育においてはある程度達成できていたように思う。韓国語での発表は、第二言語でセミナーを行う苦勞を、身をもって体感出来たし、現地に行ってから、更に韓国語を学ぶ際の基礎となった。また、同徳の学生と寝食を共にすることで上記のような日韓の違いを理解し、それを受け入れる努力が出来た。ただ、セミナー期間が一週間弱ということで、どうしても最終発表に追われ、同徳周辺以外の場所や同徳の学生以外の韓国人と触れ合う機会は（店舗以外では）少なかった。期間の短さを考えれば仕方ないことだが、その中でももう少し工夫してより多くの韓国人と接触する場、日韓問題を考え、知る場を設けてはどうかと思う。特に、江華島へ訪問した際は暑さのためにスケジュールが大幅に変更し、生徒たちも連日の疲れが丁度体調不良という形で現れた時だった。時期を考えて、もう少し有意義な日程を組んで頂ければと思う。

韓国との出会い

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たち1グループは日韓の抱える共通課題についてテーマを設定して問題点を考え、共に解決策を模索した。テーマ設定だが、日韓の共通課題として多くの問題が挙げられるが、特に女性の社会進出が遅れていることを問題視した。その理由は、日本の学生も韓国の学生も女子大学似通っており、女性という視点から両国の問題を共に考えていきなかったからである。事前活動では、私たち日本の学生は、安倍首相が実施している女性を支援する政策を調べ、改善すべき点を検討し、自分たちなりの解決策を考えた。韓国の学生も、政府の行っている女性を支援する政策について調べてきた。日本側が、女性の雇用に対する政策に注目したのに対し、韓国側は女性の育児と仕事の両立のための政策に注目した点が若干異なっていた。日韓のディスカッションの段階では、女性の育児と仕事を両立させるためにどう社会が変わっていくべきかという論点で、政府、民間、教育が取り組むべき対策を議論しあい、解決策を提示した。

1.2 私の学び

私は、このグループ学習で、韓国側の学生の発想が柔軟で、クリエイティブなことに驚いた。日本側の学生が無意識のうちに、この意見は実現しないのではないかと、反対されるのではないかと考えて口にしないうような考えも、韓国側の学生は発言する。だからこそ、日本側の学生が思いもしなかったようなアイデアを韓国側の学生が発言してくれた。そして、韓国の学生は、それぞれが自分の意見を持ち、発言することを重視していた。彼女たちは、自分の意見をはっきりと伝えると同時に、あなたは思うの？と他の学生（日本人、韓国人に限らず）の意見を積極的に聞こうとしていた。最初は韓国の学生の積極的な態度に戸惑ったが、彼女たちは自分たちと意見が異なっても、積極的に私たちの意見を聞いてくれたし、私たちが差異を恐れずに発言することを望んだ。その彼女たちの誠意に応えるためにも、自分の意見を伝えようと思うことができた。だからこそ、短期間で充実したディスカッションを行うことができたのだと考える。また、今回は、韓国側の学生が日本語で議論してくれた。韓国という異国にいながらも、彼女たちが日本語を使ってくれたからこそ、私たち日本人の方が圧倒的に有利だったと考える。日本にいる間に日本人学生も韓国語を学んだが、日常的な会話でさえなかなか習得できなかった。そのように考えると、学問的な議論を外国語で行うのは、非常に難しく、不利であり、自分の意見を思い通りに伝えられないことへのストレスは大きいと容易に想像できる。それでも、日本語で最後まで積極的に議論してくれたことが非常に有り難かったし、彼女たちを尊敬した。また、同時に、対等な対話をするためにも、日本側が乗り越えなければならない課題だと感じた。また、今回共通課題について取り組み、互いに学ぶべき点があると同時に、同じ課題を抱えているからこそ、共に協働できるパートナーになり得ると考える。日韓の関係は良好でないかもしれないが、共に共通の課題に取り組むことをきっかけに、対話を促進できるのではないだろうか。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

日韓の文化の違いで特に感じたのは、韓国は他者に対して無関心ではないということだ。日本の特に都会では、他者に対して無関心であると思う。私は、韓国で道に迷ってしまったのだが、その時に道を尋ねた時、韓国の方はとても親切に、詳しく目的地への行き方を教えてくれた。日本人でも親切な方はいるが、自分の時間を気にせず、丁寧に教えてくれる人はなかなかいないかもしれない。そして、それは私たちの韓国での生活をサポートしてくれた韓国の学生たちにも言えることで、彼女たちは私たちが何をしたいか、困っていることはないかを常に気にかけ、配慮してくれた。例えば、何を食べたいか、どこに行きたいかなど日本の学生の希望を聞くと、すぐにレストランや、場所について調べて連れて行ってくれる。どんな些細なことも一生懸命サポートしてくれる。また、彼女たちは、日本人がよく建前を使うお世辞よりも、本心を聞きたがる。最初はそれに困惑した。「本当はどう思っているの？」と聞かれると、答えられなかった。しかし、建前を使わず、本心を伝えることを望んでくれる人と過ごすのは非常に心地よいことに気づいた。もちろん、場合によっては建前を使うべきときもあると思うが、建前ばかりを使っていると、自分の本心さえも分からなくなったり、自分が偽善者のように感じられたりすることがあり、時々疲れてしまう。しかし、私はこのセミナーで、私たち日本人にとっては当たり前で、暗黙の了解であり、時に息苦しくなる常識が、絶対的なものではなくて相対的なものだとは分かった。このような発見が積み重なることで、異文化理解・（客観的視点での）自文化再発見ができるのだと考える。

2.2 日韓関係に対する学び

現在の日韓関係はあまり良好ではない。両国の首相・大統領は会談をしない。多くの日本人・韓国人がメディアというフィルターを通してしか相手の情報を入手していない、そのため、メディアの情報が嫌韓思想・反日感情を形成、助長してしまう場合が多い。今回の日韓セミナーで、私たちは互いに対話することを重視した。互いの意見の差異を恐れずに、差異を認めながらも互いに解決策を模索していった。そのような対話から生まれた感情は決して負の感情ではなかった。逆に、他国に対する、相手に対する肯定的な感情が生まれた。さらに、ここで知った互いの良さを、周囲の人々へ伝えたいという行動につながる強い気持ちも持つことができたし、実際多くの人が日韓セミナーで感じたこと・学んだことをSNSで発信していた。こう考えると、日韓関係を改善していくためには、メディアを通してだけでなく、直接的な接触、交流、対話が非常に重要だと考える。日韓のトップである首相、大統領にも対話をしてほしいと強く願う。

3. セミナーについて

このセミナーはシティズンシップ教育のために、対話を重視し、お互いに正面から向き合うことを目指している点で素晴らしいと思う。また、対話の内容が、歴史や嫌韓思想・何日感情、戦争など、非常にナイーブだが避けては通れない問題であったことも、必要なことだったと考える。そのような意味では、非常に有意義なセミナーになった。しかし、改善点を挙げるとすれば、先述したように、日本人学生の韓国語の習得が不十分であったことだ。もちろん、前回までのセミナーと違って、日本人学生が最初の発表の時だけは、事前に練習した韓国語で発表したことは大きな進歩だったと思う。次回は、より日本人学生が韓国語を使えるようになるとさらに良いセミナーになるのではないだろうか。もう一つ、改善点を挙げると、グループでディスカッションする時間が少なかったことである。今回、非常にナイーブな、しかし両国にとって必要不可欠なテーマを取り上げたので、もう少し時間があれば、さらに深く議論できたのではないだろうか。

直接触れ合うことの大切さ

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たちのグループは日韓の歴史問題、特に領土問題と慰安婦問題について両国でどんな認識差や考え方の違いがあるのかを学び、また歴史問題に端を発する日韓関係の悪化をどう改善できるかを考え発表した。具体的には、事前に歴史問題について詳しく調べたり両国で歴史問題や日韓関係についてのアンケートを実施しその結果から認識差や考え方の違いを読み取り、それらの違いがどう日韓関係に影響しているか、どうやったら克服できるかを考え、また実際に会って協議した。

1.2 私の学び

まず領土問題について私が実際に協議してみても学び得たことを書く。日本のメディアの報道では、韓国が竹島／独島を不法に占拠している、といった内容がほとんどであり、韓国が具体的にどういった根拠を挙げてどういう主張をしているかはほとんど語られない。だが実際には韓国側は証拠と確信を持って領有権を主張していた。また、協議しているときに、島の利権の共有という案を日本側学生が提示した際、それでは国民は納得しないと言われた。それまでは私は竹島／独島問題というと排他的経済水域を広げるために、またはその海域にあるとされる豊富な資源を得るために両国は主張していると考えていたが、そういったことから、少なくとも韓国の国民はそうでなくてあるべきものがあるべき姿に戻すという信念を持って主張し、その視点からこの問題を捉えていると感じた。この大きな差の為に日韓のこの問題に対する温度差が生まれているのではないかと考えた。この問題の解決のためには、互いが同じような温度で考え協議することが大事であり、協議の末の日韓共同研究という最終案は日韓が同じ程度協力して結果を出せるという点で納得のいくものであった。それから慰安婦問題について述べていきたい。慰安婦の実体験を描いた動画をグループの韓国人の子に同時通訳してもらって視聴したが、日本兵の残忍さや卑劣さが強く印象に残る内容であった。一方の日本では戦争に関する作品ではほとんど日本が「被害者」として描かれ、日本兵が不幸な存在として描かれている。おそらくどちらも事実であろうが、偏った内容になっているため意識にずれが生じてしまっている。こういった意識の差からお互いの意見はすれ違ってしまわないか。日本国民や政府が韓国民が何を目に見ているかに注意し、加害者意識を持つことでもっと慰安婦問題に対し誠実な対応がとれるという私たちのこの問題に関する最終案が実現すれば、この問題の解決は不可能ではないと考える。領土問題でも慰安婦問題でも意識の差が解決を遅くしていることが分かり、解決のためには政府・国民のどちらもの、特に日本側の意識を変えていくべきだと感じた。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

まず感じたのは、日本人よりはっきりしている人が多いということだ。討論の際にもはっきり意見を言うし、どこか連れて行ってくれるにしても必ず目標をもって行動していた。私は特に優柔不断であるからとても迷惑かけたように思うが、はっきりと意見してくれるためとても助かった。また、人との距離をつめてくるというのも特徴としてあるよう

に思う。学生たちとはすぐ仲良くなることができ、街中の人もよく話しかけてきた。電車の中では私を引っ張ってまで席に座らせてくれた人もいた。その人懐っこさと親切さは日本ではあまり感じられないためとても新鮮であった。それからその他にも食文化や服など文化の違いはたくさんあったが日本人と類似している点もいくつかあり、とても興味深かった。

2.2 日韓関係に対する学び

私は韓国の人々は一定以上の人が反日意識を持っていると思っていたが、そうではなくほとんどの人が日本政府には納得できないが日本の人々に対しては良い印象を持っているということを聞き、またそういった友好的な感情を学生からも街中の助けてくれた人からも感じる事ができた。そして今までそういった偏見を持っていたことを申し訳なく感じた。日韓が本格的な友好の道を歩めていないのはやはり政府の対応に原因があるだろう。韓国民だけでなく日本人も感じる政府への違和感をそのままにせず、政府に惑わされずにどう自分の考えを形にできるか、韓国の人々と仲良くできるかというのを個人単位で考えていきたい。それから日韓関係において、関係改善のもう一つ大きな弊害となっているのはメディアではないかと考える。日本のメディアの偏向報道や嘘は深刻であるし、実際に会ってみて分かったことも多い。メディアによって作り上げられた「韓国像」を見続けるのではなくそれに疑問を呈し自分の知ってる韓国人の人々を信じていけるように、やはり直接知り合うことは大切である。今後こういった直接交流の機会や草の根の交流が増えていけば自然に関係改善へ向かうと思われる。

3. セミナーについて

私はこのセミナーに参加して韓国の人々と触れることができ、今まで抱いていた印象が全く違うものだ気づいた。もちろん今までに何回も韓国人と触れ合う機会があったが、ここまで大きく変わることはなかった。やはりその国に実際に行くことで学生だけでなく街中の人も触れ合うことができたからだろう。国際理解や異文化理解を深めるためにこういった直接の関わりが重要になってくる。また短い間でもその国のマイノリティーとなることで普段のようにマジョリティとして生きていては気づかないようなことも感じ得た。これは他者を尊重できるようなシティズンシップを育成するために必要なことである。それから今回のような相手の言語を用いて発表するという経験も相手の苦勞を理解するために必要なことであったと考える。言葉の壁はしばしば大きな溝を生むがそれを越えれば異文化理解に大きく近づくことができると感じた。私は言葉の壁を越え切れなかったように感じるため、次にこういった機会があればそれを越えることを目標にしたい。総合的に、このセミナーは私の意識を大幅に変えることとなり、また国際理解・異文化理解のために大きな意味を持っていると考える。この経験から大切な隣国である韓国との関係改善の為に私は今何ができるかを考え続けていきたい。

日韓セミナーを通して

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私は今回のセミナーで、「歴史」グループに所属し事前学習及び発表を行った。なぜこのグループを選んだかという、日本と韓国の人々の間の歴史認識にどのような差があるのか、またどうすればその差を埋めていけるのかを考えたいと思ったからである。まず事前学習では、日本グループのなかでそれぞれ担当を決め、私は日韓の歴史教科書について調べた。それから、韓国側の学生と共同で作成した、日韓の歴史に関するアンケートを自分たちの周りの学生に答えてもらい、その回答をグループでまとめた。

1.2 私の学び

まず、私が事前学習において学んだことは、「日本と韓国の間だけでなく、日本人学生の間にも日韓問題に関する認識に差がある」ということである。私たちのグループは領土問題、慰安婦問題などを含めた日韓の歴史に関するアンケートを行ったのだが、領土問題に関して日本人学生は、「歴史的、国際的に見ても日本の領土だと思う」と答えた人もいれば、「日本の領土であると習ったが本当にそうなのかわからない」、「どちらの国の主張が正しいのかわからない」といった曖昧な回答も多く見られた。慰安婦問題は認識の差がより大きく、全く知らないと答える人もいれば、この問題に対する両国の立場まで理解していると言う人もいるなど回答は様々であった。領土問題に関しては、学校での歴史の時間に習ったという人、先生など周りの大人に教えられたという人、あるいはメディアでよく耳にするという人が多かった。しかし慰安婦問題に関しては学校で教えられることはほとんどなく、自分から知ろうとしないとなかなか認識できない問題なのではないかと思う。一方、韓国側の学生は、日韓問題に対してある程度共通の認識を持っているという印象を受けた。アンケートの結果を見ると、どの項目に対しても日本側の回答と比べ明瞭な回答が多く、普段から日韓問題に関心を持ち、それぞれが自分の意見を持っていることがわかった。例えば、「日韓関係改善にあたって邪魔になっている要因は何だと思うか」という質問に対して、多くの人が「日本が過去の過ちを認めず、反省・謝罪しないこと」と答えるなど、回答にある程度の統一性があったように思う。

次に、私が実際に韓国の学生たちと直接話したことや最終発表を通して学んだことについて報告したいと思う。まず領土問題において、竹島／独島に対する両国の学生の考えの違いに気づかされた。日本側の学生は、領土問題に関する知識が不足していることも関係しているのかもしれないが、竹島は日本の領土であると認識している人は多いものの、一人一人が強く「竹島は日本のものだ」と思っているわけではないように感じた。それに比べて韓国の学生は、領土問題に関して日ごろから強い関心を持った上で一人一人が「独島は韓国の領土である」というはっきりした考えを持っている印象を受けた。私がそう感じたのは最終発表のための話し合いの時だ。私たち日本側は「竹島／独島の利権の二国間での共有」を提案したのだが、それは韓国側の学生にとっては納得できる案ではなかったため、最終的に「日韓歴史研究会」を設置して共同研究を行い、両国が納得できる共通認識を作り出していこうという結論になったのである。

また、もう一つ気づいたこととして、慰安婦問題も含め日本側には「加害者としての意識」が薄いということが挙げられる。戦争についてとりあげた映画やドラマは日本にもた

くさんあるが、そのほとんどが「被害者」としての日本や日本人を描いたものではないだろうか。学校教育の中でも、日本が加害者であるという視点で戦争について学ぶ機会はほとんどないような気がする。もちろん被害者であるという視点から学ぶべきことや考えるべきことは多くある。しかしそれだけでは、日本が傷つけた、韓国を始めとする様々な国の人々の考えへの理解が深まらないのではないかと。加害者としての意識を持たなければ、韓国の人々が求める「日本が過去の過ちを認め、心から謝罪する態度」を実現させていくことはできないのではないと思う。「韓国の人々は、『遺憾』や『残念』などの言葉ではなく『ごめんなさい』という、謝罪の気持ちをはっきりと表した言葉を求めている」という韓国の学生の意見がとても印象に残っている。学校教育やメディアによって得た知識だけでは、歴史の限られた側面しか認識できないのではないだろうか。私が今回このような考えを持てたのは、やはり直接韓国の学生たちと話し合い、彼女らの考えを聞くことができたからである。日本側だけでなく韓国側の視点から歴史について考えたのは初めてであったため、歴史に対する自分の理解が深まったことを実感した。今後も自分から様々な情報を集め、客観的な視点で分析し考えることを続けていきたいと思う。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

韓国に来るのは今回が3回目であったが、学生たちとの9日間の交流を通して、韓国の人たちは本当に優しく情に厚い人たちだと改めて実感した。自分がもてなす方の立場であったとしてもここまでできないのではないと思うくらい、常に気を遣ってもてなしてくれたように思う。私たちが行きたいところや食べたいものを言えば場所を調べて連れて行ってくれて、博物館での展示などは辞書で日本語を調べながらひとつひとつ解説してくれた。さらに最終日には手紙やお土産を用意して空港まで送ってくれて、本当に感謝の気持ちでいっぱいだった。9日間一緒に生活する中で、「日本」と「韓国」の文化差を感じて苦労したことは特になかったように思う。もちろん、一つの料理をみんなで突っついて食べる文化など日本とは少し違うなど感じることは多少あったが、楽しみながら異文化に実際に触れてみることで、韓国の学生たちと初めから近い距離で接することができたように感じて嬉しかった。

2.2 日韓関係に対する学び

日本と韓国は現在、文化や経済などの面で良い交流ができているといえる。今回のセミナーでも、日本のアニメや漫画が好きだと言ってくれた学生がいてとても嬉しく思った。しかし日韓の政府同士の関係は良好とは言えない。韓国の学生たちを対象にしたアンケートの結果を見ても、日本政府に対してはあまり良い感情を持っていないことがわかったので、その理由について考えてみた。まず、学校で学ぶ歴史の中で登場する「日本」は、壬辰倭乱（文禄の役）、植民地化など悪者としての印象が強く、歴史を学ぶにつれ自然に反日感情が生まれるのではないだろうか。また、一貫した態度をとらず韓国の人々が求める「謝罪」をしようしない日本政府に対しても、自然に「嫌い、信用できない」という感情を持つようになるのではないかと考えた。逆に、日本の人々が韓国を嫌いになることがあるとすればその要因は何であろうか。学校教育の中で知る韓国の姿だけでは、「嫌い」という感情にはあまり結びつかないような気がする。やはりテレビなどのメディアで目にする「韓国」の印象に影響されてしまうと、良い印象を持ちづらいのではないと思う。日韓セミナーを終えた私たちは、今後日韓の間のどのような問題においても、自分の国だけでなく相手国の考え方や姿勢を積極的に知っていこうとし続けることが大切なのではないだろうか。今後は自国のメディアで得た情報だけでなく韓国のニュースを見たり、

あるいは今回のセミナーで出会うことができた韓国の学生たちに意見を聴くなどして、客観的・総合的に物事を判断する力を養っていかねばならないと感じた。

3. セミナーについて

このセミナーで、韓国の学生たちと一緒に9日間を過ごして私が思ったのは、ただ国際交流を楽しんだだけではなく、日韓が抱える様々な問題について一緒に考えたことに大きな意味があったのではないかと、ということである。同じ部屋で生活し、一緒に韓国料理を食べ、ソウル市内のいろいろな場所を案内してもらいながら友情を育んだということだけでも私にとっては素晴らしい異文化体験であった。しかし、韓国の人たちが日本政府や領土問題・慰安婦問題などについてどう考えているかは、たとえ身近に韓国人の知り合いがいてもあまり聞けないことだと思う。あえてそのような話題について議論し、共同発表を行ったことで私は、「これまで」と「これから」の日韓の関係についての関心を高めることができたように思う。韓国の学生が言っていた、「日本人は日韓の問題に無関心な人が多い」と聞いて悲しいという言葉も印象深かった。今回のセミナーをきっかけに、日韓関係も含めた日本の外交や政治全体についてもっと学び、それらについて自分で考え、意見を持つておかねばという思いが生まれた。このような点において、今回の日韓セミナーに参加できたことは私にとってとても有意義だったといえる。

韓国実習を通して

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私の所属する2班・歴史グループでは、日韓の解決できていない問題について歴史という観点からアプローチすることを目指した。題材に選んだのは、近年特に問題になっている竹島／独島領有権問題と従軍慰安婦問題の二つ。重いテーマであり資料も膨大なため、事前調査の下調べは手分けして行った。私は竹島／独島領有権問題について、今までの両国の公式の協議や宣言をたどり、どうして両国の領有認識にずれが生じてしまったのかを考えた。韓国で韓国側の学生と会ってからは、お互いの調べた結果を踏まえたうえでグループによる話し合いを重ね、現状よりもより納得できる解決策を模索した。

1.2 私の学び

まず事前調査を通じて私が最終的に、そして痛切に感じたことは、このような国際問題に対しきちんと向き合い、考えるためには、ニュースの情報を受け取るだけでなく自分で色々と調べてみる必要があるということだ。意見・認識の食い違う国際問題に対して主体性、積極性が無ければいつまでも誤解を解くことはできない。実際に日本のメディアからは聞いたこともないような事実が次々と判明した。いくつか例を挙げてみる。

まずは、1965年の日韓基本条約における竹島／独島の領有認識からもうずれば始まり、日本の棚上げという消極的な姿勢に対して韓国では自国の領土とされている。また、日韓共同宣言で“過去に収束”を宣言するも、韓国の議会はこれを後に破棄している。両国で取り決めた宣言を一方的に破棄することがどうこうということではなく、一体日本人のどれほどがこのことを知っているのか、が問題だ。日本の報道では、韓国の不法占拠という言葉ばかりが叫ばれていた。事前調査のアンケートでも、日本人が韓国人に対して否定的なイメージを抱く原因の一つに「もう済んだはずの戦後補償や過去の歴史などについてまだ謝罪、賠償を要求してくる」といった意見があった。しかし、日本では宣言によって一連の補償は終わったとみなされていても、韓国ではまだ終わっていないのである。賠償をするかしないかはまた後の問題として、この認識の違いをまず把握することが重要ではないか。

更に私は、このような両国民の認識の誤解が慰安婦問題の拗れの原因になっていると感じた。先に述べたように日本人は共同宣言によって補償は終わったと考えているから、慰安婦問題を糾弾する韓国人を理解できず、しつこいと悪感情を抱いている。しかし韓国側の学生と議論した末に分かったのは、韓国人は慰安婦問題を戦後補償というより日本の国家犯罪として糾弾しているということだ。戦後処理とはまた別なのである。そう考えるといつまでも責任を認めず謝罪の姿勢もない日本に韓国が憤慨する、という立場も理解できる。終わった戦後補償として考える日本、国家犯罪の事実を認めてほしい韓国、相手の思惑を両国共に理解できない現状。今のままでは永遠に議論は平行線だ。今回このセミナーという貴重な経験を通して、このような解釈に至った私の考えを周りに広めていく必要を感じた。と同時に、より多くの人が同じ体験をして、相手の国の立場で、主体的に、問題に向かいあうことが問題解決のカギとなるのではないか。日韓に限らず多くの国際問題に関して同じことがいえるだろう。それを痛切に思い知ることができたのが、このセミナーで私が得た最大の学びである。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

韓国で最も印象的だったのは、人々が地下鉄で他人に席を譲る姿勢だった。日本でも老人や妊婦さんに席を譲ることはあるが、韓国ではもっと譲る対象が幅広い。怪我人と老人、子連れの母親は当然として、ベビーカーを押した親でも、乳児を抱いた屈強そうな若いお父さんでも、また地下鉄だけでなくバスでも、みんな座らされている。また公共の場で奔放にしている子供が多いのだが、知らない人でもそれをにこにこ眺めていたりして、全体的に子連れ・子供人寛容な社会だと感じた。日本では現在、子を育てる母親の社会的立場の弱さ、子供を育てにくい環境が問題になっているので、韓国を見習えば相当子供を育てやすくなるのではないかと感じた。

2.2 日韓関係に対する学び

近年の日韓関係については、陰湿なムードを残念に感じることはもちろん、相手に対する興味や理解しようとする姿勢そのものの希薄さが非常に問題だと感じている。そしてその原因として、「相手の国の状況や考えが自分は大体分かっている」という傲慢な勘違いがあるのではないかとこのセミナーで思い至った。現在世界中でグローバル化が進み、インターネットを介してあらゆる情報がすぐに手に入り、更にかつてより簡単にお互いの国を行き来することができる。相手の国の経済状況のニュース、反日デモの動画、SNSやチャット掲示板等での一般人の議論さえも、誰でも簡単に目にすることができる。そんな中で多くの人たちは、実際に韓国人に意見を聞くのではなく、それらの情報を統合して勝手な自分の解釈で韓国人の“意見”や“思考”を作り上げてしまう。私は今まで韓国に行ったこともないのに「韓国は今経済状況が良くないから、日本を槍玉にあげて憂さ晴らしをしている」とか「もともと他民族のことが好きじゃないんだよ」とか「実は韓国は日本にかまってほしいんだ」等と主張する大人を大勢見てきた。真偽はどうあれ、勝手に無責任な意見である。いくら参考文献・ソースが豊富だろうと、実際の韓国人の姿を目の当たりにしなければ、発想は日本人の域を出ることは無く、相手の立場になって考えることは不可能だ。このセミナーでは共同生活の中で色々な話をする中で、外見も生き方もほぼ変わらない韓国人のものの考え方の違いに驚かされることが多々あった。同じメーカーの服を着て同じアニメを見ていても、目の前の女性は似て非なる別の文化の世界で生きてきた人なのだ、と度々バディを新鮮に感じていた。私達は互いにグローバル化の影響を受けた社会で生きているが、見てきたものも聞かされたことも知っていることも考え方も、そこまで共通していないことをもっと弁えるべきだ。グローバル教育で繰り返される「異文化理解とは相手の違いを受け入れること」とはそういうことなのではないか。

つまり、現在の日韓関係の状況を打開するには実際に韓国人と交流し、つながりを持つことが一番だ。相手の違いを理解し、受け入れることで相手の立場にたって考えることができる。今後の関係を良好にしていくためには交流こそが最も欠かせない要素になるだろう。

3. セミナーについて

今まであまり韓国という隣国に対し興味がなかった私ですが、このセミナーで竹島／独島領有権問題と慰安婦問題という重いテーマを勉強できたことはとてもいい経験でした。先生は今年のテーマ比較的重めだと仰っていましたが、せっかく韓国人と議論する機会を与えられているのですから、非常に有意義なテーマだと思います。また事前調査の発表を韓国語でやらせていただいたことも、とても苦痛な体験ではありましたが、日本語で終始

生活してくれる同徳の学生の凄さが分かるとともに感謝し続けるきっかけになりました。江華島滞在やDMZ 見学、国立中央博物館見学も充実していてとても勉強になりました。特に国立中央博物館は個人的にとても興味深く、楽しく、またバディとの話のタネになったり勉強熱心な韓国の子供たちを見られたりするのでとてもいいと思います。今回は猛暑のため急きょ決まったのでしたよね。毎行行ってはどうでしょうか。展示物以上に様々なものを学べた場所でした。

初めての韓国訪問で実は色々と不安だったのですが、様々な経験ができたと思いますし、またそれ以上に楽しい実習でした。今回の滞在で韓国が大好きになりました。今回のセミナーに参加できて本当に良かったです。森山先生ありがとうございました。

いつもと違う、初めての感覚の海外体験

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私の所属するグループは歴史グループだった。これからの日韓関係改善にとって避けては通れない歴史問題であるが、その中でも特に「領土問題」と「慰安婦問題」についてお茶大・同徳女子大の共同解決策を提案するという形で発表を行った。その過程では、真の友情を築き上げた友達同士と同じ言語を介してお互いの主張を理解しあうことができるというこのセミナーならではの環境なしでは得ることのできなかった学びをたくさん得ることができた。活動の事前学習としては、日本の大学生に「領土問題」と「慰安婦問題」についての意識調査アンケートを両国で実施した。

1.2 私の学び

まず事前調査についてである。「領土問題」と「慰安婦問題」についての大学生を対象にした意識調査であったが、両国の結果を比べてみて、如実に表れていたのは問題に対する興味・関心の温度差の大きいことである。両国の学生共々皆、問題の認知度は高かったものの、知識量の豊富さと一人ひとりが問題に対する自身のオピニオンを持っているという点で韓国側の学生たちの方がより熱意を持って問題を捉えているということが分かった。特に、韓国側の学生たちの歴史問題に対する日本への要望は具体的なものであり、同世代の韓国人の率直な歴史に対する考えがよく分かり、新鮮であった。これは後に共同解決策を手掛ける過程で大変有用な資料となった。

実際に共同解決策を構築する過程での学びを問題別に述べる。まず「領土問題」では、韓国の「独島」への並ならぬ思いとそれに気づき歩み寄ろうとする日本の姿勢が重要であるということである。議論において日本側は、共同統治あるいは永久放置区域として妥協しあう案を提案した。わたしは正直、この案が韓国側の学生も同意してくれるようなベストな案ではないかと考えていた。しかし、韓国側の学生の答えはノーであった。常日頃あんなにも優しく我々をもてなしてくれた韓国の友人たちも、ここでは譲らなかつた。わたしはこのとき初めて、彼らにとっての「独島」の存在の大きさを理解することができた。そのとき、私の中にある「なんとなく譲れない竹島への思い」が完全に消えた。「譲りたい。それでなんとなく日本に心許してくれるなら譲りたい。」というような感情を抱いた。このように相手の思いを知り、歩み寄ろうという機運が高まれば、日本側としては、この「領土問題」をむしろ関係改善のチャンスにできると考える。まずは相手の思いも知ること。それが難しいが、これだけで両国の距離がぐっと縮まるのではないか。次に「慰安婦問題」である。ここでは、両国における女性の人権への意識レベルがいかに低いかということ学んだ。未だにメディアでは「慰安婦は仕様がなかった」と兵士に同情するようなドキュメンタリーを描いているように、70年という長い年月を経ながら、女性を卑下する日本の価値観は何ら変わっていない。韓国でも、現在「慰安婦問題」が軽視されがちであるという。このような現状に怒りしか湧いてこないが、「慰安婦問題」を風化させないように我々の世代が語り継いでいくことが大事であると考え。慰安婦に関するさまざまなメディア（写真、アニメなど）を一度見さえすれば、国籍を超えて同世代の女性として怒りを感じずにはおられないだろう。その感情を周りと共有しようとすれば、相手にも共感してもらい（少なくとも女性には伝わるであろう）、少しは状況が変化するのではないだろうか。先

日、アメリカ国務省が世界各国の人身売買の実態をまとめた報告書のなかで日本を「強制労働や、子どもを含む売春の人身取引の被害者が送られる国」と明記したというニュースもあったが、日本はもっと女性の地位が低いということを自覚し、そして恥じるべきではないか。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

韓国の学生と交流して一番強く感じたことは、韓国人がいかに熱い人情に満ちている人間かということであった。パディの友人に言われた言葉で印象的なものがある。「日本人は『ありがとう』と『おいしい』を言い過ぎだよ。」という言葉である。わたしは意識することなく「ありがとう」と「おいしい」を発していたためにとても驚いた。単純に韓国の食事はすべておいしいし、友人に対してはいつも感謝の気持ちしかなかったのである。ここで考えたのは、韓国人は相手への気遣いの当たり前のレベルが極めて高いということである。彼女たちの気遣いといえば、観光で街に出かけ、近くだから日本領事館前の慰安婦像を見に行こうとなった際に、「本当に見に行っても大丈夫？」と確認されたことには本当に言葉にならないほどの感情を抱いた。相手がどうしたら居心地よくいられるかということに彼女たちは当たり前のこととして自然にやっていたのである。わたしは今回初めて韓国を訪れたが、この熱い人情に懐かしさを感じた。忘れかけていたような人間と人間のまっすぐな愛情の交換を思い出したように感じた。ただ一つ障壁があったとすれば、日本人の「本音と建て前」が韓国の学生たちにとって少しだけ不安を感じさせていたということである。日本ではお互いがものををはっきりと言わない関係である場合が多いため、多少「建て前」を使用するようなどきがある。しかし、素直でまっすぐな韓国の友人たちを前にして、「建て前」を使おうというような気にはならなかった。このように、韓国人の熱さは自国の文化をも圧倒してしまうような大変なものではないであろうか。

2.2 日韓関係に対する学び

まず、韓国における日本の存在がいかに大きいものかということはこのセミナーを通じて感じた。韓国の歴史の教科書の1／4が日本についての記述であるという。景福宮の前には大きな李舜臣の像があり、彼を題材にした映画は大ヒットし、国民から大変な支持を得ている。私のパディのおじいさんは日本軍に徴兵され、日本人より前列に立ち戦線で戦ったという。日本が韓国につけた傷の数は数え切れず、その大きさは計り知れない。私は幾度となく韓国の地に居たたまれなく感じた瞬間があった。しかしその一方で、日本のことが好きだと言ってくれる友人たちがたくさんいる。日韓で良好な関係を築くベースは、日本のこれまで犯してきた罪故に散々なものであるにも関わらず、日本と手を結ぼうとしてくれる彼女たちは大変な希望である。そしてこのセミナーでそんな韓国の学生と日本語を用いて交流し、真の友情を築き上げた。そして思うのは、彼女たちを悲しませたり、傷つけるようなことをしたくないということである。その時同時に、韓国を悲しませたり、傷つけたりしたくないと思った。このように、国籍を越えて同じ言語で人と人がお互いが愛情を持って接することができるような関係を築けた瞬間に、相手の所属するコミュニティである国にも思いを馳せ、愛着を持てることができるのではないか。これがわたしの日韓関係に対する学びであり、関係改善に向けた手がかりである。

3. セミナーについて

今回のセミナーほど充実した海外体験はなかった。その国の風景や食事ではなく、その国の人と信頼関係を築けることに充実感を覚えたのは初めての体験である。これが達成さ

れたのも、セミナーのおかげと言うに尽きない。具体的には、年齢が同世代であったこと・寝食を共にしたこと・相手のホスピタリティ、そして何より言語による意思疎通がスムーズであったことである。もし英語であったら、決して成功はなかったであろう。日本語を用いることで、こちらはもちろん自分の考えをスムーズに伝えることができたし、彼女たちの日本語のスキルと努力が素晴らしかったために、ちゃんと心を通わせた不足のない意思疎通ができたという実感がある。自由に使えない言語は、多少操れても言えることが限られて話すことにも億劫になってしまうことがある。日本語であったからこそ成功したのではないか。また、セミナーの途中段階で、このことに気付き同時に韓国語をもっとちゃんと学んでいけばなあというようにも何度も感じた。それは、彼女たちに示しがつかないという動機、彼女たちの気持ちをもっと知りたいからという動機などさまざまあるが、言語の重要性を実感したセミナーでもあった。

日韓セミナーから学ぶ日韓の違いと異文化理解

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

歴史グループ活動内容

歴史グループでは事前に、慰安婦問題や領土問題といった日韓の歴史問題や、日韓の歴史教育の違い、国交正常化の後の50年間で起こった日韓関係に関する出来事について調査した。また日本の学生も韓国の学生も、日韓の歴史問題や歴史という観点から見た相手国への印象を問うアンケートを実施した。それに基づき一次発表を行い、二次発表に向けてグループで集まり、意見交換を行った。そこでは日韓の歴史問題の中で特に大きな問題であると考えた竹島問題と慰安婦問題に焦点を当て、日本と韓国のそれぞれが意見と解決案をまとめた後、お互いが納得できる共通の解決策を考察した。

1.2 私の学び

グループ活動を行う前は、日本側と韓国側とでの歴史問題の認識の差に疑問を持っていた。日本でのアンケートの回答からは、日本人が日韓の歴史問題へあまり関心を持っていないことが読み取れた一方で、韓国でのアンケートの回答からは、韓国人が日韓の歴史問題へ強い関心を持っており、現在の日本政府の対応には全く納得できていないという様子が伝わった。また日本も韓国も、お互いの歴史認識について「歪曲している」という考え方を持つ人がいる。私自身も日本で生まれ育ち、日本の歴史教育を受けてきたため、韓国の歴史認識や問題意識について理解できない点があった。

しかし実際にセミナーに参加し、韓国の学生と直接対話する中で、徐々に韓国側の歴史認識や問題意識が理解できるようになった。

例えば、日本人にとって慰安婦問題は「どうして何度も日本が謝罪してお金まで払っても韓国は納得しないのか」と感じられる問題で、私もそう感じていた。そもそも多くの日本人にとって慰安婦問題は名前をたまに聞く程度の関わりしか持たず、何が問題とされているのか、韓国が具体的に慰安婦問題のどこに問題意識を持っているのかを把握している日本人は少ない。

一方、韓国の学生から意見を聞くことで、韓国にとってはお金による日本の謝罪はきちんとした謝罪とは受け取れず、また日本政府の慰安婦問題に対する認識に一貫性がないために、「本当に謝罪の気持ちがあるのか」という不信感に繋がっていた。慰安婦問題自体に関しても、韓国では新聞やニュースでの報道が積極的になされ、インターネット上では国民感情が煽られるようなショッキングな映像や画像も広く閲覧されている。

このように日本と韓国では、人々が同じ問題に対してどのような情報をどれだけ得ているのか異なる。そのことを知っておかなければ、どうしても自分の持つ前提や価値観で相手の考えを判断してしまい、「歴史の歪曲だ」という排他的な意見に繋がってしまうのだ。

また韓国は日本に対し「植民地支配をされた国」という意識を持っているが、日本は「植民地支配をした国」という意識は持っていない。

日本にいれば、小学生の頃から戦争の反省や平和主義について学ぶ機会がいくつもあり、多くの日本人にその考え方が染み込んでいる。そのため私は「日本は戦争の反省を十分にしている」と考えていた。しかし韓国から見た日本を知り、日本がしてきた反省は、戦争によって亡くなった多くの日本人に対する反省であり、被害者としての側面しか見られて

いないことに気付いた。他国にとって日本が戦争の加害者でもあったという側面は、日本で知ることはあまりない。そのため私を含め多くの日本人にとって戦争は日本が被害を受けたものであり、日本が加害者であったという側面を突然突きつけられても、受け入れることができないのだと考えた。

このように、日韓関係の歴史について韓国は加害者、被害者の関係をはっきり意識している一方、日本はそのような意識を持っていないために歴史問題に関して日韓がなかなか歩み寄れないのではないだろうか。

これらの違いは日韓の考え方や教育、環境の違いによるものであり、日本と韓国の対立に繋がってしまっている違いである。しかし、それとは異なり日本も韓国も同じ問題に直面している部分も存在する。例えば慰安婦問題を女性の人権軽視の問題であると捉えるか否かという部分は、日韓関係なく色々な意見を持つ人がいるだろう。日本も韓国も、先進国ながら現在のジェンダー格差について様々な問題を抱えており、そのような女性軽視の姿勢が政府にも反映され、政府が慰安婦問題への解決に積極的に乗りださないという問題が共通して見られる。

そのため、日本と韓国は確かに考え方も価値観も背景も異なるが、歴史問題をその二項対立だけで捉えていては解決には繋がらない。日韓の歴史問題は日韓の対立に関するものとシンプルに捉えられがちだが、その背景には日本と韓国が今まさに共通して直面している深刻な課題がある。そのような意味でも、日本と韓国が歴史問題の解決に力を注ぐことは重要であると学んだ。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

日韓の文化の違いで一番印象に残った点は、軍人への印象である。DMZを訪問した際に多くの軍人を見かけたのだが、日本では軍服を着た人を見かけることは少ないため軍人を見て「怖い」と感じた。しかしペアの学生から「韓国では徴兵制により家族や恋人と言った身近な人が軍人になるので、軍に対して恐ろしいという気持ちはない」と言われた。また、ペアの学生から自分の恋人が徴兵されたときのことや、友人の恋人の徴兵が近い話を聞いた。それらの話は韓国の若者からすれば、友達と話す恋愛の話の延長のようだった。自分からすれば軍は恐ろしいもので、徴兵制も決して好感を持ってない制度であったため、それらが普通となっている韓国の学生の感覚に違和感があった。

それらのことから、韓国にとって軍が身近な存在であるからこそ、日本とは違う形で平和への強い思いを持っていることを学んだ。日本は軍を持たないという形にすることで平和を保つことを目指しているが、韓国は一般の人々も有事の際に身近な人々の身が危険にさらされるかもしれないという危機感を日頃から持っているために平和を保つことの重要性を感じているのかもしれない。政治面においても、その認識の違いを考慮した外交が重要であると学んだ。

2.2 日韓関係に対する学び

現在日韓関係はかなり冷え込んでいるが、逆に言えば日本と韓国はお互いが他の国とは違う特別な国であるということになる。今回日本の学生も韓国の学生も、歴史や交流、嫌韓・反日について、時には対立しながらも真摯に話し合い深い相互理解に繋がった。様々な違いや相手国に対する思い、そして共通する部分があるからこそ、ここまで深く話し合えたのではないかと感じられる。セミナーに参加する前は私にとって韓国は「悪い意味で特別な国」であったが、実際に韓国の学生と交流することで、それらの感情を乗り越えて「いい意味で特別な国」に変わった。日韓関係が冷え込んでいるということは、少なくともお

互いに無関心なわけではないということであり、これからいい方向にも変わりうると考える。

3. セミナーについて

このセミナーの良かった点は、日韓が共同で課題に取り組むためのグループワークや発表と、日本側と韓国側の学生が同じ女子大生として仲を深めるための時間がバランスよく組み込まれていたことである。交流だけのセミナーではお互いの考えを知り理解を深めるところまではいかず、お互いの文化は好きだけでも政治面では対立しているという構造まで変えることは難しい。一方で、仲を深めるための時間がなければ相手国の人間はいつまでたっても「自分とは違う人」であり、距離ができてしまう。9日間かけてじっくり向き合うことでようやく相互理解に繋がる第一歩を踏み出せたので、バランスの良さはとても重要であると感じた。

工夫の余地があると感じた点は、言語の壁の乗り越え方である。現状ではどうしても日本側が有利になり、特に政治や歴史など特殊な言葉を使う話題のときは、韓国の学生が本当は伝えたいことがあるのに伝えられないといった場面が多々あった。また最終発表の質疑応答の際に、韓国側の学生が意見を述べているのに韓国語であったために全く理解できず、通訳を介さなければいけなかったことにもどかしさを感じた。日本語ができれば参加できるということは、日本側の学生にとってはこのセミナーの良い点でもある。言語習得に興味がない学生でも気軽にセミナーに参加し異文化理解教育を受けることができ、言語の壁を乗り越えることの重要性を学べるためである。しかし実際にセミナーに参加してみると、その点におけるデメリットも見られた。お茶の水女子大学では韓国語をしっかりと学ぶ機会が限られているので、英語グループと日本語グループを作り、日本語に自信がない韓国側の学生や英語ができる日本側の学生は英語グループに、日本語力を試したい韓国側の学生や英語に自信がない日本語側の学生は日本語グループに入り、発表準備を英語／日本語で行うようにすると、セミナーで学べることの幅が広がるのではないかと考える。

関心を持つということ

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私のグループで扱ったテーマは「反日・嫌韓思想」についてであった。韓国に過剰な感情を抱いていないような身近な人々に老若男女問わず各メンバーで何人かに対してインタビューを行うことで現在の嫌韓状況を調査した。またインタビューする内容もスポーツ、食文化、製品、個人、政府と様々な分野においてそれぞれで韓国にどのような印象を抱いているのか質問項目を作成した。そうして寄せられたインタビュー内容の傾向を分析すると、結果として一般的に人々が韓国の情報を得るのはインターネットサイトを通じてであり、そこに書かれているものをもとに韓国へのイメージ形成をしていることが判明した。

1.2 私の学び

このような活動の中で特に印象的だったのは、韓国という国に対してははっきりとした嫌悪感を抱いている人が少なく、圧倒的に無関心な態度を示す人が多かったということである。反して日常的に利用するネットでは、事あるごとに様々な問題が韓国と結びつけられ（たとえば問題発言をした芸能人などをすぐに『あれは在日だからだ。早く国へ帰れ。』と掲示板でバッシングするなど）根拠があるにしろないにしろ、過剰な批判が飛び交っている。こうした様子をもとに私は「一般に日本人は韓国に嫌悪感を抱いているのだ」と認識していたため、インタビューの中で明確な嫌韓思想を表す人がいないことに驚きを感じたのだ。しかしながらそれと同時に気が付いたのは、自分自身もまた海を挟んだ隣国に対して無関心な人間のうちの一人であったということである。それまで韓国という国でどのような問題があり、かつて日本は韓国にどんなひどい仕打ちをしてきたのかという歴史的背景を見つめることも、ネットで騒がれている韓国へのマイナスイメージの真偽を自分で吟味することもせず、日韓両国間の関係改善のためには何ができるかという課題に真剣な姿勢で臨んでいるつもりになっていた自分がたいへん情けなく思われた。一時発表のための事前学習として行ったインタビューは、単に身近な日本人が韓国をどう思っているのかを様々な分野において調査することができただけでなく、それを通して私自身が今までどんなに甘い姿勢で日韓関係を見つめていたのかを痛感し、意識をする貴重な機会となった。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

今回のセミナーの中で感じた日韓の違いはストレートさである。このストレートさというのは、韓国人学生の感情表現や、何をしたいか、本当はどう思っているのか、そうした自己表現がとても直球だということだ。例えば同徳の学生にはいつも「この料理は本当においしいのか」、「明日は何をしたいか」、「韓国が日本に謝罪を今も要求してくることに對してどう思っているのか」といった内容を質問された。私だけかもしれないが、日本人はたいいていそのようなことを聞かれた際には「何でもおいしい」、「何でも良いよ」、「何とも思わないよ」などと曖昧な返答をしがちなのではないだろうか。そして日本であればこのように答えられても何とも思わず、至極当たり前の返答だという認識であろう。しかし韓国においてはそうではなかった。彼女たちは私たち日本人が「本音と建前」を使い分けているのではないかと気にかけており、こう言った返答をするたびに明確な意思を伝えること

を求められたのである。私にとってはむしろ出会って間もない人に対して自分の意見を言うことは押しつけがましいと躊躇してしまうのだが、郷に入っては郷に従えの心をもってグループでの話し合いなど、積極的に自分の意見を述べるようにした。やはり一人ひとりの考え方の違いは存在し、時には自分自身の意見を否定されるようなこともあり不満を抱くことも多少あったが、このやり取りがなければ日韓双方の学生が納得することのできる二次発表はできなかったのだろうと思う。

2.2 日韓関係に対する学び

今年 2015 年は戦後 70 年の節目となる年だが、70 年談話には韓国への直接的な謝罪が盛り込まれず、「植民地支配」や「侵略」、「お詫び」など歴代内閣が現してきた立場を引き継ぐ姿勢が見られた。私たち学生が作成した談話のようにではなく 70 年という節目でも日韓関係の改善が見込めないことを非常に残念に思った。一方で今回のセミナーでの合同発表は、戦争を経験していない私たちだからこそ日本側は素直な謝罪の言葉を、韓国側は日本を受け入れる寛容さをそれぞれ持つべきだという内容を打ち出すことができたのではないかと考えた。同徳の学生たちと交流をする中で、今の日韓関係は良好ではないとしても今後を悲観するのではなく、私たちのように日韓の友好関係のために活動し続ける柔軟性のある学生たちが互いの国を背負い動かしていく時が来れば、必ず良い方向へ向かっていくのだという希望を持つことができた。

3. セミナーについて

本セミナーでは簡単ではあるものの韓国語を学ぶ機会が設けられており、現地で実際にはそれを活かすことはできなかったが語学に関心を抱くきっかけにはなったのではないだろうか。また、事前学習ではグループごとの発表準備がメインとなってしまう時間をとって日韓の歴史などを学ぶことができなかったため、今振り返ると自分は韓国へ向かう時に、これから日韓関係改善の手立てを探るのだという明確な目的を持った心構えができていなかったのではと反省している。たしかに現地で歴史博物館を訪れ韓国学生からどんな教育を受けてきたのかを直接聞くことで最終的には理解することができたが、それを事前学習（セミナー前の授業）でも遠隔交流の中で先に知ることができたならばこのセミナーがより意義深いものになったのではないかと考える。しかしながらこのような反省ができているのも韓国での滞在において日韓関係に関心を持つことができたからこそであり、このような「気づき」を得る場としてセミナーは非常に重要な機会だと言えるだろう。

多文化交流実習を終えて

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たちのグループのテーマは「反日・嫌韓感情」でした。まず、日本のお茶大側と韓国の同徳女子大側でそれぞれ反日・嫌韓感情の現状とその原因について調査を行い、その課題に対してこれから私たち大学生ができる解決策を提案することを決めました。その際、日本・韓国に対して特別な感情（私たちのように日韓関係について専門的に学んでいる、身近に日本人・韓国人がいる、など）を抱いている人ではなく、“一般の人々”が重要であるとして、そのような人々を調査することを統一しました。お茶大側は20代～60代の各世代男女それぞれにいくつかの質問に答えてもらい、聞き取りを行いました。ほとんどの人が政府やスポーツにはなんとなく否定的なイメージを持っている一方、韓国人個人や文化は好意的に感じている、という回答結果と、近年の日本メディアの韓国についての報道をふまえ、一次発表では日本人には日韓問題に無関心人が多く、メディアの過熱報道や扇動により受動的に嫌韓感情を形成されているのであり、解決策としてSNSの利用方法の見直しと人的交流を提案しました。最終発表までは2日の準備期間があり、グループで同じ寮で生活したり、いろいろなところへ出かけたりおいしいものを食べに行ったり、徐々に距離が縮まって日韓問題などシビアな話題など様々な話をするなど、様々な交流をしました。韓国でサッカーの日韓戦を、日韓のグループの仲間と騒ぎながら観戦もしました。その中で、私たち自身が価値観・認識の差や誤解があったことに気が付きました。日韓の関心の度合いに差があること、謝罪の形に認識の違いがあること、性格的な差があることなど、実際に韓国に来て、交流することでしかできない経験と気づきを得られました。最終発表の準備では、同徳側4人が「日本語でうまく私たちの意見を伝えたいから」と、韓国語で熱く議論し意見をまとめてからこちらに日本語で話してくれたり、タブーとされてきた日韓関係の問題や歴史問題を、日韓の国境を越えて腹を割って話し合ったり、朝の4時まで白熱した話し合いをしました。最終発表では、自分たちが体験した価値観の違いや誤解をもとに、人的交流の重要性を提起し、なんとなくではなく目的をもって韓国を訪れ、相手国の文化に身を置いて様々な体験をすることで、メディアなど他者からの影響を受けないで物事を判断する尺度となるのではないか、またその経験をSNSで発信することで無関心を少しでもなくすることができるのではないか、という結論を出しました。言語の壁やシビアな話題だけに手探りで難しかったところもあり、ここまで打ち解けた話をできるとは思っていなかったのも、最終発表を終えた後は非常に感慨深かったです。最終発表の後にも自由行動や江華島での合宿などで、グループ単位で活動することが多く、非常に絆を深めることができ、非常に有意義な活動ができたと思います。

1.2 私の学び

今回の実習で学んだことは本当に数えきれないほどありましたが、国境や言語、文化などの壁があっても、お互いが同じ方向を向いてそれを理解しようとして、そしてまた国のために良くしたいという思いをもって考えることができたというのが、私にとって何よりも大きかったです。私の家庭は祖父母も両親も嫌韓感情が激しく、私も幼いころから強制されたわけではないけれどそのようなものだと思ってきたし、面白半分でそれに同調していました。しかし、大学に入って韓国の留学生と接したり新大久保のヘイトスピーチなど

を知るにつれて違和感をおぼえ、自分が信じてきた韓国に対するイメージが一面的であることを何度も感じていました。韓国を訪れ、同徳の学生を始め韓国人びとの思いやりなことあるごとに触れ、自分の中にあって離れなかった固定観念やこのギャップがすつとなくなっていくのを実感しました。先入観や偏見を抜きにして、買い物や食事、たわいもない会話といった楽しい時間を当たり前のように共有できたこと、日韓関係を少しでも良くしたい、嫌悪感をなくしたいという思いをみんなが持って発表に向けてみんなとぶつかることができたことがとても嬉しかったし、大きな意義があったと思います。同時に、ここまでに至るにはやはり相手の立場にたって考えること、違いを受け入れるとまではいかなくても理解することが必要であると学びました。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

日本と韓国は地理的な距離から、人や文化などあらゆる場面で「似ている」ところが多いといわれますが、この「日韓は似ている」ということがいのように働くときもあれば、これがネックになってしまうこともあるのだと学びました。確かに、人の見た目や言語など似通っているところはたくさんあります。しかし、例えば韓国は物事をストレートに伝えますが、日本は察する文化であるとか、男女の価値観の違いとか、韓国で生活してみて初めて知る差異もたくさんありました。日韓双方が似ているという先入観を持っていることで、余計に意見がすれ違ったり誤解が生じたときに、互いの違いを認めにくく、また自国のことを理解してもらおうと相手の立場に立つことを忘れてしまうのではないかと感じました。また、日本人には、特に若者に関して、日韓問題を知らない、関心がない人が多いですが、韓国人びとは皆日韓問題に関心があって積極的だということもわかりました。他人事だと考えず能動的に情報を手に入れ、考える姿勢が日本と異なると感じました。

2.2 日韓関係に対する学び

日韓関係に対して、日韓双方が現在の関係性はよくないと感じているものの、日本に比べ韓国側はより積極的に考えていることを痛感しました。韓国人びとには、現在の日韓関係は改善するべきで、どうしていくべきかという意見を持っている人が多く、日本と韓国の間で日韓関係に対する姿勢に大きな差異があることを学びました。また私は渡韓前、韓国人びとは日本人全体に対し良い印象を持っていないと思っていましたが、実際に行ってみると友好的で優しく、日本語を話せる人も多く日本人の私たちに話しかけてくれる人も何人もいて、非常に驚きました。バディに聞くと、韓国人は、日本人が韓国人全体に対し負の感情を持っているとは考えていないだろう、と話していて、どちらも政府レベルでは良い印象を持っていないけれど、韓国人を全体としか見ずに先入観や偏見で凝り固まっていて嫌悪感をもっているのは日本側だけなのだと学び、情けない思いになりました。日本側からは、個人レベルでの日韓関係から考え直していかなければならないと感じました。

3. セミナーについて

私たちのグループのテーマは「反日・嫌韓感情」という、日韓双方にとって非常にデリケートな問題で、お互いにどうテーマを扱っていくか、どう相手に意見を述べて考えを聞くか、韓国へ実際行くまでの授業でのテレビ会議ではお互い手探りで遠慮がちだったように思います。しかし、グループのメンバーと寝食を共にし、ディスカッションしたり、一緒に買い物をしたり、たわいもない会話をしたり、一緒にいることで徐々に打ち解け、最終発表では日韓関係に対する思いを新たにすることができ、最後には別れが惜しまれるほ

ど絆が深まりました。異文化に自分の身を置くという点では旅行や研修でもできますが、参加者全員が自分の国を良くしたいという思いや、学ぼうという姿勢で臨むという点が、このセミナーの一番大きな特徴であり、実際私もグループのメンバーやほかの参加者の意見に刺激を受けたり、視野を広げたり新しい考えに触れる機会が何度もありました。日本にいて日韓問題について考えるだけでは得られない経験、感覚、自分の変化を得ることができ、このセミナーに心から参加してよかったと感じています。ありがとうございました。

4. 参考文献

『読売新聞』2015年8月16日発行

『朝日新聞』2015年8月16日発行

『産経新聞』2015年8月16日発行

人的交流を通じた学びについて

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たち3グループは反日・嫌韓問題について取り組んだ。具体的な活動内容としては、まず訪韓前に反日または嫌韓感情の現状についてデータを集めたり、実際に一般の方にアンケートやインタビューを行って互いの国へのイメージについて調べた。セミナー開始後、一次と二次に分けて行われたグループ発表だったが、一次発表では特にメディアに注目した。人々の反日・嫌韓感情をあおったり、互いの国への嫌悪感を根拠なく植えつけさせる要因になっているのがメディアだと考えたからである。この一次発表は全グループお茶大・同徳女子大双方とも韓国語で行った。その後グループごとに各自話し合いを経て、お茶大・同徳女子大の意見を合わせて合同発表という形で二次発表を行った。一次発表・二次発表ともに参考資料や現行の一部を載せたパワーポイントを作成した。

1.2 私の学び

今回はセミナー前の事前学習と一次発表、二次発表のすべてに学びがあった。まずセミナー前の事前学習では様々なデータを収集したが、やはり韓国・日本に対して良いイメージを持っている人は少ないのだと再確認せざるを得ないデータばかりが見られた。ところが実際に自分の周りの様々な年代の人にインタビューしてみると、あまりに韓国に対し無関心な人が多いということに驚かされた。これは韓国に限った話ではないのかもしれないが、あまりに無関心な人が多いという事実は非常に衝撃的だった。この学びが、一次発表での「日本人の嫌韓感情の根源は無関心にあり、テレビなどメディアの過剰な嫌韓報道に流されて無意識に韓国に嫌悪感を抱いているのではないか」という結論につながっていった。

次の一次発表で得たことは、こうした事前学習の学びを生かして自分たちなりに内容を練り上げられたこともそうであるが、私は一番の学びは発表を韓国語で行ったことから得られたと思う。森山先生のご提案で、お茶大生は一次発表は韓国語で行うことになった。それを聞かされた時、自分の韓国語力はないに等しかったし、意味の分からない言葉を片言で話すことに意味があるのだろうかと思得いかなかった部分もあった。しかしよく考えてみれば、例えば好きな海外アーティストが日本語で「こんにちは」と言ってくれるだけでも非常にうれしいことであり、たとえ意味が分からなくとも相手の言語を話そうとする姿勢は相手にとって本当に嬉しいものなのだと分かった。私の場合は一次発表の前夜にバディの子が付きっきりで読み方の指導をしてくれて、一気にバディとの絆も深まった。発表内容もちろん実りあるものだったと思うが、この「言葉の壁を越えようと努力する姿勢」がいかに大切であるか身をもって感じられたことが一番の学びであったと思う。

二次発表ではとにかく発表に至るまでの話し合いが濃密だった。二次発表は人的交流の大切さに重点を置いて発表をしようという方針だったのだが、それぞれの意見を交わす際には日本語を用いたため、同徳の学生が言葉に詰まってしまうこともしばしばあった。しかしそれでも諦めずに話そうとする同徳の学生の姿勢は胸を打つものがあり、こちら側も出来るだけ分かりやすい言葉で自分の意見を説明したりなど、日韓学生のどちらも一生懸命に議論した。これまで意見を言い合う場というのは時間の限られた授業の中でしか経験したことがなかったため、今回のように自分たちの納得がいくまで延々と議論続けられ

る話し合いは初めてでとても充実したものになった。そして、話し合いや議論というのは自分の意見を好き勝手述べるだけでなく、相手の意見に耳を傾け理解しようとする根気も必要なのだということを学んだ。発表の内容に関して、一番驚いたのは日本に対して著しい敵意を持った韓国人は少ないということだ。これは同徳女子大の学生が行ってくれたアンケートから分かったことだったが、日本側は「大多数の韓国人が日本人や日本のことを嫌っているのだろう」と思っていたため、この事実は非常に衝撃的だった。こうした思い込みや偏見が二国間のよりよい関係を築いていくうえでいかに危険であるかを学んだ。根拠のない思い込みがなくなるだけで、相手への印象や好感度は急激に変わる。こんなに単純な事実の一つ知るだけで自分の世界は大きく開けるが、それを知ることがいかに難しいかということも同時に学ぶことが出来た。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

セミナー全体を通して感じた一番の日韓の文化の違いは、人々の心の熱さである。何をするにしても、バディをはじめ同徳女子大の学生たちは様々な世話を焼いてくれた。全然重くないのに荷物を持ってくれたり、とにかく世話好きという印象を持った。それは学生に限ったことではなく、道ですれ違う人たちにも同じことが言えた。知らない人であろうが話しかけるし、聞いてもないことを教えてくれもする。日本人であれば知らない人が地下鉄で急に話しかけてきたら怪しい人だと警戒するだろうが、韓国ではそんなことはまったくなかった。日本と韓国は同じアジアなので日本と似た価値観だろうと勝手に想定していたが、どちらかというアメリカなど欧米的な雰囲気もあったように思われる。言いたいことをはっきり言うのも日本とは違う点であろう。母語を使わない話し合いの時は、日本人ならば不慣れな言語を使って発言するのは気が引けたり勇気が出ないと感じる人も多いだろうが、韓国の学生はそんな様子は見せなかった。たとえ発言の途中で言葉に詰まったり言いたいことがまとまらなくても、物おじすることなく自分の意見を言う姿勢には刺激を受けた。

私はこうした韓国の文化が好きだったため、幸いにも慣れるのに時間や労力を要することはなかった。彼らの文化や考え方にはこちらが考えさせられるところが本当に多く、とても勉強になった。日本はおもてなしの文化と言ったりするが、果たしてそれは本当なのだろうか？確かにおいしい日本食を提供したり、美しい古都や伝統芸能を見せたりすることは出来るかもしれない。しかし韓国人がそうしてくれたように、何から何まで世話を焼いたり、自分がどんなに疲れていても細かいところまで相手に気を配ることができるだろうか？外国人など「知らない人」に冷たい日本人に「心からのおもてなし」が本当にできるだろうか、と改めて自問するきっかけにもなった。

2.2 日韓関係に対する学び

日韓関係は、政治の分野を除けば比較的すぐにもでも歩み寄れるのではないと思う。日本はアニメや漫画、韓国は食べ物やK-POPなど、互いの国で流行している文化が多いからだ。そして何より、「日本人」に好感を持つ韓国人や「韓国人」に好意的な日本人が多いということがこのセミナーで分かったことが大きな理由である。しかし、やはり政治が日韓関係に多大な影響を及ぼしていることは言うまでもない。日本も韓国も、互いの国への対応に一貫性が見られず、自国のみならず相手国への国民からの信頼も失い続けている。一般市民には政治は選挙以外でどうこうすることは難しく、両国の関係が改善されるように声をあげ続けていくしかない。だからこそ、これからの未来を担う私たちの世代が積極的に相手の国への正しい知識を身につけていくことが何よりも大切だと私は思う。一人の

力は小さくても、集まれば大きな力になる。月並みなことだが、これを忘れずに両国の国民一人一人が日韓関係について考えることが大切だと思う。

3. セミナーについて

このセミナーに参加して本当に良かったと思う。私にとっては韓国全体に抱いていた偏見や思い込みを打ち砕くための本当に良い機会となった。これまで私はアメリカとオーストラリアに行ったことがあり、日本という国の独特の文化や考え方についてはある程度客観的にみることができていると思っていたのだが、韓国へ行ってそんなことはなかったのだと情けなく感じた。日本人ではない人から見て、日本のどんなところがどんなふうに理解できないのか、日本のどんなところが評価されているのかより仔細に知ることができたのはとても大きな収穫だったと思う。正直行く前は、異文化理解や自文化理解がここまで自分の中で深まるとは思ってもいなかった。ただ先生が講義する授業ではなく、学生があらゆる面で主体的に活動したこのセミナーだからこそ、ここまで有意義な人的交流が可能になったのだと思う。外国語教育という面は、同徳の学生が日本語を話してくれたこともあってあまりメインにはおし進められなかったように感じたが、それでも相手国への理解を深めるうちに「もっと相手の国の言葉を話してみたい」という気持ちが強まったという点では外国語教育の良い原点と言えたのではないかと思う。また国を越え、世界を支える世代の一人として日韓のために何が出来るのかと考えることができたという点で、シティズンシップ教育としてのセミナーとしても十分に実りのあるものだったと思う。

「人的交流」の醍醐味

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たちのグループのテーマは「嫌韓・反日」であった。その現状を調べるにあたり、まず「自分たちが嫌韓感情を持っているか、持っているとするればそれはなぜなのか」について話し合った。その話し合いの中で、自分の中の嫌韓感情はいつ誰によって（何によって）芽生えたかということを考えたところ、それぞれの家庭の状況に左右される部分があるということがわかった。

また、発表の準備として、各世代の男女にインタビューを行った。その結果、積極的に嫌韓感情を持っている人は少なかったが、日韓関係に無関心な人がほとんどで、韓国が日本のこと嫌いだから自分も悪いイメージがない、といったような意見がみられた。

1.2 私の学び

私は、自分の育った家庭は特段嫌韓ではないと思い込んでいたし、嫌韓だったとしても自分はその影響を受けていないと思い込んでいた。しかし、メンバーみんなと話していると、私の中にも嫌韓感情があるのかもしれないと感じた。私の両親はどちらかというと嫌韓感情が強いということもわかった。さらに話していくと、韓国に対する漠然としたイメージと、主に両親の韓国に対する意見・発言等には少なからず関係があるという印象を受けた。

家庭教育にも嫌韓の一因があるのではないだろうか。家庭「教育」というより、無関心な親が根拠のない嫌韓感情を子供の前で表すことが子供に影響を与えると考えた。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

事前の遠隔交流の際は、事務的な連絡が主であったため、文化の違いはほとんど感じられなかった。しかし、セミナー中の最終発表に向けて話し合った際に、自分の中でのとても大きな気づきがあった。

韓国は隣国である。顔も似ている。そして、今回韓国語を少しだけ勉強したことによって、言葉も近いということがわかった。それゆえ私は、無意識に自国の価値観で相手国を捉えてしまっていたということに気づいたのだ。最も印象に残っている例を一つ挙げる。

「日本は歴史問題について謝罪しているのに、なぜ未だに謝罪を求められ続けるのか」ということは、多くの日本人の理解できない点ではないだろうか。私もこれまでわからなかった。それは、「謝罪」の定義・ニュアンスを日本の文化・価値観で捉えていたからであると思う。日本人の曖昧な言葉の言い回しは、韓国では謝罪と受け取られない。また、言っていること（謝罪）と行動が一致しないということも指摘される。そもそも、謝罪したから終わり、ではなく、取り返しのつかないことをしたのだから、謝り続けるという姿勢を見せるべきなのではないか。しつこい、などという言葉はただの開き直りであると感じた。

このことから、客観的に考えているつもりでも、実は自分の価値観を抜け出せていなかったのだということに気がつけた。

2.2 日韓関係に対する学び

日韓関係という国家同士の問題だという印象を受ける。事実私もこれまで、日韓関係は国家間の問題であると思っていたが、セミナーを通じて、「国と国の関係ってなんだろう」という疑問が浮かんできた。国といっても人の集まりであるのだから、人と人との関係として捉えることはできないのだろうかと感じた。それは、今回同徳女子大学のメンバーと日韓の間にある問題を乗り越えて仲良くなれたからこそ感じる事ができたことだと思っている。このように、個人レベルでは日韓関係は良いものにできるのだということを体験的に確信した。嫌い、相手が悪い、などというネガティブな気持ちでは、いつまで経っても解決しない。様々に問題はあるけれども、なんとか良好な関係を築きたい、という前向きな気持ちで日韓関係を捉えれば、もう少し事態は良くなると考えている。

3. セミナーについて

私は大学に入ってからこのセミナーに参加するまで、国際交流に全く関わってこなかった。正直「交流」にあまり興味がなかったのである。今回は、友人が参加するということ、韓国に行きたいと単純に思ったことから参加を決めたが、「交流」ということがあまり得意ではない私は少し気が重かった。そのような人は、私だけではないと思う。しかしそういった「交流」に慣れていない人、また無関心な人にこそ、異文化理解教育・国際理解教育が必要であるが、これらの人々をどうやって動かすか、ということが課題であろう。これはその人のタイミングやモチベーション等にも大きく左右されるが、私たちにできることがあるとすれば「発信」だ。

「相手の立場に立って価値観や認識の違いを知り、それらを頭で理解するだけでなく、体験的に実感すること。」これは今回3グループみんなが感じた人的交流の醍醐味である。最終発表の準備で、言葉で伝えるということの難しさを痛感しながら、午前4時まで話し続けた。私たちの体験、喜びを、言葉にするのはとても難しかった。こんな経験を、実際にしてほしい。私たちが「発信」して、一人でも多くの人に本当の「人的交流」をしてもらいたいと思う。

百聞は一見に如かず

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

わたしたちは、「反日・嫌韓感情」というテーマで活動した。まずは、反日・嫌韓感情の現状をそれぞれ調査し、その結果を基に解決策を発表した。次に、互いの一次発表を踏まえて、反日・嫌韓感情を無くすためにはどうすればよいのかを話し合った。そして最後に、話し合いや自分たちの体験から考えた解決策を発表した。

1.2 私の学び

事前に行ったインタビューの結果から、嫌韓感情が生まれる原因の一つとしてメディアによる報道があることが分かった。そのため、嫌韓感情を無くすためには、メディアからの情報を正しく判断する力をつけることが必要だと考えていた。しかし、韓国グループとの話し合いの中で、なぜ反日・嫌韓感情が生まれてしまうのかという問題の根底にある原因を知ることが、反日・嫌韓感情を無くすためには最も重要であるということに気が付いた。日本と韓国の間には、価値観の違いや誤解があり、それが反日・嫌韓感情に繋がっているということ。そして、両国共に直していかなければならない点があるということが分かった。これらの学びは、わたしが実際に韓国の学生と直接話し合ったからこそ得られたものであると考える。直接的な交流がなければ、ただの知識として頭で理解するだけだっただろう。しかし、実際に韓国の学生と関わることで、自分自身の体験の中での気づきが多かったため、そこでの学びが“自分のもの”となっていた。このように、自分自身の体験の中で得た、両国間の価値観の違いや誤解などを理解することが、反日・嫌韓感情を無くすための大きな一歩となっていくのではないだろうか。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

韓国の学生との交流を通して感じたことは、韓国の方はとにかく温かくて優しいということである。どこかにご飯を食べに行く前には、事前に細かい内容まで調べておいてくれるし、外に出るときは必ずドアを開けて待っていてくれる。そして、困っていることはなにかと頻繁に聞いてくれる。わたしがそれらに対して「ありがとう」とお礼を言うと、彼女たちはそれが当たり前だと答えていて、とても驚いた。日本人は、新たに会った人と距離を縮めるまでに少し時間がかかるだろう。しかし、韓国の学生たちは全くそうではなかった。初めて出会った時から、親しい友人として接してくれ、その温かさや優しさは見習うべきものであると感じた。

2.2 日韓関係に対する学び

セミナーを通して日韓関係に対して感じたことは、日本人と韓国人は日韓関係への興味に大きな差があるということである。事前に行ったインタビューでは、ほとんどの日本人は日韓関係についてあまり興味がなく、メディアからの情報を受動的に受け取っているだけであった。しかし一方で、韓国人は、両国間の歴史問題や領土問題に興味を持っている人が多く、サークル等を通して自ら調べる人も多いということを聞いた。このように、両国間に温度差があっては、日本と韓国の中に存在する溝を無くすことは難しいだろう。ま

ず日本側は、両国間の問題に無関心な人を減らしていく。そして韓国側は、客観的な立場に立ち、一方的な批判をやめる。このように、互いの立場を理解しあっていくことが、これからの日韓関係を良くしていくためには重要なのではないかと考えた。

3. セミナーについて

今回のセミナーについて感じたことは三点ある。

一点目は、実際に交流することの重要性である。テレビ会議を通して、中国や韓国の学生と歴史問題や互いの国に対するイメージについて対話をしたことがあったが、実際の交流では、テレビ会議だけでは得られないものが多くあった。テレビ会議では、相手の意見を聞いたり、相手の立場に立ったりすることまではできていた。しかし、実際に交流することで、感じたことをすぐに言ったり、疑問に思ったことをすぐに聞けたりすることで、議論が捗った。また、学んだことが“自分のもの”として理解できるようになっていた。やはり、実際に交流することで理解できるものは計り知れないと感じた。

二点目は、あえてタブーとされている問題を話し合うことで、本当の意味で韓国の学生と仲良くなれたのではないかとということである。今回は反日・嫌韓感情という重いテーマだったが、本音を包み隠さずに話し合いを行っていた。だからこそ、より深く互いのことを理解することができ、友情を築くことができたのではないかと考える。これから先、日本と韓国の政府間の関係が悪化したとしても、わたしたちは今回のセミナーと同じように充実した話し合いをすることができる自信がある。それぐらい揺るぎない関係を築くことができたのである。

そして三点目は、韓国語での発表についてである。今回、日本側は一次発表を韓国語で行ったが、慣れない韓国語での発表であったため、メッセージ性の感じられない発表になってしまったという印象を受けた。しかし同時に、外国語での発表の難しさも感じた。そこで、日本側は最終発表も韓国語での発表を取り入れていけば、よりよいものとなったのではないかと考える。最終発表は、話し合いや交流を通して韓国に対してより興味がわいており、メッセージを伝えたいという思いが強いと考えられるからだ。自らの思いを詰め込んだ発表であれば、拙い韓国語であっても、メッセージが伝わってくるのではないだろうか。

以上が今回のセミナーで感じたことである。「百聞は一見に如かず」この言葉のように、実際に交流してみないとわからなかったことはとても多かった。そして、今回のセミナーで終わるのではなく、これをきっかけにして、これからの日韓関係について考えていきたい。

対話を通じて見えたこと

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

「日韓関係に対しての無関心が、嫌韓感情を生み出すのではなかろうか。」そうした仮説から、わたしたち反日・嫌韓グループは日韓セミナーに向けて準備をしてきた。周りの日本人の意見を聞くにあたって頻出された語は、「わからない」「なんとなく」「反日だから」「メディアが言っているから」という、日韓関係に対する消極的な姿勢。今回のセミナーは、こうした状況下で、嫌韓・反日感情をなくすにはどうしたらいいのか、私達に何ができるのであろうかを、私達日本学生が韓国学生と真剣に向き合い「対話」するものであった。

1.2 私の学び

一番の学びは、まさに自身が抱いていた韓国に向き合う消極的姿勢を変えることができたことである。恥ずかしながらわたしはセミナーに参加するまであまり韓国について知らなかったし、知ろうとする姿勢すらあまり持っていなかったと思う。

しかし、ある出来事がわたしの韓国に対する感情を大きく変えた。韓国に初めて降り立った8月3日の深夜である。都合により一人で日本から同徳女子大に向かわなければならなかったのが、そこまで小さなトラブルが重なった。まず、飛行機内でキャビンアテンダントたちはしきりに韓国語で話しかけてくるが、わたしは全く理解ができない。「なぜ英語じゃないんだろう、愛国心が強いなあ」と少しくんざりしていた。そうしているうちに大学近くの駅についたものの、Wi-Fiが使えない。わたしは深夜0時に、言葉も通じない異国で道に迷ったのだ。「帰りたいな」と思った。その時、ひとりの韓国人女性がわたしを呼んだ。韓国語がわからず困っているわたしに気がつく、彼女は流暢な英語でわたしに質問をしはじめた。「どこにいきたいの？ひとり？地図は持っている？」本当に助かったと思った。

彼女の厚意はわたしの想像を遥かに上回るものだった。彼女は、見ず知らずの韓国語が全く話せないのになぜか一人で真夜中に大学に行くのだという、いってみれば不審者のわたしの腕を引き、大学まで連れて行ってくれたのである。彼女は止めようとする門番に説明をし、寮まで見送ってくれた。門番は英語が話せなかった。わたしは彼女に会わなかったらと考えてぞっとした。時計は0時を超えていた。のちに、バディが心配して門限を過ぎたのに駅まで探しに来てくれたことを知った。

——この日を境に「韓国人は、本当に熱い。」森山先生が言っていた意味がわかった気がした。日本人は、外国人に対してここまでするのだろうか。そして、韓国人になぜ英語を使わないのかという感情を抱いていた自分がいかに高慢であったかを思い知った。「郷に入っては郷に従え」ではないが、韓国人が、韓国で、韓国語を使うことのほうが正しいのだ。

これは余談だが数日して韓国学生に言われたことがある。「本当に韓国人に見える。空港とかで、韓国人だと思われたでしょう。」そうか、キャビンアテンダントたちが韓国語で話しかけてきたのは、愛国心が強いからなんて理由ではなかったのか。韓国人＝愛国心が強いといったステレオタイプによる誤解が壊れた瞬間だった。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

今回のセミナーで特筆すべきはやはり、「謝罪」の概念の違いであろうが、これについては他の学生がわかりやすく述べてくれるに違いない。そこでわたしは韓国の学生との会話の中で、印象に残った会話について、2つ記したい。

これは謝罪について日韓の学生で意見交換を行っていた時の出来事だ。

「日本人は、なんでストレートな謝罪をしないの？」

「政治家は、謝罪をすることで、韓国にイニシアティブを取られるのが嫌なんだろうと思う。頭を下げたら、韓国の下になってしまうから、プライドが許さないんだと思う。多分だけど。」

「え？なんで？過去のことなんだから、現在の経済とは全然関係ないのに。」

日本人はよく「韓国人は過去に固執しすぎだ」という。過去に固執しているのは、本当はどちらなのだろうか、と考えさせられた瞬間であった。

つぎに、チキンを食べながら日韓戦を見た時の話（韓国でよくある光景らしい）、

「ねえ、さっきから、司会者は何をいっているの。」

「右！左！上！下！とか、ヘディング！とか。」

「今のはずるいだろう！！！！とかいわないの？日本はよく、因縁の戦い！とかいっているけど。」

「韓国のスポーツ試合の放送は、事実を述べるだけだよ。」

2.2 日韓関係に対する学び

現在日韓関係が険悪なのは、お互いの価値観を知らないために、相手を誤解してしまっている。わたしたちはお互いが近い存在であると思うが故に、自身の価値観を相手がそのまま受け止めるだろうと思い込んでいる。確かに、日本と韓国は近い。顔だって似ている。文化だって似ている。しかし、実は微妙に違っているのだ。この違いは、メディアによって描かれるものではない。相手の地で、相手の文化で、ともに過ごすうちに、ふとした瞬間の対話の中で表れるようなほんの些細なことなのだ。私たちはそれをセミナーを通じて実感することができた。日韓関係は、人々のこうした「対話」や「実感」が積み重なることで、改善が可能なのではないか。というのが私たちが達した結論である。

3. セミナーについて

本セミナーは日韓関係を考えるにあたって重要な「対話」や「実感」を得る機会であったという点で、評価に値する。今後日韓関係を変えていく主体となるのは若者、学生である。日本は、この日韓セミナーのような対話や実感の場を学生にもっと提供すべきである。しいて今後のセミナーについて改善案を提示するのであれば、韓国の学生が日本の「建前」を知っているように、事前研修でもっと韓国の文化や習慣について知りたかったということである。また、今回事前準備でわたしたちは韓国語の習得を行っていったが、わたしはプレゼンテーションの韓国語よりは、「いただきます」「乾杯」「ほんとに？」のような、言葉のほうが、セミナー中のさらなるコミュニケーションのきっかけになったのではないかと思う。

学生の私たちができること ～日韓セミナーを通して～

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たちのグループは「交流」というテーマで互いに発表の準備を始めた。お茶大側では、「交流」というテーマはざっくりとした枠組みだったため、さまざまな交流の中からどの交流に焦点を当てるかを議論した。まず、日韓交流を議論する上で参考にするために、日本人 78 人（10 代～60 代）に韓国・韓国人へのイメージに関するアンケート調査を行った。このアンケート結果によると、ドラマやK-POPによる韓国文化への関心がある一方で、歴史・政治問題によるマイナスイメージも確固としてあることが分かった。この結果を経て、まずは私たち自身が韓国文化を実際に体験してみるべきだと考え、韓国の文化院を訪れ、伝統文化や韓流ブームの現状等を確認した。ただ、確認して、文化的交流のみを行っていても現在の日韓交流から一歩進むことにはならないため、私たち以外にも日韓の真の相互理解を広めたいという結論になった。私たちがここで焦点を当てたのは、学生間の交流と地域の交流であった。学生間の交流は、ヨーロッパのエラスムス計画を例に挙げ、さらなる学生間の交流を促進することを提案した。地域間交流では、現在行われている対馬市と韓国の交流、姉妹都市として各都市が行っている活動の例を挙げた。両国の文化を受け入れようとする姿勢は 10 年前、20 年前よりはるかに良くなってきただろう。しかし、人的交流、直接的交流による相互理解はまだ伸びしろがあることを指摘し、そこに真の友好関係が生まれると結論づけた。一時発表を終えて、韓国側もお茶大側も現状を中心に発表したため、最終発表では、今後望まれる交流と学生に今回学んだ、直接語り合うことの大切さを訴えることにした。ほとんどの学生が何かしらの SNS を使っていることに注目し、SNS の活用、実際に自分たちがグループページを作って交流を進めていくことを伝えた。さらに、この日韓交流セミナーにて互いに自分の意見や習ってきたことをストレートに伝え、素直に相手の話に耳を傾けることで、いかに今まで自分が自国を客観視できていなかったかを話し、理解し合うために直接交流することの大切さを訴えることができた。

1.2 私の学び

この日韓交流セミナーを通じて、直接語り合うことの大切さを学んだ。今まで、日韓の問題を考えて議論するときは、どうしても日本人と日本人的な考えで、日本側から韓国を捉えていたように思える。韓国で反日的な教育が行われていると知ってからは、なおさら「日本が正しい、韓国は日本人が嫌いだから嘘を教えている」と思っていたこともあった。ただ、今回のセミナーを通して、思ったことや自分の考えを直接伝えることで、相手が自分の意見についてどのように考えているかを一生懸命に聞こうとする自分がいた。相手の話を聞けば聞くほど、それに反論を加えるのではなく、自分を客観的に見つめることができた。もし、今回のセミナーの共同発表が一次発表で終わっていたならば、こんなに議論を通じた交流が生まれていなかったであろう。さらに、この議論を経てからは、学習面以外の交流、例えば昼ごはんはんにデリバリーを頼んでパーティーのようなランチをしたことや、毎日のように全員でスイーツを食べに行ったり、互いのプライベートな話を毎晩語ることなど、心の底からこのセミナーの時間を楽しむことができたように思える。日本人が

よく使うと言われている“遠慮”なんて私たちのグループにはなくなっていき、ずっと前から知り合っていたような関係を築けた。学生の私たちがたった9日間でここまでの交友関係、信頼関係を築けたのだ。国と国の関係のベースになるのは、人と人の関係である。人と人の関係のベースに学生と学生の関係が築くことは、日韓関係の改善と良い方向へ進むステップとなるのではないかと思う。この日本と韓国の停滞してきた関係は、政府の大きな力に決して負けない小さな力、私たち学生の力でも前進することができるのかもしれないということも感じたセミナーであった。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

もっとも印象的であった違いは、日本側の生徒の多くは「どっちでもいい」ということよく使うのに対して、韓国側の生徒はほとんど使わなかったことだ。自分が考えていることは相手にきちんと伝えるのが当たり前のようであった。はっきりとした態度を示してくれるので、日本人側もそれに合わせるようにはっきりと物事を言えるようになっていったと思う。また、私たち日本人が「これおいしいね」、「今日は楽しかった」などと伝えると、「それは本音？建前？」と聞いてくるのがよくあったため、日本人は本音と建前を使い分ける習慣がある、というイメージが根付いている印象を受けた。私たちは、必ずしも建前を使うわけではないことを伝え、相手への気遣いの意もあることを伝え、興味津々に理解しようとしてくれたことが嬉しかった。

2.2 日韓関係に対する学び

過去に日本は韓国を征略し、多くの人々を傷つけたことは紛れもない事実であり、心の底から反省と謝罪を韓国に行うべきだと私は思う。今までは、日本の韓国への謝罪についてあまり興味を持ってこなかったが、それは私たち日本人が征略した側であり、傷つけた側の人間のためではないかと思う。日本と韓国の関係は確かに冷え込んでいるが、今回のセミナーに参加した学生のように少しでも分かりあおうと、互いに正面から向き合って理解しようとする人間がいることは価値ある事実であり、さらに伝播させていく必要があると思う。また、日韓関係の築きというものは政府と政府だけで行われるものではないことをこのセミナーで学んだ。私たちの活動を知った学生が、少しでも日韓関係に興味を持ってくれるようになることから、日韓関係の回復を望む声が増えていくだろうと思う。この小さな電波の波がいずれ国を動かす力になってほしい。

3. セミナーについて

この日韓交流セミナーをグローバル文化学環の必修の授業にしてほしいと思った。私の周りには、最初は実習単位のために授業を選択した学生もいたが、この9日間を通して異文化を理解しようとする姿勢を身につけ、それを自らFacebookで発信をしていた。これは韓国という一つの国に対して異文化理解できたことに止まらず、日本を客観的に捉え、日本以外の国と日本の相違点をポジティブに考えることができる力に繋がるのではないかと考えた。同徳女子の学生が日本語で一生懸命サポートしてくれたことに心から感謝し、私が学生の間に同徳の学生が日本で実習をすることがあれば、韓国語でサポートをしたいと思った。韓国という国はもちろん韓国の学生、学生の情熱と温かさを好きになった9日間だった。

真の交流を求めて

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たち4グループは「日韓の交流拡大のためにできること」をテーマに発表とディスカッションを行いました。事前学習の中では、日本人が韓国や韓国人に対して抱くイメージについて調査を行いました。そして、その調査を元に韓国の学生を通して文化交流・人的交流の側面から真の交流促進には今何が求められるか議論しました。

1.2 私の学び

私がこの活動を通して学んだことは、日本人一般が抱く韓国に対するイメージの深刻さです。77人の10代から70代の日本人を対象に行ったイメージ調査の結果では、日韓の政治的関係に影響を受けたネガティブなイメージが多く見受けられました。

私は大学生になるまで韓国人と交流したことはありませんでしたが、高校生の頃から韓国ドラマをきっかけに韓国に興味を持ち、韓国に対して親しみを感じていました。そういった自分の主観に固定された考えを持っていたため、また数年前に韓流ブームが起こったことなどから、実際韓国人に対して批判的なイメージを持っている人がそこまで多く存在すると考えていませんでした。そのため、「嫌韓思想」「反日反韓」という問題を考えるにあたって、自分の中でそこまで深刻に捉えることができていませんでした。今回のイメージ調査の結果を通して、若者世代を中心に嫌韓思想が深刻な状況として存在しているという実情に直面できたことは大きな学びでした。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

私が実際に10日間韓国の学生たちと交流して感じた日韓の文化の違いは、「人と人との距離」です。それは、そして日本人学生に対する距離の近さ、韓国学生どうしの距離の近さの両面から感じる事ができました。

同徳女子大学に行ってグループの人達に会う直前、どのように交流していけば良いのか、人見知りしないか、または人見知りされないかなど様々な事を考えていましたが、韓国の学生の方々は本当に初めから距離が近く、また言語の壁を乗り越えて私たちとコミュニケーションを取ろうとしている姿が印象的でした。日本人は言語に自信がない時について黙ってしまいがちかと思いますが、日本語がうまく出てこない時があっても決してあきらめずに話し続けようとする韓国学生の子を見て、人との距離を縮めることを日本人よりも大切にしているという点において、日本人との違いを実感しました。

さらに、韓国側の4グループの中には1年生から4年生の学生がいましたが、とても仲のいい様子を見て、今年の4月に初めて出会ったということを聞いたときは本当に驚きました。また、韓国において友人の家族構成を把握することは当たり前だということに対し、4グループの日本人学生同士が何人の兄弟がいるのか、お互いの家族がどんな人かを知らないことをすごく驚かれた時にも日本と韓国における人間関係の築き方に違いがあることを実感しました。この違いは日韓の国家間や国民同士がこれから先より良い関係を作り上げていこうとする中でなかなか受け入れられず衝突の原因になる可能性もあるかと思いますが、韓国人の距離の近い人間関係の築き方から学ぶべき事が多くあると感じました。

2.2 日韓関係に対する学び

前述したように、グループで行ったイメージ調査の結果から個々人の意識の面から見ても日韓関係現状は良好とは言えないと感じます。その原因としては国同士の政治的な衝突や反日教育などに対する批判的な見方が大きく影響していると考えられるため、日韓関係を良い状態にするには国家間の問題の解決を目指す事が必要不可欠であると感じました。

しかし、急速な国家間の関係改善を望む事ができないという現状の中で、やはり日韓の人的交流の促進・拡大が可能性を持つと感じます。イメージ調査の中で、実際に韓国に行った事がある・交流した事があると回答した人は約 20%であり、80%の人々は実際の交流がない中でイメージを作り上げているという状況が見受けられました。アンケートの中で、韓国人と実際に交流したことによって嫌韓思想を変えることができたという回答していた人もおり、人的交流が日韓関係を変えるという可能性となることが示されています。これに対し人的交流は規模が限られているという問題は存在すると感じます。実際に今回の日韓交流セミナーの参加者も日韓の学生併せて 50 人ほどであり、人的交流において日韓関係を改善する大きな効力を生み出すためにはあまりに規模が小さいと痛感しました。しかしセミナーを終えて、私にとって大切な韓国人の友人ができたこと、セミナーを終えてもなお連絡をとり続けていることなどを考えると、一つ一つの人的交流が一人一人の心を変え、その積み重ねがいつか大きな力となることを信じなければならない、また日韓関係の改善を望む者として人的交流を諦めてはならないと感じました。

3. セミナーについて

今回のセミナーは、日本人学生が韓国語で発表するという点で今までのセミナーと比べて大変挑戦的なものだったと感じます。韓国語学習者としては韓国語での発表は私自身の学習に大きく役立ち、発表はとても充実したものとなりました。しかし一方で、相手の言語を使って伝えようとする姿勢は真の交流のために大切ですが、“伝わるか伝わらないか”ということも重要であるため、外国語教育という点を考えたならば、もう少し深く学習するべきだったと感じます。

私がこのセミナーのなかで一番良かったと感じる事は、異文化理解教育という点において、10 日間韓国の学生と同じ部屋で生活する事ができたことです。ディスカッションや授業の中以外での日常生活の会話から韓国人のどういった点が日本人と違うのか、どういった点が日本人と共通点を持っているのか学ぶ事ができたことは、共に生活することを通してでなくては得られなかったと感じます。今回のセミナーでその機会を与えていただき、充実した時間を過ごす事ができたことに感謝したいです。

あたたかさに触れて

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私は5つあるグループのうち第4グループに所属し、日韓の「交流」について今まで行われてきたさまざまなレベルでの交流について調べ、日韓関係を改善するための交流とは何かについて考えた。私にとっての学びは、このセミナー自体が「交流」であるということもあり、韓国の学生と寝食を共にした9日間の様々な瞬間にあった。その中で最も濃密な交流だったと思われるのは、一次発表を終え、最終発表の構想について深夜まで話し合った3日目であった。

1.2 私の学び

その日私たちは、最終発表に向けた話し合いを行うため、グループメンバーの部屋に集合した。発表準備として用意された4日目の前夜だ。私たちのグループの課題は「こんなにも様々な交流が行われているのに、なぜ日韓関係やお互いの国のイメージは良くならないのか」というものだった。すでに3日間をともに過ごし、ある程度心的距離が縮まっていたこと、日本の学生も韓国の学生もお互いの「本当のこと」について好奇心を持っていたことに加えて、深夜だったこと、会議室などではなくベッドや椅子で思い思いの態勢でくつろぎながらの話し合いであったことなどが功を奏してか、皆がそれぞれの本音を話し合った。また、私たち4グループには台湾からお茶大に来ている学生がいたため、日本—韓国—台湾という視点からも考察することが出来、それを糸口に話は欧米にまで広がった。台湾も韓国も日本に植民地化されたが、どうして親日・反日と差が出来たのか。この問題はグローバル文化学環の講義で受けたことがあったが、台湾は韓国を、韓国は台湾をどう思っているのかなどの日本が登場しない話題については初めて聞くものばかりであった。また、日本が原爆を落としたアメリカに対して感じていることと韓国が日本に対して感じることは異なるがなぜか。ドイツと日本で戦後の態度はどう違うか。などと様々な脱線をしつつも、冒頭に述べた「交流」について、学生が出来ること、社会に求めることの2つの観点にまとめ、最終発表に臨んだ。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

韓国の学生は、アツい！と森山先生が事前学習からよく仰っていたが、韓国を訪れた初日にアツいの意味を体感することとなった。韓国の学生は、本当に情に厚い。このセミナー期間中、日本の学生は一人になる瞬間がお風呂やトイレを除けば全くなかったのではないだろうか。彼女らはどこでも案内のために着いてきてくれたし、私たちが「行きたい！」と言ったら、その日は無理でも必ず覚えていてくれて、連れて行ってくれたり、いつもグループ全員のことを考えて声をあげてくれたりと、彼女たちの振舞いを間近で見ていると日韓のあいだに誤解が生じる訳も分かる気がした。

2.2 日韓関係に対する学び

日本人の性質としてよく言われる言葉のひとつに、「本音と建前」がある。これは国際社会であまりよい印象を持たれない性質の一つだろう。私自身は建前を使っているつもりは

ないし、そもそも「日本人は～」と括られることに抵抗があるが、他の国の友人が出来れば出来るほど、国民性の違いというものがあることを認めざるを得ないと感じる。例えば日本における私の周りでは、「今度ごはんに行こう！」というフレーズは頻繁に使われ、発言したその場では行きたいと考えているが、実際に日にちを調整して足を運ぶに至らないことは多い。これは、行きたい気持ちがない、つまり建前での発言というわけではなく、他の用事に忙殺されていたり、うっかり忘れてしまったりということが原因だと私は考えている。しかし前述した台湾人学生はこれが本当に嫌だという。彼女のその考えは知っていたが、ただ忘れていただけかも知れないのだから、待っていなくても彼女から誘えばいいのにと考えていた。しかし韓国に来て考えが変わった。日本人のこういった性質を「建前」というのは好きではないが、確かに日本人は“その場限り”で行動を伴わない発言が多いのかもしれない。韓国人学生の、数日前の友人の発言を忘れずに行きたいお店へと連れて行ってくれる、という一面に対し、レポートに書くほど驚くというのは、日本社会の常識に当てはめた場合に普通以上の親切だと感じるからだ。韓国の学生は情に厚い。言い換えれば、日本の学生は冷たいのかも知れない。

ここまで述べたのは草の根交流レベルで感じたことだが、国と国、政治関係でも当てはめられるはずだ。例えば日韓関係において度々問題となる“謝罪”の問題も、日本が考える謝罪と韓国の考える謝罪の間のズレや、日本側の言動の不一致、政府の発言に一貫性がないことが問題だとあるグループが指摘しており、印象的だったが、これらにも根底には日本人のその場限りの発言をしても平気でいられるという性がある程度影響を及ぼしているのではないかと考えられる。異なる国の人と接するときには、自分が常識と思っていることが通用しないことがある。無自覚・無意識で発した言葉が、行動を伴わなかったことによって本意でない、あるいは悪意がある、とまで判断されてしまう危険性があることを忘れてはいけない。

こういった考え方の違いによるすれ違いなどは交流を行ってはじめて気づく問題点であるが、それ以前に交流をどう始めるか、交流の輪を広げるか、そして交流を維持するかという難しさもある。4グループがそれぞれの国で調査したアンケートでは互いの国について政治的には嫌いだがそれ以外はとくに知識もなく無関心、交流をおこなったことがないという人の割合がとても大きかった。私自身も、このセミナーに参加するまでは無関心な日本人のひとりであった。セミナーが与える影響は大きく、こういったセミナーが続いていくことを願う一方で、私たち学生レベルでも何かアクションを起こしていきたいと考え、セミナー中にSNSを使った発信の場を用意した。また、帰国後に家族や友人に韓国の良さを話していくことで漠然とでも良いイメージを持つ人が一人ずつ増えていくと良いと思う。

3. セミナーについて

今回、私たちは同徳女子大が用意してくださった寮で韓国の学生と寝食を共にすることが出来、とても良かった。一緒に過ごす時間が長いほど、見えてくる一面がある。一泊二日での江華島への合宿も刺激となって良かった反面、移動時間や経費に見合うほどの学びが得られたかは不明で、ただ楽しい！で終わってしまったような気もする。せっかくなら他のグループとの交流が出来る何かがあると良かった。基本的に常にグループ行動であったため、他グループの学生とあまり仲が深まらなかったことが残念ではあるが、その分どのグループも本当に一体感を持っていたようにも思う。

セミナー期間中に訪問した場所の中では北朝鮮によって作られた地下の洞窟を歩くツアーが最も印象的だったが、端に辿り着くまで日本の学生も韓国の学生もなんの洞窟かわかっておらず、事前学習、もしくは後から見た映像を先に見たかったなと感じた。最後に訪れ

た韓国の歴史博物館はとても綺麗で広く圧巻だった。自国の歴史をこうやって系統だてて国民に学ばせているのかと少し驚きもあった。

浴衣とチマチョゴリの着付けはなかなか出来ない貴重な体験であった。全体的にグループで自由に行動できる時間が多く、日本学生としてはとても楽しく充実した時間となったが韓国の学生からすると負担となっていたのではないかと不安である。しかし、笑顔で案内や細々とした準備をしてくれたことに本当に感謝の念でいっぱいだ。本当にこのセミナーに参加して、韓国への見方を大きく変えることが出来て良かった。このセミナーを通じてできた友人を訪ねに、近いうちに韓国を再訪したい。

交流だからこそできること

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

今回私たちのグループは「日韓交流」というテーマを取り上げた。最初、日韓交流活動についての提案をいくつか話し合い、各自で韓国文化院へ行き、色々な情報を集めた。しかし今まで日本と韓国は様々な交流活動を行ってきたが、いくつかの交流活動を開催しても両国の誤解など解けないという問題に気が付いた。そこで私たちは韓国に関するアンケートを作成し、日本人が答えた結果に基づいて、まず、大学生の私たちは何かできるかについての意見を交換し、人的交流の促進における可能性を考えた。次に日韓の地域間交流の事例を取り上げ、真の交流を目指し、解決策を提案した。

1.2 私の学び

私が交流グループの活動で学んだことは、交流というのは言うものではなく、実際に自分の体で行動し、継続的な関係を築くということである。今まで日韓間で確かに様々なイベントが開催されたが、なぜ日韓関係が悪化する一方なのかずっと疑問だった。グループのメンバーと話し合っても結局納得できる答えが見つかなかった。しかし韓国人と接するとともに、日本人と韓国人はそもそも求める答えが違ったこともあり、心の声をアピールしたくても、対話する機会はあまりにも少ないため、この問題は両国がずっと見えないふりしていたと感じた。

今回、私たちのグループのアンケート調査から、日本人は韓国人に対するイメージは「良いイメージ」と「悪いイメージ」を両方持っていることが分かった。良いイメージを持っている人は主に美容、美食、カルチャーなどの情報で得られる印象であり、悪いイメージはマスコミから流れた歴史や領土問題の影響によるもので、日韓関係は今日になっても、深刻な状態がずっと変わっていない。今まで行った交流の欠点を探し、何よりも一時的な交流活動ではなく、どのような形で続けるのが重要だと共感できた。私たちは教科書やマスコミを変えることができないが、最も効率的な手段としてやはりSNSで発信するという答えにたどり着いた。実際に私たちのグループもfacebookで「一期一会」というページを作成し、日韓間で開催されるイベントや交流活動を定期的に更新している。こうやって人と接することはお互いのイメージの理解に繋がるだけでなく、自分と相手の文化の違いを再認識し、異文化と接するうちに最初から持っていたステレオタイプや偏見などは、相手とその違いを乗り越え、徐々に小さくなり、文化の違いは当たり前となる。いずれ最終的に同化する可能性があるのではないかと考えた。

またこれから学んでいきたいことは韓国語である。今回森山先生がみんなに韓国語で発表するように要請したことが、韓国語を勉強するきっかけとなった。最初韓国語で発表することを聞いた時、本当に冗談をやめようと何度も思い続けた。しかし相手の言葉を理解するのが文化や習慣を知る機会ではないかと勉強するうちに悟った。たとえどんな簡単な挨拶でも、相手の言葉を真似したりすることで相手も心の底から喜んでくれるでしょう。そして、知らず知らずのうちに国籍問わず、両方の距離も一気に縮まる。今回韓国側はほとんど日本語で対応してくれて、留学生の私にとってもとても容易ではないことだと実感した。これはセミナーの課題ではなく、自分の意思で少しずつ韓国語を勉強していきたいと思う。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

今回のセミナーを通して、私は韓国人に対する印象が大きく変わった。台湾で生まれ育ちの私は韓国に到着した時点で、まるで台湾に戻った気分だった。昔から韓国人は嘘ばかり、いんちきというような悪いイメージを受けてきたが、実際に会ってみると、そういう流れてきた噂を信じた私は、心のどこかでとても恥ずかしかった。私は第3者の立場から見ると、韓国人はスキンシップが多く、私たちの前に何も隠れずに直接本音を言ったり、もし何か悩みがあったらすぐ教えてくれたりすることで、ただの9日間だけで何でも話せる仲間になった。たとえ言葉が通じない時も、ジェスチャーを使いながら、今まで学んできた日本語を相手に伝えようとする姿が見えて、やはり日本との違いを改めて実感した。また、韓国と日本の食事も大きな差がある。韓国のメニューではほとんどおかずが見られないと気がついた。何故かと言うと韓国のおかずは種類が多く、無料で提供してくれるからである。今まで日本で色々な習慣を習ってきたが、まさに日本の常識は韓国で非常識になるとは思いもよらない。これが決して日本で体験できない経験だと思う。

2.2 日韓関係に対する学び

私は大学に入るまでには日韓関係あまり知らなかったし、興味も全然持っていなかった。いくつかの授業で直接韓国人の考え方を知り、日本人の本音を聞いたことで日韓関係は決して他人事ではないと初めて感じた。日韓関係の深刻さを知れば知るほど他人でも今の状態はなんとかしたい気持ちが強かった。今までは歴史や領土問題についてずっと議論したくなかったが、それは私たちが自分の立場しか言えないからではないかと思い、また自分に有利な説に立とうということである。以前中学校の先生が「歴史から教わったのは二度と同じことを繰り返さないよう」と教えてくれた。今の私はこの言葉の重さを改めて感じた。私は日韓関係に対して何も変えることができないが、せめて周りの人に確実な真実を伝え、教科書やマスコミからの知識ではなく、実際に相手と話し合いながら、違う立場をちゃんと理解し、両方とも納得できるような答えを生み出すのが理想的である。

3. セミナーについて

日韓交流セミナーで最も驚いたのは韓国側の言語力である。韓国人は第2言語或いは第3言語を使っている際に、言語の正しさより相手に伝えようという気持ちの方が強かった。そして、分からない単語があったとしても、恥ずかしがらずに堂々と日本人に聞いたり、直接携帯で調べたりすることが多いと判明した。これがもしかしたら文化と小さい頃からの外国語教育に影響を与えるのではないかと考えた。日本側は明らかに韓国語に興味を持って、直接聞いたりすることが少ないと思う。日本人にとっての常識はなるべく他人に迷惑をかけない、従って一定距離を置かなければならない。その結果として韓国人はいつも積極的に日本人に声をかけたりすることが多いと感じた。これが今、日本側は必要なものであり、相手の利点と欠点をよく理解してこそ、自国が足りないところにも気づくだろう。それを中心に考えると、今より身近な外国語教育も一歩近づくのではないと思う。今回このようなセミナーに参加できて本当に最高の幸せであり、この貴重な経験を未来に活かし、また今後もこのような有意義な交流活動が実現することを願う。第10回日韓セミナーは私にとってかけがえのない思い出になった。

実際に会わなければ分からないこと

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私の所属する4グループのテーマは交流でした。事前学習では、文化院への訪問など日韓交流の現状と課題について調べました。セミナー期間中には、現在の交流では日韓関係が満足できる状態とは言い切ることができないがそれはなぜなのか、ということに重点をおきディスカッションをしました。

1.2 私の学び

私たちは、仲良くなった友人たちとのディスカッションを通じて、「お互いに自国を客観的に捉えることが足りない」という結論を導きました。お互いの国の勝手なイメージを排除してお互いのことを知るため、私たち大学生ができることの一つにSNSでの情報発信ということがあります。より身近な関係の人から情報を得ることにより、韓国に対する興味を得ることができるのではないかとことです。私は今回8/2～15という日程で韓国に滞在していましたが、その間、実際に韓国で食べた食事の写真や観光地の写真をTwitterアカウントに投稿していました。日本に帰国したのち、私の投稿を見てくれた友人たちからは、「料理とても美味しそう、食べてみたい」「韓国とっても楽しそうだったね、私も行ってみたいくなった」という言葉をかけてもらえたということから、SNSでの情報共有、特に身近な人からの体験を聞くことは効果的であるということがわかりました。しかし、このままではそれだけで終わってしまうため、今後の課題としては、興味を持った相手への働きかけが挙げられると思いました。具体的には、実際に連れていくことが最良なのですが、それでもこれをきっかけに韓国料理を食べにいたり、韓流アイドルに興味を抱かせたり、日本でできる文化の体験だけでも有効だと思います。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

今回のセミナーにおいて、一番印象的だった日韓の文化の違いは、「謝罪」の文化です。日韓関係においても、日本側は「何度も謝罪を繰り返している」、韓国側からは「日本は自国が犯した罪に対して謝罪をしていない」という議論がよくみられます。実際にグループ内で議論した結果、日本の謝罪には「遺憾の意を表明する」というような韓国人にとっては直接謝罪と感じられるような表現を使っていないために、このような認識の違いが生じているということがわかりました。

2.2 日韓関係に対する学び

日韓関係に対して私はこのセミナーに参加する前は、「日韓の国交が政府主導で盛んになるのは、互いに利益があるときまたは共通の敵が発生したときしかないのではないか」と考えていました。しかし、今回のセミナーを終えて、日韓関係に新たな可能性を感じることができました。日韓関係を改善するためにはお互いに間違った印象をなくすことが必要です。その点において、今の私たちには歴史教育をはじめとした様々な改善の余地が残されています。

また私が今回のセミナー中に一つ感じた日韓関係のあり方ですが、似た者同士で一体化

を目指すような交流の他に、お互いのアイデンティティを認め合いつつ差別や偏見のない、例えるならば良きライバルのような関係という交流のあり方も目指す先にあっても良いのではないかと思います。あまりにも近い距離や日本人と韓国人の似た外見から、お互いにお互いの文化を吸収・融合・一体化して壁をなくしていくという交流のあり方も考えられます。しかし、実際に今回の交流を通して私はますます韓国文化の良さを感じました。日韓以外の国から見たら似ているかもしれない文化や習慣も、実際に体験すればその一つ一つに驚きや感動を見つけ出すことができます。近いからこそあえて壁を残しつつ、その壁を軽々と越えてき違いを楽しむというような交流のしかたもあるのではないかと思います。

3. セミナーについて

今回のセミナーで、同じグループの韓国人の友人に「もみちゃん（と呼ばれていました）は日本人じゃないみたい〜。」と言われました。「え、韓国人みたい？」と聞くと、「ううん、韓国人でもなくて、なんか、国際人？みたいだよ。」とはにかみながら言われました。また台湾からの留学生の友人からも「高口には多分台湾もあってるよ〜。韓国が楽しいんなら絶対に台湾も楽しめると思う！」と言われました。これは私が今回のセミナー中に言われて、返す言葉も思い浮かばなかったぐらい嬉しかったことです。日本国内において国民教育を受けていただけならば、私はきっとこのように言ってもらえなかったでしょう。日本人というアイデンティティの中に自分を浮かべるのではなく、自分を確立するアイデンティティの要素の一つとして日本人ということを浮かべるということによって、マイノリティを包摂し多文化にも対応できる、グローバル化が進行する時代を生きる人が出来上がるのだと思います。世界の中での新しい自分の捉え方を考えるきっかけを与えられたこのセミナーは、シティズンシップ教育という点からはかなり評価できるものだと考えます。

また今回は事前学習から韓国語に触れていたことにより、滞在中ずっと日本語でお世話をしてくれた同徳のみなさんの優しさや努力をより深く実感することができました。相手の立場に立って考えるという点では、少しでも韓国語に触れるようにするということは大変な効果があったように思いました。

かけがえのない経験と学び

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私は、4グループ「日韓交流の在り方」に所属し、事前学習では、インターネットを通じて、10代から60代の日本人78人に韓国に対するイメージについてアンケートを取った。そのアンケートを基にこれまで行われてきた日韓交流について、4グループのメンバーそれぞれで、調査を行った。

セミナーでは、現在でも日韓交流は行われているのにもかかわらず、なぜ未だに関係が改善されていないのかということについて、お茶の水女子大と同徳女子大の学生皆で話し合いを行った。話し合いの中では、日韓交流という枠にとらわれず、現在の日韓関係の障壁となっている問題、例えば、領土問題や慰安婦問題、大統領・首相のこと、お互いの国の歴史教育についても意見を交わした。そこではやはり、いくら文化面の交流が促進されても、お互いの国に対するマイナスイメージが払しょくされない限り、真の日韓関係の改善は実現されないという話になり、それを打開するための策について話し合いを行った。

1.2 私の学び

事前学習のアンケートでは、韓国に接点がある（例えば、旅行に行ったことがある、韓国人の友人がいる）と、韓国に対しても良いイメージを抱いており、逆に、接点がない人は、韓国に対して、政府や歴史認識の観点から、韓国に対して悪いイメージを持っていることが分かった。しかし、韓国に対してどのようなイメージを持っているかで、「良い」「悪い」「どちらでもない」で、選択してもらうと、どちらでもないが、最も多い回答となった。これについては、文化的な面（K-POPや、韓流ドラマ、食、美容）では、韓国に対して、良いイメージを持っているが、政治的な面では、悪いイメージを持っているため、総じて韓国に対するイメージについて、「どちらでもない」という回答が多くなったことが、アンケート結果から分かった。文化面での交流は、年々促進されている反面、政治的な問題が、日韓関係に軋轢を生じさせ、それが、国民の間にも広がっているということが明らかにになったアンケートであった。

セミナー中、4グループのお茶の水女子大と同徳女子大のメンバー皆で話し合いを行った際、これまで自国に対して、客観的にみるということができていなかったということに気付かされた。やはり、日本で韓国について報道されることは、日本という目線から語られていることであり、韓国からの視点というものは、皆無に等しいものである。韓国の政治に対する、韓国人なりの意見を話し合いの中で聞くことができ、それは日本に住み、ただメディアやSNSを目にしているだけでは、得られることのない情報であった。日韓の間で起こっている問題を、一方の立場からではなく、双方の立場から理解できるようになっていく必要性を切に感じた。

また日本と韓国の歴史教育についても、話し合いを行ったのだが、例えば日本では、広島、長崎、沖縄、東京大空襲など、被害を受けた歴史について重点的に学び、その点から、「このような悲劇を2度と繰り返してはならない」という様な、歴史教育を受けているが、侵略の歴史については詳しくは学ばず、ましてや慰安婦のことについては、まったく学んでいない。また、韓国の歴史教育においても、受験のための歴史の勉強という特色が強く、歴史を深く学ばなくなっているということが、話し合いの中で出てきた。この点に関して

は、日本も同じことが言えるだろう。慰安婦問題についても韓国人は、学校で学ぶのではなく、インターネットからその歴史を学ぶということが話されていた。日本人は、自国が犯したことをまっすぐに受け止める必要があり、また日本でも韓国でも暗記するための歴史という考え方が少しでも無くなる必要性を感じた。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

セミナー中、「本音と建前」という言葉が、話の中で出てきた。韓国人にとっては、この「本音と建前」という概念が、あまり理解できないということであった。日本人が、相手を傷つけないために使ったり、社交辞令的に使用する「建前」という概念は、日本特有のものであるということに驚きを覚えた。ちなみに私のグループには、台湾人の邱于邱さんがいたが、台湾人にも「本音と建前」は、理解できないということであった。

しかし「本音と建て前」が通用しないからこそ、セミナー期間中、私は自分自身が思っていることを正直に話さなければならない、まっすぐに思いを伝えなければならない、という気持ちになることができた。そして同時に、日本の「本音と建前」という文化は、「意外と面倒くさいものなのかもしれない」という感覚を覚えた。

セミナー期間中、日韓双方の学生が、お互いの思っていること、本当の気持ちをストレートに話すことができたからこそ、9日間という短い期間の中でも、かなり親密な仲になることができたのではないかと考える。

2.2 日韓関係に対する学び

そもそも私が、本セミナーに参加した理由として、日本人の反韓感情に疑問を持ったためである。最も日本から近い国であるのに、なぜ嫌うのか。戦時中に日本が、韓国をつらい状況に合わせたのだから、むしろ申し訳ないという気持ちが先にあるべきはずなのに、なぜ、対立してしまうのか。私自身、疑問を持ち始める前までは、周りの影響を受け、「なんとなく嫌韓」という感情を持っていた。しかしそもそもなぜ嫌韓なのかと考えると、思い起こすのはメディアから得ていた情報ばかりで、自分が現状を目で見て判断しているわけではないということに気が付かされた。このセミナーに参加することで、自分の中にある疑問を解消したいという思いから、参加するに至った。

セミナーを通して、感じたのは、国境や国籍は関係ないということである。本当に同世代の仲間として交流することができ、話す言葉や生まれ育った場所は違うけれど、人間ということに変わりはなく、9日間という短い期間の中でも、心を通い合わせることができた。そして、同徳女子大の皆の優しさに触れ、自分が少しでも嫌韓という感情を抱いていたことに対して、申し訳ない気持ちを抱いた。

現在日本人が抱いている嫌韓感情、韓国人が抱いている反日感情を形作っている要因には、思い込みというものが大きく占められていると考える。本セミナーのような、日本人と韓国人が直接交流することができる機会があるだけで、人の感情というのは、大きく変わるということを心の底から感じる事ができた。確かに、政治的な対立を中心として現在の日韓関係は冷え切っている。しかし国民私たち自身が、報道されていることだけに左右されず、韓国の立場というものを考えられるようになれば、少しずつ変わってくるのではないだろうか。今回セミナーを終えて思ったことをFacebookに投稿したところ、後日友人に会った時などに、「韓国はどうだったか」と尋ねられることが何度かあった。私がSNSで情報を発信するだけでも、興味を持ってくれる人はいるのである。またその経験を尋ねられた時に、私が感じたことを直接伝えられれば、それによって嫌韓感情の緩和につながる事が、微力ながらもできるのではないかと考える。「セミナーに行ってよかった」と自

分の中の感情にとどめるのではなく、本セミナーを経て感じたことを周囲に伝えていくことが、重要である。国同士が本当に和解し合える時が来るのには、まだまだ時間がかかるかもしれないが、日韓関係の現状を私たちの世代で、必ず変えてみせたいと思えることができたセミナーであった。

3. セミナーについて

今回、セミナーでの一次発表を韓国語で行ったが、韓国語を少しでも理解できる状態で韓国に赴くことができたことが、本セミナーをより良いものにしたと考える。やはり、セミナーでの言語を日本語だけに限ってしまうと、平等とは言い難い。確かに、同徳女子大の学生の日本語力に比べれば、我々の韓国語力は、乏しいものであったが、一次発表を韓国語で行えたことは、ネイティブが韓国語の学生が、日本語で9日間を過ごすという大変さを少しでも理解することにつながったため、今後のセミナーでもぜひ続けていただきたい。前述のことも含め、本セミナーは、異文化理解の大きな役割を担っていると考えられる。人的交流は、先入観や固定観念を覆す大きな役割を担っている。日韓がお互いの理解を深めるための小さな一歩が、このセミナーによって踏み出すことができるのは確かである。来年以降も学生たちがその一歩を踏み出すことができるようにするためにも、本セミナーが継続されていくことを願ってやまない。

日韓セミナーを通して

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私の所属したグループでは戦後 70 年談話作成を行った。戦後 70 年を迎えるにあたって日本・韓国両国は談話を発表するとされているが、日韓関係の冷え込みにともなって談話に関しても不穏な報道がなされ国交回復 50 周年に全く似つかわしくない陰湿なムードが日韓の間に流れている。そればかりか、そのような節目の年であることを知らない人も少なくない。そのような中で、それでは国家レベルではなく学生として互いの国に伝えたいこと、伝えるべきことは何かを過去の首相談話を参考にしつつ出し合い、一次発表・学生談話を各校の学生で準備した。セミナー期間中の話し合いは互いが普段から抱いていた疑問や一次発表を聞いて感じたことを率直に挙げてそれに答える形で進んだ。さらにそれから得たことを盛り込んで二次発表・日韓共同声明を作り上げた。特に私の主な担当パートでは過去の歴史の反省、侵略行為の詳細・明記、明確な謝罪、今後の行うべき努力を重視して談話を作成した。

1.2 私の学び

戦後 70 年談話の作成というのは包括的なテーマだけに難しかったが、多くのことを話し合う中で互いにバックグラウンドの違いを知り、微量ながら誤解を減らすことができたように感じる。話し合いでは特に日本のすべき「謝罪」とは結局何なのか、メディアの伝えている隣国は本当の姿なのかなどを共に考えることで両国を客観的に見つめ直すことが出来た。靖国神社参拝や領土問題など学生の私達にとってどのような意味があるのかという質問には、少しでも一般人学生である私達の実感が伝えられるよう努めた。

私は日韓関係や談話についての否定的な報道を聞く度に「謝罪」とは何だろうと考えていて、そして今回の談話作成においても「謝罪」ということに重きを置いていた。それは韓国政府が何度も主張するように、最も求められているものだと感じたからである。しかし、実際は「謝罪」とは何を示すのか、談話文としては具体的に何を記載すべきかといったことは分からず漠然と謝罪が必要だと考えていた。そのため一次発表では単に歴史上のことに対する謝罪に終始してしまったと思う。日本としては過去の談話で何度も謝罪を述べたのに何故まだ必要なかと反発する気持ちが大きく、謝ったら負け、自身を貶めることになるといった意識があるとも理解できるが、私は許す、許さないに関わらず謝罪は一生続けるべきものだと思うし、本当に謝罪の気持ちがあるなら謝罪を屈辱だと感じることはありえないと思っている。話し合いでは韓国側の求めている「謝罪」とは何なのかを聞き、韓国の学生からは謝罪の言葉と行動が一致しないことが不信につながるという意見を多く貰った。言葉だけで謝罪をしても、行動が伴わなければ伝わらないというのは国でも個人でも同じだ。当然のことであるのに思い至らなかったことを反省し、今回客観的に自国の行いを見つめることが出来たことは良かったと思う。お互いの思いの丈を話し合った結果の共同声明は素人の学生たちで作ったものであって、単なる理想で、足りない所も多くあるかもしれない。しかし、いつかこのようなものを公式に両国が発表するようになればいいと心から願っている。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

韓国の人たちは上下関係が厳しいというイメージがあり、実際に一年生の生徒は真っ先に動くといった印象を受けた。しかしだからといって先輩と後輩の距離が遠いというわけではなく、それは先輩を純粹に尊敬しているからこそその行いであり、先輩の方もそれを当然と思うのではなく毎度感謝をしていた。また韓国の人々、特に学生はとても勤勉だというイメージを元々持っていた。これは事前授業の時の彼らの流暢な日本語などから既に感じ取っていたことだったが、実際に会ってから、大学に入ってから日本語を学び始めたという生徒が多いにも関わらず私たちの言葉をほとんど理解してくれたことに本当に驚いた。一方韓国語をほとんど勉強していない私は韓国人学生の日本語能力に頼り切りになってしまっていた。日本人は勤勉だなどと言われ私たちもそれを聞いていい気になっているが、それこそ単なるイメージであって足下にも及ばないのではないかなと思う。

2.2 日韓関係に対する学び

日韓関係については、韓国の学生の日本と日本の政治に関しての印象、自国・韓国の政治に関してどう思っているかに興味があったが、朴大統領や政府の日本に敵対するような意見に賛同なのではないかと恐れていた。しかしそれは韓国の学生も心配していたことであり、話し合いを通じてお互いに「各国の政府の言葉と国民、学生の気持ちは必ずしも同じではない」ということを知り、不安を解消することが出来た。それは「勘違いされたくない」という気持ちよりも、相手に安心してほしいという気持ちによるものだったと思う。

私は元々K-POPや韓流ドラマなどの韓国の文化が特別好きなわけでもなく、むしろ歴史や報道からしか韓国との繋がりが無い状態だった。一方戦中生まれのお祖母などはマイナスイメージを持っていたし、渡航直前に連絡した際も心配された。しかしそのような中でも私はあからさまなマイナスイメージや偏見があるわけでもなかった。それさえ抱く知識も無い、つまりどちらかというと無関心であったのではないかと今になって思う。それでも周りの声や報道をぼんやりと聞いてきた自分のどこかには、自覚が無いだけで偏見の気持ちがあるのかもしれないという思いが常にあり、だからこそそれを意識的に無視したいという気持ちもあった。ところで日韓関係を象徴する問題として領土問題がある。この問題に関して、私は中立という立場をとってきた。つまり日本のものとも、韓国のものとも言い切ることが出来ないという意見だ。これは領土の成立ということ自体の曖昧さによる結論であったが、やはり逃げにすぎず、相手の国のことを真に思うことではなかったのではないかなとも感じるようになった。どちらにも偏ることが出来ないから中立というのはそれこそ曖昧で表面的な考えだと捉えられてもおかしくないと思う。それなりの誠意や努力をもって考えてきたつもりではあったが、実際に会って交流をすることで素直に共感することが出来るようになったと思う。

3. セミナーについて

何度も強調してきたようにこのセミナーで感じたことは直接会うこと、話し合うことの圧倒的なメリットである。直接会って話し、ともに生活したことで得られる信頼感、共感といったものはSNSやテレビ電話等を通して行われた事前学習からは絶対に生まれなかったと思う。韓国側の学生の日本語能力については2-1でも触れたが、ここまで一生懸命に日本語を学習してくれること、日本語を話してくれることだけで胸がいっぱいになるほどで、彼らに頼りきりであったのは本当に不甲斐無く感じた。相手の言語で話すということがどれほど歩み寄りを示すことになるかということを実感した。

日本と韓国という国の壁・距離を否が応でも感じてしまうものだが、今回は「国のつながりよりも個人のつながり」であると強く感じた。もし今後日韓関係が悪化してしまったとしても、彼らを嫌いになる、ひいてはお互いの国そのものを否定するということは絶対無いということは確信している。一方で二次発表の直前に安倍総理は談話に謝罪を入れなという報道を聞くことになり、学生という立場の無力さも感じさせられた。しかし学生というある意味気楽な立場、さらに政治に関しては全くの素人であるということで、むしろそうであるからこそ国のトップの方針に必ずしも迎合するべきではなく、間違いに気づいたなら疑問を持たなくてはならないと改めて思った。今回出来た信頼といったつながりをセミナーに参加した私たちだけで占めてしまうのではなく、周囲に伝えていくというのが今回のセミナーに参加した者の義務ではないかと感じる。

韓国実習での学び

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私達のグループは戦後 70 年談話を、学生なりの視点から作り上げ発表することが課題だった。そのため、まず、今までには政府が発表してきた談話をすべて読み、考察することから、始まった。それぞれの談話に含まれる事柄をいくつかのテーマに分け、私達の談話には何を取り入れるべきか、何に重きを置くべきかについて話し合った。これには、班員が集めてきた過去の新聞記事なども持ち寄り、参考にした。その後、過去の談話の形式をもとに、日本語で談話を作成し、韓国語に翻訳した。そして、韓国に実際に行き、全員の前で韓国語で談話を発表した。同徳女子大学の学生も談話を作成しており、それを日本語で聞いた。お互いの談話を聞いた後は、その発表を受けて気になったこと、それ以外でも日頃日韓問題で疑問に思うこと、韓国政府に対する思い、日本政府に対する思いなどを両国の学生のグループで話し合った。たくさんの言葉を交わし、お互いが納得したところで、今度はお茶大と同徳の学生で共同で日韓両国がこれからどんな関係を築いていくかを盛り込んだ学生談話を作成した。

1.2 私の学び

このグループ学習全体を通して私が一番学んだことは、「日本は反省の意を示し続けるべきだ」ということだ。韓国政府はことあるごとに日本政府に「謝罪」を求める。ニュースでこの話題を見るたびに、新聞で読むたびに、私の中に正直怒りに近い「またか」という思いがあった。きっと日本国民のなかにも私と同じことを思う人は多いのではないか。だが、この考えが、日韓関係を悪化させる一番大きな間違いだと、韓国の学生と話し合いを繰り返すうちに気づいた。日本は、確かに、過去に、韓国の人々に悪いことをした。たくさんの人を傷つけた。これは、動かすことのできない事実なのである。日本は世界から見て圧倒的に「加害者」なのだ。だがしかし、私は小学校、中学校、高校で、「加害者」としての日本について詳しく学ばなかった。小学校で 6 年間繰り返された平和授業では、主に、「いかに多くの日本人が死んだか」「いかに多くの日本人がつらい思いをしたか」について学んだ。高校の日本史の授業では、韓国統合については 1 ページの半分にも満たない。言い訳になるが、これでは戦争の被害者としての日本しか意識できない日本人が多いのも無理はない。確かに、多くの日本人が戦争で命を落としたし、つらい思いをした。それもまた事実である。だが、それ以上に、日本は世界からみたら「加害者」なのである。目が覚めるような思いだった。「何回も謝ったじゃないか」「お金も支払ったじゃないか」ではないのである。何度でも、謝らなくてはならないのである。日本人一人ひとりが、「加害者」としての日本を知り、「申し訳ない」という気持ちを持つべきなのだ。他人に気持ちを強制するのは間違いだと私は思っているので、「持つべき」だというのは違和感があるが、せめて、事実を知り、過去に思いを馳せるべきだと私は思う。そして当然政府は、過去の大戦については「謝罪」の意を伝え続けるべきなのだ。謝罪は回数の問題ではない。続けることに意味があるのだ。

2 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

一番印象的だったのは、人の親切さだ。日本人も親切だと私は思うが、韓国の人の親切さはとびぬけている。こちらが頼ったり、助けを求める前に、手を差し伸べてくれる。日本ではおせっかいと言われそうなほどみんな親切だった。本当にやさしくて、私達に韓国を好きになってほしい、楽しんでほしいと思っているのがひしひしと伝わってきた。このような気持ちは言葉がうまく通じなくても、表情やしぐさで通じるものなのだな、と学んだ。

2.2 日韓関係に関する学び

なぜこんなにも今関係が悪化しているのか、理由は「お互いがお互いの国の利益を最優先しているから」なのだと感じた。国が自国の利益を最優先にするのは当然のことだが、この姿勢を貫き通していけば関係改善は難しいと思う。だが、一番の隣国なのだ。手を取り東アジアの平和と繁栄を目指していくべきだと私は考える。それにはやはり、日本が過去の過ちを認め、反省し、謝罪の意を伝えることが一番有効な方法なのではないか。利益を追い求めつつも、どこかで折り合って良い関係を築いていきたい。

3 セミナーについて

今回、初めて私は「韓国人」の人々と触れ合った。同世代の女の子と、慰安婦や領土を含む歴史の話をして、両国の関係について話し合い意見を交換するのは日本人同士でも難しいことだ。一人ひとり意見も違うし、信念に近いことでもあると思うので、けんかになりかねない。それを、直接日本人と韓国人とみんなで話し合うのは、とても怖いことであったが、終わってみた今では、とても充実していて楽しく面白い議論だった。相手を傷つけないように、でも気持ちが的確に伝わるように、みんな慎重に言葉を選んでいった。思いやりが端々に感じられるからこそ、本音を伝えることができた。議論はすべて日本語で行ったので、韓国の学生には大変な思いをさせてしまったが、心から感謝している。初めての「韓国人」が彼女たちでよかったと心底思う。やさしくて、あたたかくて、真面目で、何事も吸収しようとする彼女たちと接して、私は韓国人が大好きになった。一緒にご飯を食べ、お風呂上がりにスキンケアをして、買い物に行って、くだらない話もたくさんした。国籍は違うけれど、同じ女の子なんだとしみじみ感じた。世界には、肌の色や目の色は違えど、たくさん私たちと同年代の女の子がいるのだなと、言葉にするとおかしいが不思議な気持ちになった。もっとたくさん自分の国に行ってみたい、たくさんの人と話したい、たくさんものを見たい、たくさんを感じたい、と強く思った。

このセミナーが私をさらに大きくしたことは間違いない。行って良かった、頑張ってよかった、と嬉しく思う。

国境や言語の壁を超え、心と心を繋ぐ日韓セミナー

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

5日目の合同最終発表に向けて5グループのメンバー全員で一つの部屋に集まって『学生版 光復 70 周年共同談話』の原稿作成を行った。その中で互いが今まで疑問に思っていたことを素直にぶつけそれを日本、韓国というそれぞれの国目線で答えるとともに、個人で、学生目線で考え意見や想いを言いあった。

1.2 私の学び

まずはやはり“韓国人”の率直な意見を聞くことが出来たのが一番貴重であったと思う。「どうして韓国側は日本に謝罪を何度も求めるのか」「そもそも韓国側の言う謝罪とはどういう意味なのか」「韓国側は日本にどうしてほしいのか」「韓国側は日本のことをどう思っているのか」「韓国側はこれからどうしたら日本とうまくやれると思うのか」…。

他人の考えや想いというのは実際に本人の口から伝えてもらわないと理解できない。想像をめぐらせることは出来てもそれはあくまでも想像の範囲であり、本当に彼らが何を思っているのかは伝えてもらわないと分からないのだ。当たり前のようなことだが、改めて韓国の学生たちと交流してみてそのことが分かったし、伝え合うことの重要さを学んだ。同じ国、同じ文化をもった人々でさえも意志疎通は難しい。国籍や文化、言葉が違う人々とはなおさら大変である。だが、そこで大変だから、難しいからとあきらめるのではなく、時間がかかっても丁寧に丁寧に伝え合うことで多少言語など壁があっても向こうが伝えたい想い、精一杯伝えようとしていることが分かってそれだけで胸が熱くなった。

具体的には、やはり言っていることとやっていることが違うというふうに韓国側から見ることから「謝罪」を何度も求めていることが分かった。私たち日本人は加害者である。実際に手を下してなくても自分の国の先人たちがやってしまったことは事実としてあるのだ。確かに私たちはもうそのときの状況を体感することは出来ないし、当の加害者にはなれない。だが、だからと言ってもう謝罪をしなくても良いのだろうか。未来を見据えよう！と明るく前向きに言い出すことが出来るのだろうか。私はそうは思わない。どんな事情があり、情勢があったって、加害―被害の関係は一度持ってしまったら変えることは出来ない。そのことを私たちは特に忘れてはいけないと思うのだ。もちろんこちらにも言い分はあるだろう。だが、相手の立場に立って相手を思いやってみると自分たちの言い分だけを言い出すことが出来るだろうか。まずは実際にあったこと、私たちの国がやってしまったことをきちんと認める。そして誠意を尽くして謝罪をする。自分たちから事実を、歴史をなかったことにはしない。きちんと後世に自分たちがやってしまったことを伝えそのことについて自ら考えさせる。そうして、その上で友好な関係を築きたいことを相手に伝えるのだ。『今』を生きる私たちは昔のことに目を向けるのが辛い。どうしても先を見てしまいたくなる。だが、そこで踏ん張って過去に想いを馳せることで一歩上の関係を結べるのではないかと思った。

それと同時に自分たちの想いや考えもしっかり伝えることの重要さも学んだ。お互いに疑問をぶつけあったときに靖国神社参拝についての話題になったが、日本人（学生）が靖国神社に対して思っていることや知っている知識は韓国側の学生にとっては新しい知識であったようだ。そのことさえも私は気付かなかったことなので、お互いに知らないで誤解

をしてしまっている部分がまだまだ沢山あるのだろうな、と思った。それはとても勿体ないことだ。国と国との話し合いには様々なことが絡んでいるため素直な話し合いはどうしても出来ない。だからこそ草の根レベルで私たちが互いに思うこと、分からないことをぶつけ合うことが知らないことをより少なくし、誤解を解く鍵となるのだろうと考えた。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

韓国語で談話の原稿を作ってグループや日本人学生で聞いたときに、韓国は日本と違ってストレートに表現する。だから伝えたいことがあるなら日本もオブラートに包みすぎるのではなくストレートに表現した方が良いのではないかという案が出た。その言葉に従い少し目を覆いたくなるような内容にもできる限りストレートな言葉を使って表現をした。「ストレートに表現する」とだけ聞くと、なんだか気を遣わずにハキハキと自分たちの意見を発信するような印象を受ける。実際私自身がそう感じ、韓国に行って韓国の学生たちと交流するまでそう思っていた。だが、実際は当たり前かもしれないが、ストレートな表現をしながらも、その言葉や表現の中には日本人以上に相手への気遣いが感じられた。おそらく素直に相手に届く言葉を使って自分の想いや考えを表現するため、その表現によって相手がどう感じるのかをととてもよく（もしかしたら日本人以上に）考えているのではないか。日本語はオブラートに言葉を包むだけではなく、最後まで言わないところで相手が自分たちが言わんとしていることを察して理解することを求める。そのため日本特有の表現方法により相手への気遣いがカバーされやすい。異文化交流ではそれがかえって仇となりうまく相手に伝わらなかったり、ストレートな表現に違和感を覚えなかなか出来ない。だが、韓国側の表現方法や気遣いに直接触れストレートな表現でも相手を十分思いやれることに気付いた。まっすぐな表現だから…と後ずさりしないで、こちらも素直に対応することでより良い関係を築けたのではないか。

2.2 日韓関係に対する学び

今の日韓関係は必ずしも良いとは言えない。だが、これからのことを考えたとき、私は日韓関係にとっても希望を持っている。なぜならば、日本に対してプラスな印象を持ち、私たちを積極的に知ろうとしてくれる韓国人がいることが分かったからだ。他人と関係を結ぶとき一番怖いのは相手に無関心であるということだ。日韓はお互い良くも悪くも相手をととても意識している。今は外交問題などで悪い方にしか相手を意識できていないが、そうではなく文化的側面からや草の根交流、同じアジアという枠組みの中で相手の良いところを探していくことで私たちはもっと、そして今まで以上に友好な関係を結べると思う。どんな時でも相手の悪いところや出来ないところを探して揚げ足を取るよりも自分たちが出来なくて相手が出来ること、自分たちがやってあげたいところや相手の好きなところを探していく方がお互いにプラスになることは確実に多い。だからこそこれからの日韓はそのような方法でコミュニケーションをとっていくのはどうであろうか。そうすることにより日韓関係はどんどん良好になっていくと思う。

3. セミナーについて

仲良くしたいのなら、普段であつたら、絶対に触れなかったような内容に敢えて触れ本気でそのことについて考えた対話したセミナーは相手の文化や人、歴史だけではなく自分自身のそれらについても一度考え直すキッカケとなった。今回の日韓セミナーは森山先生の強い希望により今までとは違い日本側は韓国語で発表をすることになった。4月からほぼ初めて触れるハングルや発音に戸惑いながらもなんとか日本人学生は先生やTAのパ

クヘインさんの力を借りて韓国語を勉強してきた。発表の日も実習の期間も拙過ぎる韓国語であったが、韓国側の学生は自分の国の言葉と話しているということだけでうれしそうだった。もし、私たちが韓国語を何も勉強せず日本語だけを話すスタンスで行ったらどうだったであろうか。もちろん彼女たちはとても愛情深く私たちを出迎えとても良い友人になれただろう。だが、自分の国の言葉を頑張って話そうとしている、理解しようとしている、そんな姿勢を今回見てくれたからこそ短期間ではふつつ成し遂げられないほどの絆が生まれたのではないか。逆もそうである。日本語をうまく使いこなせなくても何とか自分の意志を伝えようとしてくれている。そんな姿を私はすごく愛しいと思ったし、だからこそ彼女たちが伝えようとしていることを理解したいと思った。

また、場所が違えば文化も違う。今回のセミナーはそれを体感する期間でもあった。ご飯の食べ方、挨拶の仕方、先輩の呼び方、ひとつひとつの出来事への反応の仕方など日本ではあまりなじみのないことも多かったが、分からないのなら聞いて、そしてまずは拒絶するのではなくやってみて自分でも出来る文化/なれるのが難しい文化だと判断することが大事だと思った。また、真似をしていくことで本当の韓国人みたい！と言われたのが個人的にとってもうれしかった。私は日本人である。だから日本人としての誇りもある。だが、大好きな人達に大好きな文化を真似したときに褒められたとき仲間に入れてもらえた気がしてとてもうれしかったのだ。違う国の違う文化にふれたとき、同時に自分の国の自分の文化にも改めて気づくことが出来る。これからそれを善し悪しで判断するのではなく、自分の中で新しい文化のカテゴリーを増やすことで教養や見聞を広めたいと思った。

自分の言葉で、思いを伝える

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

事前学習では、日本、韓国の学生がそれぞれ自国の発表した談話や声明について分析を行った。日本側は河野談話、村山談話、安倍晋三現首相のアジア・アフリカ会議でのスピーチを扱い、それぞれの評価できる点、問題点を挙げ、セミナーでの一次発表の原稿作りにそれを活かした。

セミナーでの活動は、互いに普段感じている疑問点や一次発表の際に理解できなかった点を挙げ、議論を重ねた。韓国側からは首相や閣僚の靖国神社参拝について国民の一人としてお茶大生はどう思うか、朴政権の対日政策についてどう思うか、また日本側からは韓国の求める「謝罪」とは何か、歴史の歪曲というが具体的にどのような点が歪曲していると感じるのかということなどを質問し、話し合った。共通認識を持つことができたのち、言葉の意味などに配慮しながら、学生らしい共同声明を考えた。

1.2 私の学び

私がグループ活動を通して学んだことは、人対人の直接の対話が、疑問や誤解を解消することに大きな役割を果たすということだ。グループの全員が「自分の言葉」で「自分の思い」を本音で伝える努力をしたからこそ、最終発表で共同声明を出すことができた。

まず、上にも述べたが一次発表を聞いて、また普段から感じている疑問を互いにぶつけあった。中でも靖国神社参拝について、また「謝罪」の意味についての話し合いは特に印象に残っている。靖国神社参拝について韓国側から疑問があったが、一人の国民としてどう思うか、と聞かれ、「首相や閣僚といった立場にある人が、その立場で特定の日に参拝することには反対である。」という答えを述べたところ、「首相などの参拝が日本国民の総意なのではないかと思っていたが、そうではないことが今分かった。」と一つの疑問が解消されたと言ってくれた。また日本側からは韓国の意味する「謝罪」とはどういうことかということ質問した。何度「謝罪」をしてもまだ謝罪が足りないということは、単なる「謝罪」を韓国が求めているのではないと思ったからである。その疑問に対しては、「日本政府が過去の談話などで謝罪をしていることは分かっている。しかしその言葉の「謝罪」とその他の政府の行動が一致していないことに、不信感を持つ。」という答えを聞いた。その時に私は、たとえグループ内という少ない人数であっても韓国の人の「思い」を直接聞くことがいかに重要であるかを痛感した。韓国でも日本でも、やはり大きな情報源となるのはマス・メディアである。私たちはその報道が正しいとは限らないこと、時には偏向していることも直接の対話を通して学んだ。私たちは教育を受け、様々な環境に身を置き、その中である種の固定観念を誰しもが持っているのではないだろうか。しかし今回のセミナーで「けんかになるかもしれない」話題を話し合うためにそれらの固定観念を一旦横に置き、乗り越え、「自分の言葉」で「自分の思い」を表現した。日韓の両政府には大きな溝が存在するが、私たちは互いにナショナリズムを超え、未来のパートナーとなるという共通認識を再確認することができたことは、共同声明を出したことの大きな意義であるように思う。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

使用言語が日本語であったことも無関係という訳ではないと思ったが、日本の学生は何かを言う時にあいまいな表現を使うことに対し、韓国の学生の方は自分の意見をはっきりと述べるという違いがあると感じた。今回のセミナーで、共同声明という二国間のどちらもが完全にではなくとも納得をしたうえで出す文章の作成には、自分は何が大切だと考え、どのようなことを内容に盛り込みたいのかということを相手に理解してもらうことがとても重要だということを学んだ。日本側がしっかりと意見を述べることで、韓国側も熱心に耳を傾けてくれた。共同声明というと硬い文章になりがちだが、学生の共同声明ということで、言葉の一つ一つに気を配りながらも、「私たちの思いを伝える」ことを重視したことで、違いも克服できたのではないかと思う。

2.2 日韓関係に対する学び

私たちのグループが共同声明を作成するということもあり、事前学習のときから日韓両政府の言動については意識をして見ていた。戦後 70 年談話についての報道があればそれをグループで共有したが、どの記事を見ても、どのアンケート結果を見ても、日韓関係は冷え切っていると言わざるをえない。事前学習に始まり、セミナーを通して強固になった私たちの関係とは裏腹に、政府間の関係は前進どころか離れていくことを無念に感じた。そのような状況の中、最終発表で述べた共同声明の文中で、特に私が伝えたいのは以下の部分である。

「今まで両国に持っていた偏見でお互いを見るよりは、関係の回復のための互いの努力を認めて引き立てていく姿勢が必要です。」

私はこの文がまさに「国を超える」ことを示しているのではないかと考える。先生方もおっしゃっていたように、相手のことを批判することは容易である。日韓両政府は未だこの状態にあるように感じる。しかし批判的に自国を捉え、私たちに相手がどのような努力を重ねているかを今一度考え、互いに認め合うことが現政権に求められることではないだろうか。認め合うということは、決して自分たちが不利になるということではない。認め「合う」ことには、両者の努力が必要である。そして認め合うことができれば、両国間に存在していた壁を取り除くことにつながる。今回のセミナーで、直接の対話を通し飾らない言葉で相手の本当の思いを聞き、相手の考えを知り、疑問や誤解、偏見を解消したことによって、共通認識が生まれ気持ちが軽くなったことを覚えている。その経験をこれからの日韓の関係の構築に活かしていかなければならない。

3. セミナーについて

このセミナーでは、大学寮という場を共有し寝食を共にしたことから生まれ、強固なものとなった友情という基盤の上に成り立つ、本音での話し合いができたと考えている。セミナーが始まる前はもう少しディスカッションの時間が多く割かれてほしいと思っていたが、セミナーを終えた今、事前学習やセミナー期間中の交流がなければ、最終発表に向けて本音で話し合うことは難しかっただろうと思う。共同声明の作成は、両国の学生が互いの「国」を超えなければ為しえなかった。そしてその「国を超える」ことができたのも、やはり場を共有し直接の対話があったからだと思う。そのような場、そして機会を提供してくれた今回のセミナーは、とても有意義なものであったと言える。同徳女子大の方々の温かい心遣いに心を動かされた場面が何度もあった。一生懸命に日本語で伝えようと努力してくれたことに対しても、感謝の一言に尽きる。このセミナーで出会った多くの優しく温かな友人との交流をこれからも大切にしていきたい。

日韓の学生の対話から学ぶ「謝罪」

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

グループ活動では、日韓双方が納得のいく形での発表を目指し『戦後 70 年日韓学生共同声明』の作成にあたった。事前学習では、慰安婦について言及した河野談話及び戦後 50 年の村山談話、そして安倍晋三首相がアジア・アフリカ会議 60 周年記念首脳会議で行った演説を中心に調べ、1 次発表会で述べる声明を考えた。セミナーでは、1 次発表を聞き日韓の学生双方が納得のいかない項目（お茶大側：①「謝罪」の意味する内容 ②何が韓国側の主張する歴史の歪曲に当たるのか、同徳側：①首相の靖国神社参拝に関してどう思うか ②独島に対してどういった認識であるか）を挙げ、それぞれに対して意見を交わした。これらの項目に関して互いの意見を述べ、対話を重ねた上で、お茶大・同徳の学生が一緒になって『戦後 70 年日韓学生共同声明』への作成に取り組んだ。

1.2 私の学び

『戦後 70 年日韓学生共同声明』を作成するにあたり最も深く考えたことが、謝罪が意味する内容である。1 次発表を作成した当初は、なぜこれまで歴代の首相が何度も謝罪を行ってきたにも関わらず韓国側が更なる謝罪を要求してくるのかという点に関して納得できずにいた。「戦後 70 年にもなって、日本が謝罪を続けることは自虐史観と同等ではないか」という思いを心の隅に持ちながら、1 次発表を作成したというのが私の本音である。また、日本国内においても、外交にしばしば歴史問題を持ち込む韓国に対して、日本の苛立ちと「謝罪疲れ」感が増しているのが現状といえる。しかし、今回の話し合いを通じて、日本と韓国では謝罪の指す意味が必ずしも一致していないことを認識した。同徳の学生が話していた「謝罪の意を表す言葉と日本政府の行動が合致していないこと」やキムヨンミン先生がおっしゃっていた「歴史問題をふくめ、未解決の問題に対して誠意を持って取り組む姿勢が感じられないこと」が、韓国が日本に謝罪を求める背景にあると感じた。特に、言葉と日本政府の行動の不一致に関しては納得がいく。8 月 14 日に閣議決定された安倍首相の戦後 70 年談話では、確かに村山談話などを引き継ぎ、「植民地支配」「侵略」「反省」「おわび」の文言を盛り込んだといえるが、「侵略」や「植民地支配」に関しては日本の行為との文脈では触れていない。また、「自由で民主的な国を創り上げ、法の支配を重んじ、ひたすら不戦の誓いを堅持してまいりました。」と述べる一方、安倍首相が進める安保法案での憲法・法の秩序を逸脱した行動は矛盾しているといえる。とりわけ、「あの戦争には何ら関わりのない、私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません。」という点に関しては、相手国に対する日本側の思慮の欠如を強く感じた。セミナーでの話し合いを通して、自分たちが戦争に関与していないから謝罪をしないのではなく、過去の侵略と植民地支配を認め、戦後何年経ってもそれを思い出し、彼らに思いを馳せる意味での「謝罪」はしていくべきであると思った。また同時に、言葉と合致した行動を取ることや、歴史問題を含む未解決な問題に真摯に向き合っていく姿勢が重要であると学んだ。日本側がこのような意味での「謝罪」と姿勢を見せ続けることで初めて、日韓が次の時代への一歩を進むことができるのではないかと。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

日韓の文化の違いの1つに、日本は曖昧な態度で相手との協調性を図ろうとするのに対し、韓国ははっきりとした態度を誠意とみなす傾向が強いと思った。このことから、日本人の尺度で考えた相手への妥協点を提示したとしても、それが反って相手からは不明瞭で誠意の感じられない態度と感じられてしまう可能性を知った。それ故、共同声明を作る際には、日本人の好む曖昧な表現を避け、より直接的な表現を意識して用いた。

2.2 日韓関係に対する学び

現状、朴槿恵政権が発足して以来、日韓首脳会談が一度も開催されることがないほど両国政府は対立している。政府間の日韓関係の良好化は、地政学的理由や国際社会の動向などが複雑に絡み合うため、簡単には実現できないであろう。だからこそ、民間レベルでの日韓関係を改善していくことが一層重要であると感じる。そのためには、日韓の国民双方が、安倍政権・朴槿恵政権に対して互いに批判をし合うのではなく、自国の政権を客観的に捉え、冷静に見つめる姿勢を持つことが重要であると思う。

3. セミナーについて

今回のセミナーにおいて韓国語でのプレゼンを行ったことにより、相手の心に多少であるが近づくことができたといえる。また、日韓で未解決な問題、一般的にタブーとされる問題を議論できた点が、深い相互理解に繋がったと感じる。一方、日本語科という多少日本への理解のある学生のみとの交流では、意見が偏ってしまう恐れがあると思う。より深い議論にするためにも、日本語科以外（日本への興味関心が比較的薄い学生）を交えて意見を交換することが必要なのではないかと感じた。

4. 参考文献

首相官邸 http://www.kantei.go.jp/jp/97_abe/discource/20150814danwa.html
(2015年8月14日)

隣の国の日本

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たちのグループは韓国と日本の両国の女性の社会的地位が低いという点で、女性の社会進出における日韓共通の問題点をどのように乗り越えられるかについて議論した。女性の生活と関連付けられたポリシーや社会の風潮に対して不満を感じる部分に共通点があった。韓国と日本が協力して女性が暮らしやすい社会を作る必要性を強く感じた。議論の結果、4つの共通点を探して、その問題に対する解決策も議論を通じて探し出した。第一に、子供を預けることができる保育施設の数が少ないことである。保育教師の数が少なければ、1人当たりの仕事量が増加し、サービスの質が落ちるので、政府が給料を引き上げると保育施設の数を確認することができる。二つ目は、女性、または男性が制度を利用するのは難しい社会的雰囲気なので、まず最初に制度を利用するのに気まずい雰囲気をなくさなければならない。この問題は、企業のサポートで解決することができる。例えば、賃金を引き上げて、分担された仕事をする社員の不満を減らすこと、また、妊娠の事実を会社に事前に通知し、休暇を取得するまでの業務の引き継ぎをスムーズにすること、そして企業は、普段社員に育児休暇の必要性和、女性社員の理解を増進させる教育をすることも重要だという意見が出てきた。三つ目には、家事と育児に非協力的な夫がいることだ。韓国と日本では家父長的制度がまだ多く残っている。それで、家事も女性の割合が男性より高い。これを克服するためには、家事や育児と仕事の両立の大変さをテレビ番組で扱うなどのメディア教育と父だけ育児の悩みを相談することができる父だけのコミュニティを造ることが挙げられた。最後に、育児のために仕事を辞めた女性の再就職のための支援の問題だが、問題は、例えば、女性の再就職を積極的に支援している企業に与える認証マークなどを作成することや、非正規の福祉を増加させることも必要だという意見が出た。

1.2 私の学び

私は今度のセミナーを準備しながら考えたのは韓国と日本は隣国だが、社会的な構造から、政治問題、歴史問題などあまりにも多くの問題を持っていて、解決できずにいる。その問題を大学生である私達がどのように解決方法を提示することができるかについてとても心配だった。私たちグループは、企業環境が似ていて、政治的構造が似ている韓国と日本の社会環境の中で、女性の社会進出について話し合った。お互いの国の問題点を一つずつ話しながら、再び韓国と日本は似ている点が多いと感じた。家父長的な文化と女性が育児と仕事を同時にするには難しい企業の環境、また育児施設の不足、女性の再就職、女性政治家の不足などが挙げられた。これらの問題点を補完することができる方法を一緒に探しながら、同じ女性として理解して、各国の問題ではなく、個人一人の問題でもない。私たちみんなの問題として解決して進まなければならないと感じた。韓国人、日本人、ひいては、全世界の女性が意識を入れ換えなければならない。今回のセミナーは、同じ課題を抱える隣国である韓国と日本が、これらの問題に戦うのではなく、解決をするための協力する貴重な第一歩になったと思う。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

私が思う日本の文化は日本人は個人主義が強くて、マナーが良く思いやりが多いというイメージであった。食べ物を食べる時も、個人の皿に取ってから食べ、他の人と食器を一緒に使わない。また本音、建前が徹底していると考えていた。しかし、今回のセミナーを通じてこれらの文化的イメージは、いつでも変えることができるということが分かった。お茶の水女子大の学生の皆と10日近く寮を一緒に使った時、心を開いて親しくなれば本音、建前は関係なく、むしろ率先して近づいてきてくれてうれしかった。お互いの文化の先入観のせいで持っていた誤解を実際に会って、お互いの立場から理解したら、ただの日本人ではなく、本当の友達になれると思った。

2.2 日韓関係に対する学び

韓国と日本は文化も性格も似ていて、実際に日本人と中国人を見たとき、日本人に親しみと好感を感じてきた。しかし、また、歴史的の問題の方から見れば、親しくなれない間柄だと思った。そこで、今回のセミナーを通じて、日本人の友達は韓国と日本の歴史についてどのように考えているのか知りたかった。慰安婦問題、領土問題は敏感な問題であり、軽く話すことではないので難しい内容であるが、お互いの立場を知って継続して会話をしコミュニケーションをとるならこの問題に対する解決策が出てくるだろうと思った。韓国は歴史問題について感情的に考えるのではなく、ずっと関心を持って、日本との接触を続けて、日本は韓国に対して加害者の意識をより持たなければならぬと感じた。

3. セミナーについて

今度のセミナー通じて隣の国である日本を単に日本人の友達と接触するだけでなく、お互いの意見や考え、そのように考えるようになった理由、きっかけを知ることができて非常に有益であり、その国の言語だけでなく文化についても理解して、直接体験することができてよかった。日本人との単純な交流ではなく、同じ時に住んでいる仲間として、この時代を一緒に引っ張っていく日本人の友達との交流の場であったと思う。

セミナーで学んだこと

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

セミナー開始前に1グループは江華島の日程を組むチームだったので江華島について調べました。そして、毎週1回ずつ学校にあつまって、セミナーの準備をしました。私たちは韓日共通課題について発表することをテーマに選んで、そのテーマについて調査して発表の準備をしました。セミナーが本格的に始まってからは文化体験の時間に着物も着てみました。そして、1グループのみんなで一緒に発表を準備しました。一緒にテーマについて話をしてから、台本とPPTを作りました。また、都羅山（トラサン）統一展望台、第3トンネル、臨津閣を見学しました。また、江華島のペンションでバーベキューをしました。学校で歓送会もしました。ゲームをしたりセミナーの感想を言い合いました。最後の日には1グループみんなで明洞に行きました。

1.2 私の学び

セミナーではいろんな活動をしました。一番私の心に残ったのは寮での暮らしでした。私が他人、しかも外国人と一緒に10日間暮らすとは想像したこともありませんでした。最初は距離を感じたし、ちょっとなれなかったのですが、だんだん私たちとあまり変わらないと思いました。私たちのようにおいしいものを食べるのが好きだったり、同じことで笑ったりするのを見て、私は自分の勝手な考えでその人を見ていたなと思いました。

発表の準備の時もそう感じました。1グループの発表のテーマは、韓日の共通課題で、女性の社会進出について扱ったので、みんなと韓日の女性にかんする制度とか、生活について話しました。あらゆる話をしましたが、外国であるにもかかわらず、考えや価値観の相違があまり感じられませんでした。外国人であり宇宙人ではないのに、なぜ、私たちとたくさん違うと考えたのかと考えるようになりました。

また、文化体験の時間にはゆかたを初めて着てみました。前に日本文化の授業を聞いたのですが、そこで、日本のゆかたについて学んだことがあります。私のパディが自分がもっているゆかたについて説明してくれました。授業で理論でばかり学んだことを実際日本に住む人に聞くのが不思議でした。

都羅山（トラサン）統一展望台にも行きました。正直、私は北朝鮮について今まで何も考えがなかったです。しかし、いざそこに行って実際に北朝鮮を目で見るとなぜか悲しみを感じました。このようなことが同胞愛というのだろうかという気がしました。その後、北朝鮮に対するニュースやわが国の悲しい歴史についていろいろと考えてみるようになるきっかけとなりました。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

冷麺にハサミを使わないこと。日本のみんなは韓国では食卓ではさみを使うことについて非常に不思議がってました。私は、むしろ、使わないことにびっくりしました。そして、日本では、名前を勝手に呼ばないこと。韓国では近い年の人たちの間ではあまり呼称に厳しくないのが不思議だと感じました。私が日本文化で一番興味深いと考えるのは呼称だが、韓国よりやや厳しいと感じました。関係性によって微妙に変わるのがとても不思議でした。

私が間違っただけで名前だけ呼んだことがありましたが、すごく困惑するのを見て、名前を呼ばれるだけで人がこんなに当惑するなんて、韓国ではあまり見られない光景だと思って不思議でした。これが文化的な違いなのかなと思いました。

2.2 日韓関係に対する学び

私たち1グループは、直接的に韓日関係について調査した組ではなかったので、それについて深く話はしなかったです。しかし、教育課程における差はたしかにあるとは考えられます。友達が自分の組員たちとした話を聞いてもそうだし、他のグループの発表でも、そのように感じました。

発表日に安倍首相に対して聞きました。実は、私は、今まで韓日関係に大きな興味はなかったのですが、むしろ、このセミナーに来てからあれこれ話を聞きながら、韓日関係がこうだということを学びました。

そして、今の韓日関係が悪いのは政府の影響が大きいのと思いました。でも、こんな風にならずに民間レベルでお互いに対話をしながら努力しようとしていけば、未来には政府がいくら妨害をしても、結局、政府は市民たちが願う方向で行動するしかないため、良くなる可能性はあるという希望が見えました。

3. セミナーについて

外国語教育面ではよかったと思います。10日しかなかったのですが、最初はべつに日本語を学ぶことには役立たないと思っていたのですが、10日間、24時間日本語をずっと聞くことの波及効果は相当なものでした。今まで、大学で習った日本語を使う機会がなかったので、私の日本語が本当に日本人に出会った時に役に立つのかとうたがっていましたが、一応、文法は合っていないなくても、意味はだいたい伝えることができるとっておもしろいと考えました。日本語に対する興味が高まりました。そして、辞書では分かりにくい微妙な語感などをパディがいろいろおしえてくれて知る事ができて良かったと思います。

国際理解教育面、異文化理解教育面、市民性教育面においても良かったと思います。私はかなり異文化について閉じた人だと思います。それは私がこれまで外国人にあまり会ったことがないからだという気がしました。心の片隅で外国人は外界人のように思っていたようです。話も通じないと思ったし、文化も違うからあまり深い話をするのはできないと思っていました。でも、彼らも私たちと同じ普通の人だということを学んだという点で異文化理解にも良かったと思います。そして、異文化を理解するのは国際理解と市民性教育のスタートラインだと思うので、異文化を理解するのを学ぶことができるこのセミナーに参加してよかったと感じました。

学びの美学

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

セミナーを開始するまでに3ヵ月前から毎週、あるいは一週間おきにTV会議を進行しました。最初は下手な日本語でどのように会議をするのかという懸念も少なくなかったのですが、日本の学生たちの積極的な参加のおかげで、我々は韓国と日本の共同の問題というテーマでいろいろの問題を互いに提示することができました。その中で私たちは女子大生として卒業後、あるいは近い将来に私たちが直面する問題だと思って、最終的に女性の社会進出という共通の問題に意見を合わせました。

それで私たちは両国の女性の社会進出の現況と支える制度について調査しました。最終的には、現在の不完全な政策に対する解決策を提示する方向で決定しました。韓国ではアンケート紙を作り、同徳女子大生だけではなく、いろいろな年齢層と、さまざまな職業での女性の社会進出に対する社会の認識と制度に対する意見などを集め、1次発表で、統計として使いました。そしてうちのグループは今回のセミナーが韓国で行われているだけに、実際の活動として国会議事堂の訪問予約をしましたが、セミナー期間中に時間がとれなくて残念ながら訪問することができませんでした。代わりに、日本学生たちと多量の時間を討論に使用することで、両国の現実と補足点について具体的に出了意見を要約、発表しました。

1.2 私の学び

私たちが1次の発表を準備した時には、自国を中心に調査をしました。その理由は、韓国と日本の状況が大きく異なり、自国をよく知っていること、自国を重点的に調査することが問題点をよりよく表している発表になるものと考えたからです。しかし、私は1次の発表後、私たちが発表したのは、単に韓国の女性問題を列挙したものに過ぎなかったと感じました。発表に使用した看護師休職問題やアンケートをもとにした統計は韓日共通の問題というテーマとは合わない発表資料だったと見ることができます。理由はすべて韓国内で該当する資料だったからです。したがって、日本の学生たちが私たちの発表を聞いた時、両国共通の問題を効果的に伝えられなかった点が残念でした。

また、パワーポイントの形式にも差を感じました。私のパワーポイントは、資料についての翻訳が少なく、日本の学生たちが見て、難しいと感じたかもしれません。でも、日本の友達のパワーポイントにはハングルを書いて、見やすいようにした配慮が感じられました。それで私は発表方式と準備において日本の友達の配慮の違いと私の受動的な態度の問題点を自ら感じて学びました。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

日本の友達と会う前に色々考えました。日本人と韓国人との違いを扱った本で日本人は韓国人よりも個人主義的性向があるという内容を見たことがあったためです。しかし、私は、些細なことでも相手を先に考える彼らの配慮を感じることができました。寝る前に灯りを消さずに待ったり、みんな座る時まで待って一緒に食べたり、些細なことに違いを感じました。

また、人見知りで消極的な私とは違って積極的に意見を出す日本の友達の姿を見て、これまで私がメディアのために偏見を持っていたと考えるようになりました。

2.2 日韓関係に対する学び

以前から歴史問題や領土問題で様々な葛藤がある韓国と日本ですが、日本国内の嫌韓世論が激しくなっており、韓国と日本の関係が最高に悪化した時期にセミナーをすることになって期待半分心配半分でした。なぜならば、日本の友達と付き合っ一緒に生活するということを期待する反面、韓日間の敏感な問題について話したり、意見の相違のようなものが心配されたからです。私は日本人の友達と直接的にこのような問題について話してみたことはないけれど、他のグループの発表を聞いて慰安婦問題について日本の友達も女性として痛みを共感して共に考慮しようとしているのを感じました。また、学校教育でこのような歴史を取り扱っていないため、日本の友達が学ばなくて分からないということを理解するようになりました。

したがって歴史認識の有無の違いは、教育の違いであるため、無条件的な批判よりも韓国が教えてあげればいいと思いました。それでこんな交流がもっと興味深くなって学生たちの認識も変わって、韓日関係において合意ができたらいいいと思います。

3. セミナーについて

お茶の水女子大学とのセミナーは正確に表現することができないようです。私にはそれだけ様々な意味があったセミナーだからです。私は大学で日本語を勉強しているが、日本語を話すことに恐怖がありました。このセミナーに参加しながらも、このような恐ろしさを持っていたし、セミナーを通じて日本語の実力がぐんと増えたわけではありません。ただ、私が日本語を勉強することにおいてもうちちょっと自信を持つきっかけとなった今回のセミナーが外国語の教育に役立ったと言っても過言ではありません。また、セミナーの発表がほとんど日本語で行われ、日本語が下手だった私は内容を全部分からなくて残念でしたが、5つのグループのそれぞれ違うテーマの発表を聞いて新しい視点で韓日問題を眺めようという意志を持つようになりました。

長いようで、短かった8泊9日の時間の間私は日本の友達と共に暮らし、日本の文化を習って違いを受け入れる姿勢を学ぶことができました。それで今回のセミナーは、私にもう一度学びの美学を感じることができた機会でした。

韓日セミナーを通じて得た国際理解と世界的な見方

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

この8月にあった韓日セミナーが開始する前まで、私たちはそれぞれの大学の学生たちとともに韓国と日本の関係改善に向けた対策を様々なアプローチから議論した。私の組は女性の社会的進出に対する困難を韓日共通の問題点として考えて、それに対して両国ができることにはどんなことがあるかを調べ、韓日関係の問題に接近してみようとした。このため、まず、両国の学生が各自自分の国では女性の社会進出という問題を解決するためにいかなる政策を施行しているか調査し、セミナーが始まった後にはその資料を基に、韓国と日本に役立つ解決策を一緒に考えた。計5つの組がこのように韓日関係改善に向けて議論を終えた後、自分たちなりに様々な結論を出し、このような協力過程と考えの交流を通じて両国の関係についてもう一度考えるチャンスを持った。

1.2 私の学び

セミナーに参加する前には関心を持っていなかった韓日関係の改善策や両国が持っている社会的問題点などについて今回のセミナーを通じて多くの関心を持つようになった。関心を持って眺めると韓国と日本は、様々な面で似ている部分が多かった。お互いに遠く見えた両国は地理的に近いだけでなく、社会文化的にも類似点が多く、この2つの国の関係はお互いに理解して協力することで、十分に近づけることを感じる事ができた。また、セミナーの準備は単に「韓日関係改善にはどんな方法があるか」だけではなく「韓日関係改善のために私たち、大学生ができることは何か」という方向で行ったため、このような問題に対する主体的意識を持つようになり、ひいては日本との関係において人の努力を期待するより私からどんなことを実践できるかについて考えるきっかけになった。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

日本人の友達と対話をしながら思ったことは配慮をする姿勢を持つということだった。同じ表現でも韓国はもっと直接的かつ具体的な表現を使って、親しい間柄の場合、命令型の口調を使用するのにに対して日本はそれよりもっと柔らかく、相手に対する配慮表現を用いることで、丁寧な感じの口調を使用するが多かった。考え方においては私が思ったより大きな違いはなかった。会う前までは他の国に暮らしており、他の文化の中で生活してきた友達なので私たちと違う点が多いだろうと思い、彼女たちに対する心配と恐れもあったが実際に会ってみたらいつもの韓国人の友達と大差ない同じ20代の女子学生だった。日本人と言えば静かで自分だけの領域を重要視するイメージがあったために「お茶大の学生たちと親しくなることができるだろうか」と悩みもしたが、日本人に対するそのような固定観念が今回の会合を通じて、消えることになった。むしろ先に近付いてくれる姿に感謝の気持ちを感じるぐらいだった。そして同時代を生きている大学生として同じ関心事、同じ悩みを抱えているということを感じ、そのことについてお茶大の学生たちと多くの共感が形成された。

2.2 日韓関係に対する学び

日本については、歴史的な問題で現在まで多くの葛藤を来たしているため、お互いに友好的である時があったものの、なかなか近づくことができない仲だと思っていた。しかし、この2カ月間の間、日本に対する新たな点を学んで韓国と日本の関係について悩んだ結果、関係改善は決して不可能なことではないと感じた。しかし、そのためには多くの努力が必要で、お互いに対する理解が先行すべきだ。現在、韓日関係はますます悪化しているが、両国は互いを批判するだけで関係を改善しようと努める姿は見られない。そのために一時、韓日間の多くの文化的交流が行われ、友好的なものに変わっていくかのように見えた両国国民間の認識も否定的に変化している。このような視点で韓日間の民間交流は非常に重要な役割をしている。疎通を通じて歴史や伝統、文化、政策などに対する共感を感じて信頼を築きながら外交関係を増進させようと努力すれば、両国の関係は再び近づくことができるだろう。そしてこのような努力は、政府だけでなく、両国の国民一人ひとりを含めた複数の主体が一緒になった時、はじめて実を結ぶことができると思う。

3. セミナーについて

今回のセミナーは、私に貴重な思い出をプレゼントしてくれただけでなく、多くのことを教えてくれた。まず、これまで専攻してきながらも自信がなかった日本語に対する不安をなくすことができた。日本語を習いながらも、私一人で知識を積んでいくだけで、それを言葉で表現してみる機会は少なかったため、日本語で話することに相当な負担があった。しかし、8泊9日の時間の間、日本の友達と一緒に過ごしながらいつも日本語で話して日本語が聞こえる環境の中で生活するようになり、その時間の間、日本語に自信ができた。また日本人の友達たちともっとたくさん話を交わしたかったが、限界を感じた経験は、今後の日本語学習にとって大きな刺激剤となった。

また、互いに違う文化環境で生きている友達と疎通することで、他文化を理解して認める心を育てることができた。そして友達とお互いの関心事を共有して、知らなかった日本の文化もたくさん知ったことで日本に対する興味も生まれた。セミナー期間の間お互いの文化を教え合って受け入れる経験を通じて世界を眺める広い視野を持つようになり、開かれた目と心を持った、グローバル時代の市民に成長することができた。

そして私たち自らが主体となって韓日関係の問題の解決策を捜探す過程は、国際社会問題に私が積極的に参加する出発点になってくれた。このことで、じっと手をこまねいて待つより、私たちの社会の問題点をどう解決していくのかについて苦心する姿勢が必要であることと、これがどれほど重要で価値のあることかを悟るようになり、このような学習は私が今後、国際社会を理解して迎えることに当たって大きな原動力になるだろうと思う。

<出所>

권은숙 (2006) 『韓日 言語行動의 對照社會言語學的 研究』、中央大学学位論文

最も特別だった 10 日の経験

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

1 グループでは女性の社会進出が難しい点とそれに対する解決策について討論して発表を行いました。討論をし、両国間の共通点と差異に対して新たに様々な点を知ることができました。また、事前に週 1 回集まり、韓国内の女性の就業を援助する様々な政策と機関について調査して、テレビ会議を通じて韓国と日本側で調査したことを討論する時間を持ちました。女性の社会進出に対する政府、企業の政策と、それによる政府、企業、民間団体の立場から見た対策案について討論しました。

1.2 私の学び

韓国と日本両国における女性の社会進出に関するテーマで討論をしたことで、両国間の様々な共通点と差異を新たに知ることができました。近い両国が、ある面では本当に違い、ある面では驚くほど似ているという点が興味深いと思いました。しかし、究極的な結論は、両国いずれも女性が社会に出て成長する道が険しいということでした。そして、女性の社会進出に対する問題は両国だけでなく世界的な問題だと認識することができました。また、このような問題点を解決するために、私たちの世代から少しずつ変化していかなければならないと感じました。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

遠隔交流を開始したとき感じた最も大きな違いは言語の違いでした。もしかしたら違う国であるため、言語が異なるのは当然だと感じるかもしれませんが、私たちは互いに異なる言語を使いながらも、共通のテーマで討論をしました。この言語的障壁を越えてセミナーを成功させたことで、他の文化的な違い以上に大きな差を克服できたと思います。また、世界中のどんな人も、母語を教科書と学校の授業だけで学ぶわけではありません。反対に、日本語の母語話者ではない私たちはいつも本と授業を中心に日本語を学んでいますが、今回日本の友達の会話や表現を直接聞いて話すことになり、10 日間という長くはない期間でも日本語がとても成長したと感じました。文化的な部分では、本とメディアで見学したこととは異なるものを感じました。本とメディアでは、日本人は極めて個人的で、団体生活でもお互いに交流が少ないと習いましたが、実際には先に関心も持ってくれて身近なテーマをめぐって遠慮なく話をしながらすぐ親しくなることができました。日本の友達はとても優しくよく面倒を見てくれました。日本語が上手ではないため困ったことも多々ありましたが、それをいつも理解して配慮してくれたので、日本語で話すことを恐れなくなり、自信を持つことができました。

2.2 日韓関係に対する学び

実際、韓日関係については、独島問題や日本植民地時代の慰安婦問題のような歴史的な問題についてだけ考えてきました。この問題に対する認識について両国いずれの若い世代も重要に考えない傾向があるため、より認知度を高めて、解決策を求めるべきだと思いました。そこで今回のセミナーでは韓国と日本両方の意見を聞いて討論する機会ができたこ

とがとてもよかったです。現在では、個性的な各国の文化を通じた交流も韓国と日本の関係が大きく発展するきっかけになると考えています。

3. セミナーについて

今回のセミナーを通じて、日本に対する全体的な認識が肯定的に変化し、日本語を学習するための良いモチベーションとなりました。一番良かった点は、同じ時代に他の文化の中で暮らしている同年代の友達と共に時間を過ごすことによって、自分とその周囲のみに限定されない多様で個性的な文化に接することができたことです。今回のセミナーは、50人余りが各自の多彩な色に絵を描く中で、お互いを配慮して理解する心が合わさって、美しい風景を作り出している姿のようだったと思います。最初は日本に対する漠然とした好奇心だけで、単純に日本語の勉強をするための機会と思っていました。しかしセミナーが終わった今となっては、単なる学習の機会ではなく、新たな価値観を確立することができる貴重な経験だったと感じています。

本当の意味の交流：韓日セミナー

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たちの発表テーマである「歴史」に関して、以下の活動を行った。

- ① 韓国 歴史教科書内容の調査
- ② 歴史認識に関するアンケート（若者を対象とする）
 - ・韓日の歴史認識と現状をまとめ、第一回発表（パワーポイント）
- ③ 日本歴史教科書内容と比較
- ④ 慰安婦問題・領土（独島）問題について討論
 - ・韓日歴史グループの全体意見をまとめ、第二回（最終）発表（パワーポイント）

1.2 私の学び

現在、韓日関係はかつてないくらい悪化している。その原因にはいろいろあると思うが私はその根は歴史にあると思い、歴史グループに入った。そしてその選択に間違いはなかった。私たち歴史グループは主に慰安婦問題と領土問題に関して討論した。

その2つの問題の中で、私にとってもっと学びがあった問題は慰安婦問題だった。慰安婦問題について日本の学生から新しい意見が聞けたからだ。慰安婦問題が日本国内の女性の人権問題と関わっているかもしれないという意見だった。「日本国内で女性の人権は思ったほど高くないし、権威のある政治家たちはほとんど男性だから女性問題である慰安婦問題を深く受け入れていないと思う。」この意見は慰安婦問題を日本国内の女性人権問題とかかわって考えてみたことがない私にとって新しいアプローチだった。これこそ日本人と話し合ってみないと分からない大事な意見だと感じた。

元軍人がテレビに出演し、「命がけで戦争の最前線で戦っていた私たちにとって慰安婦は当然なものだった。」と言う発言をして日本内で社会的問題になったことがあるらしい。これについて大多数の人たちの反応が「どうしてそんなことが言えるの？」だったらしい。私はこの話を聞いて日本国内で女性の人権が上昇する日が近づいていると思った。また、そうなってほしい。日本国内の女性人権の上昇とともに、時間があまり残っていない韓国の慰安婦問題も真剣に受け入れてくれる日が早く来てほしいと思う。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

韓国と日本の文化の違いを強く感じたことはないが、学ぼうと思ったことがある。慰安婦問題について資料検索をした時、日本で検索して出てくる写真と、韓国で検索して出てくる写真が違ったのだが、韓国で検索して出る写真の方がもっと残酷なのにも関わらず日本の学生がそれにちゃんと向き合う姿勢が印象深かった。むしろ韓国の学生たちがこういう写真を発表に使っても大丈夫かと心配したくらいだった。発表が終わって質問を受ける時も、日本の学生たちはどう検索すれば発表に使った写真が出てくるのかなど関心を持って質問をしてくれた。こう言うところから過去の自分の国の人がやったことを避けずに向き合う姿勢を学ばべきだと感じた。

2.2 日韓関係に対する学び

私はこのセミナーを通じて韓国と日本の間には熱に差があるということに気づいた。特に領土問題について討論するとき、日本の学生たちは納得できる解決方法だと思っ
ていろいろ意見を言ってくれたけど韓国側の学生たちが聞いたとき納得できないと思
われる意見があった。おそらくそれは韓国の学生たちが領土問題についてもっと熱く、も
っと敏感だからだと思う。

私たちは時間はかかったけどその差を韓国と日本両側の学生たちがともに理解でき
る、納得できる新しい方法を考え出すことで解決した。大学生の身分に過ぎない私たち
であるけど、私たちにもできたからこれから韓国と日本の間に存在する数多くの問
題も十分に解決して行けると思う。

3. セミナーについて

私はこの国際交流セミナーこそ本当の意味の交流だと思う。今まで日本語を専攻と
する学生としていろいろなボランティアおよび交流に参加して来たがこんなに意味深
い交流は初めてだった。日本語専攻生として歴史について日本人と素直に話し合っ
たことも初めてだった。それだけでなく、意味ある意見もたくさん聞くことができた。
今年が韓国と日本が国交正常化を結んで50周年となる年なので今までとは異なり
発表を1回目と2回目に分けて二度することになった。発表を準備する学生として1
回の発表が終わってすぐ2回の発表の準備をしなければならず、大変だったが、1
回の発表を通じてお互いが自ら知って2回の発表を通じてお互いを理解することが
できた。だから私はこれからも本当の意味の交流を実現するためには、この方式を
維持しなければならないと思う。卒業を目の前にしている私にとってこのセミ
ナーに参加したことにやり甲斐を感じた。また、とても良い友人を得ることもでき
たので今回のセミナーはとても有意義なものだったと言える。

大学に来て、本当によくやったこと

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たちのグループの活動テーマは「韓日歴史問題」であった。日韓間の多くの歴史問題の中でも特に、韓日関係に大きな影響を与える2つの問題である独島と慰安婦について考えた。まず、独島には韓国と日本の学生で今まで学んできた内容が異なっていた。韓国の学生は、小学校の時から独島が韓国の領土であるという事実をある根拠に基づいて学んできたが、日本の学生はその逆であった。

第二に、慰安婦問題については、韓国では日本の植民地時代の強制的奴隷と学んできたため感情的に対応している場合が多くあった。韓国の学生は、今後韓国が慰安婦問題を感情的にとらえるのではなく、理性的に対応すべきと考えた。日本の学生は、慰安婦問題を植民地時代の強制的奴隷という事実を認め、真剣に多くの解決策を示した。加害者意識を持つこと、女性の地位向上、一貫性のある政府の謝罪態度などである。

1.2 私の学び

正直、私はグループで歴史問題を取り扱うことは避けたかった。日本人の友人と歴史問題について話しながら1週間共に過ごすということが不安だったからである。しかし、歴史問題について真摯に向き合うことなく、互いがこの問題を胸に抱えながら、互いがそのせいで悪い印象を持ち続けるのだとしたら、今後の日韓関係改善にはよくないことであると考え、歴史問題に取り組むことにした。

日本人たちが、独島が日本の領土であると主張するのは、日本人たちもまた歴史の授業時間に独島が日本の領土と学んでいたからであった。また慰安婦問題については、私たちも考えていなかったような解決策を日本側が提示してくれたのはうれしかった。特に、自由時間に日本の学生たちと仁寺洞に行き、日本大使館前の慰安婦少女像を見た際に、彼女たちが申し訳なさそうにしている姿は見ていて気が楽ではなかった。今回のセミナーで、大学生として日韓の歴史問題について語り合ったことはやはり本当によかったと感じた。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

日本人学生と韓国学生の間には多くの顕著な違いがあり、そのような違いを発見することを期待していた。しかし、日本人学生との間には想定していたほどの違いを感じることはなく、むしろ多くの共通点を感じた。だからこそ、ふとした時に「ああ、この友達は日本人だったな。」と感じた瞬間があった。それは、スキンシップが少なかったことである。韓国では友人同士でスキンシップをすることが多い。韓国の学生はよく腕を組んでいるが、日本の学生はそのような文化は存在しないように見うけられた。このことは私にとって新鮮に感じられることであった。しかし悔やまれることは、なぜスキンシップが少ないのかということを経験した日本人の学生に問わなかったことである。今後は、韓国と日本の間に違いがある場合は、なぜなのかを理解し、その違いにより寛容になれるように努力したい。

2.2 日韓関係に対する学び

わが国では、日本のことを「近くて遠い国」という。この言葉は、距離では非常に近い国であるが、心では遠く離れていて、二国間で多くの違いが存在するということである。私はこの言葉が極めて二国間の状況をよく表現していると感じていた。地形的な特性上韓国は半島国であり、日本は島国であるため、相違点が存在することは当たり前でしかないと感じていた。しかし日本人と出会い、一緒に過ごし、会話を交わしてみると、違いを感じるようなことはますますなくなり、共通点があると感じられるようになった。違いがもしあったとしても、ただ「ああ違うね。」と言い合って新鮮な気持ちになることができるから、むしろ良いことであると考えている。日本について理解できないことも多くあるが、日本について知れば知るほど違いよりは共通点が多く見つかる。日本と韓国は「近くて近い国」ではないか。

3. セミナーについて

お茶の水女子大学との交流は、私が大学に入学して以来最高と言えるほどであり、セミナーを通じて多くのことを得ることができた。日本語力の向上、日本人の友人を得て、日本人の性向を理解することができるようになり、自分自身が成長することができた。日本人の友人と共に10日間を過ごしながら、グループ発表準備、DMZ見学、江華島旅行、自由時間、歓迎会、歓送会などたくさんことを一緒にしてきた。これらを通じてたくさんのことを学んだのはもちろん、私の人生において決して忘れることができないたくさんの思い出を築くこともできた。

セミナーは、日本人の友人と一緒に過ごすことができただけに、日本語の学習に関しては申し分のないほどに素晴らしかったと考える。日本人の友人との会話を通じて、日本語を自然に習得することができた点が非常によかった。特に日本人の友人に物事を説明しようとする努力の過程は、語学力向上の大きな助けとなった。また、友人とのより円滑な会話のためにはさらなる語学力の向上が必要であると感じ、今後の学習のモチベーションにもなった。日本人の友人は、日本語について尋ねた際にも、常に親切に教えてくれたことは本当にありがたかった。

私は日本人の友人から異なる点を感じたと同時に、学ぶべき点も多々感じた。よく韓国人が日本人の良さとして考えている、清潔さ・他人に迷惑をかけないということに加え、私が最も見習いたいと感じたことは、自分たちの伝統文化を守ろうとしているところであった。文化交流の際に、韓服と浴衣を交換して着ることがあった。私は常々浴衣を着てみたかったため、今回の機会で浴衣を着ることができたのはとてもよかった。浴衣を着ることができたことはもちろん、日本人の友人が浴衣を着る過程をすべて知っていたことは驚きであった。浴衣を着る過程はかなり複雑であり、その過程すべてを覚えていることは容易ではないであろうに、皆がその過程を全部覚えていたことは本当に素晴らしと感じた。このように、伝統文化をしっかり守っていくということは、日本人の学生が誇りを持つべきものであり、私たちは見習うべきだと考える。

韓国には「隣のいところ」という言葉がある。この言葉は、近い隣人が遠い親戚よりも優れているということである。日本人は、他の遠い国に住んでいる人たちよりも、私たち韓国人とより密接に過ごすことができるはずである。そのため、日本がわたしたちのとなりのお隣の国として、全世界の他のどの国よりも私たちにとって特別な国になることができたなら素晴らしいのではないかと考える。

人的交流の大切さ

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私達2グループのテーマは歴史だった。本格的なセミナーの前に行ったテレビ会議で私たちは「過去の韓日関係を振り返って、両国の関係改善のため、私たち大学生にできることについて考える」という具体的なタイトルを決めた。そして各国の大学生の韓日関係に対する認識や意見を調べるために、共通の項目でアンケートを行い、それを基に第1次発表を準備した。

韓国側では、アンケートを通じて、韓日両国の関係において一番争点となっている歴史問題として、歴史教科書の歪曲と独島の領有権問題、そして日本軍慰安婦の問題が最も多く指摘されていることがわかった。韓国側はこれに注目して、独島と慰安婦の問題に対する、両国の政府レベルでの立場と歴史教科書との叙述の間にどんな違いがあるかについて発表した。

その後、日本側の学生たちとの共同発表の内容は、独島と慰安婦問題に対する各自国の政府の対応と、それに対する批判的評価、そして私たちの対策と大学生レベルでできることの提案だった。まとめると以下の通りである。

＊領土問題、各政府に対する批判的評価

韓国：大統領によってこの問題に対する姿勢が異なる。

→私達が提案した解決策：各政府と民間の積極的なサポートを通じた共同歴史研究会

＊慰安婦問題、各政府に対する批判的評価

韓国：感情的ではなく客観的な態度をとるべき、朴クネ大統領はもっと女性問題を重視すべき

日本：政府の主張に一貫性がない、問題の本質を理解していない、女性の人権軽視

→私達が提案した解決策：日本は戦争の加害者意識を持つ、韓国は客観的姿勢を持つ

＊私達学生ができること：言語交流とお互いの歴史観を知り、人的交流を大切にすること

1.2 私の学び

以前に付き合った e-pal と独島問題で争いになって連絡を絶った経験がある。その時知ったのは、お互いに受けた教育が全く異なっているということだ。歴史問題に強い関心があったり、自国の歴史観や教科書の内容に不信感があったりしない限り、他国や第三者の意見にあまり関心は持たない。また、やはり数カ月前に、ネット上で、会話した人の話よりは自分が子供の時からずっと受けてきた教育の方が真実だと信じるのは当然だ、だからこの解決は大変難しいということに気づいた。

その後からは、日本人の e-pal とは歴史の話をしなかったが、いつも心が重かった。それで歴史というテーマが怖くもあり、嬉しくもあった。そして、今度のセミナーを通じて重い心に少しは希望を持つことができるようになった。直接会って、一緒に遊んで親しくなって、難しいテーマについて話し合い、誤解や知らなかったことにも気づいて、お互いの気持ちを理解するようになるこの過程がすごく意義深いと感じた。相手の意見に同意しなくても、相手の考えや気持ちを知ることだけでも意味があると思った。少なくとも、お互いに憎み合わなくなることはとても大事だと思った。

一方、残念なこともある。相変わらず受ける教育の内容が全く違うということだ。発表

準備の時、慰安婦被害者の写真を検索した。韓国サイトで検索したが、日本側の学生たちは驚いた。日本のサイトで検索すると全然このような写真は出ないためだった。こういう状況が悲しかった。

それでも、こういう交流を私たち若い世代がたくさん経験すれば、この若い世代が大人になって国を引っ張って行く立場になった時、韓日両国の関係はよりよい方向に進まないかと思っている。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

挨拶が多い。ありがとう、おいしい、ごめんなど。それ以外に違いは感じられなかった。むしろ日本人に対するステレオタイプがなくなった。

2.2 日韓関係に対する学び

あまり違いは見つからなかったのでわからない。やはり、お互いに対する否定的なイメージが多すぎるのが問題ではないかと思った。

3. セミナーについて

今度のセミナーに参加した動機は日本語の学習意欲と自信を高めること、そして日本人と日本という国についてのより深い理解をすることだった。この2つができたので、外国語教育・異文化理解教育・国際理解教育、シティズンシップ教育というこのセミナーの目的もよく果たせたと思う。

ホストとしてセミナーの全日程を用意し、日本語で原稿を書き、発表をし、難しいテーマについて話し合うなど、セミナーのすべてのことが自分にとってとても役に立った。単純な文化交流ではなく、努力や勉強する時間が長く、それ故より記憶に残った。

新しい希望

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私のグループは歴史問題をテーマに慰安婦と独島について発表しました。最初は敏感な問題で、合意に至るか、またそれを互いに受け入れられるかととても悩みました。しかし、お互いが真の解決を希望したために大きな意見の差はなく解決に至りました。

慰安婦問題では、日本の問題は1. 政府の主張が一貫性がないこと。2. 韓国の人々が問題の本質を理解しないこと。3. 女性の人権の軽視の3点でした。また、韓国の問題は1. 慰安婦問題について客観的な姿勢を取らなければならないこと。2. 朴クネ大統領が、より女性問題を重視しなければならないという問題点が出ました。これによる慰安婦問題の結論は、日本政府の公式の謝罪と補償そして一貫した態度が必要であり、韓国も慰安婦問題を感情的に対応するのではなく、客観的な姿勢で眺めなければならないということです。

慰安婦問題はお互いの意見がすぐに合意に至ったが、領土問題は長い時間お互いに異なる歴史教育を受けてきたため、簡単に合意に至りませんでした。日本の学生側は、互いに自分の領土だと思っているので、領有権を分けて持つという意見を提示しましたが、昔から韓国の固有領土だと思っていた韓国学生側には簡単に受け入れられない提案でした。いかなる意見も受け入れることが容易でない状況で、独島問題と似たような歴史問題だった任那日本府説が浮かびました。任那日本府説は2010年3月の韓日歴史共同委員会で事実ではなく、言葉そのものを廃棄することで合意した歴史問題です。それでうちのグループでは私たちのレベルで解決できる問題でないと考え、この領土問題をすでに歴史問題を解決した韓日歴史共同委員会に任せるのがいいとする結論を出しました。

歴史問題ではこのような結論を下し、このような歴史問題解決のために学生たちができることは、相手の国について関心を持って積極的にその国の言語と文化を学ぶこと、また、実際、相手の国の人たちと交流する機会を持ってその交流で築いた関係を続けていくことだという結論を下しました。

1.2 私の学び

以前にメディアでこのような問題に対して、日本に対し過激な言葉で対応する姿をたくさん見たので、今回の発表を準備する時はとても心配でした。しかし、お互いに真の平和と解決を求め、いざお互いの意見を提示する時になると、相手を配慮して意見を尊重してくれる姿に対し、メディアだけを見て問題に対して偏見を持っていた私が恥ずかしくなりました。

また、メディアだけを見ると、日本側でも多くの人たちが慰安婦問題を認めずに、独島は絶対私たちの領土だと考えているように思われましたが、今回の発表を準備する時日本の友達の話の聞いてみると、そうではありませんでした。韓国は独島は、「絶対に私たちの領土だ」と思っていますが、日本はそのような問題があることを認識している事実を知ってお互いの熱の差があることを知りました。開会式の時、金榮敏先生と森山先生の講義を聞いたとき、刺激的なメディアだけ見て、それを客観的に考えて見ないでそのまま受け入れた私が多くのミスをしてきたことが分かりました。このようなまちがいを悟って発表を準備する時にはこれらの交流がどんなに重要な交流かを改めて感じました。実際、相手の国の人たちと交流しながら前から持っていた多くの偏見が消え、お互いに真面目に平

和と解決を構築していくことが相手の国の友好発展にとってどれほど重要かを再度感じました。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

日本は消極的であり、韓国は積極的であると感じました。食事のメニューを選ぶとか、発表準備で意見を提示するときにたくさん感じました。悪い意味ではなく、日本は相手に配慮して尊重することで遠回しに話したり、消極的に行動する文化だと思いました。韓国は、相手を戸惑わせないように確実に話して行動することが相手に対する配慮だと考えます。これは間違っているのではなく、異なるということを理解して相手の国と人を理解する観点が広がったということです。私は異なる文化を知って、それを理解することが面白かったです。

2.2 日韓関係に対する学び

今までにメディアを通して日本のよくない姿ばかりを見ていたので、この交流に参加することになったときはこの交流を通じて果たして韓日関係がどれほどよくなるのだろうかと考えました。近くて遠い国と話ができる程お互いに対する認識がよくないという偏見を持っていました。しかし、それは実際に相手に会って交流をすると無駄なことだったと感じました。

今回の交流をして発表を準備しながら、近くて遠く感じた日本との距離が近づいているという希望を持つようになりました。遠く感じられたのは結局、私たちが会う前まで持っていた認識のために作られたもので、お互いに会って交流をすればこのような認識が近づける希望へと変わることを感じました。

発表を準備する時や食べたいこと、したいことなどの希望を言うときに相手の消極的な態度のために困る時もありましたが、そのような消極的な態度が私を配慮して尊重するためにあったのだと思ってありがたかったし、一方では私が積極的に行動したので、相手には負担になったのではないかとすまない気持ちにもなりました。こんなにお互いを理解した瞬間、遠いという認識がなくなり、近づいている感じが生まれて今回の交流を通じて韓日関係について学んだことは近づける希望に変わりました。

3. セミナーについて

今回の交流を通じてお互いの文化の違いを理解する瞬間お互いの関係はさらに近くなれるという希望を感じました。すべての対話を日本語でして日本語の会話の実力もつき、一緒に生活することがお互いの文化を理解するのにとても役に立ちました。何よりも交流を始める前の開会式で2人の先生の講演では、どのような考え方を持って日本を見るか、お互いをどう理解すればいいかについて自分で考えることができて本当に良かったと思いました。

先生方の講演を聞いて交流を始めた時、前からメディアを通じて持っていた偏見を捨ててお互いを眺めることができて、以前よりもっとお互いを理解することができました。ですから始める前に学生たちに国際理解教育や異文化理解教育、市民性教育についての講演や交流をすることが重要だと思います。このような講演を聞いた後、始める交流は、以前とは違う考えと価値観を持って行うので、お互いに対する理解が一層幅広くなり、有意義な交流ができると思います。

これからもこのような交流は、韓日関係の発展にとっても重要な役割をすると思います。

一期一会

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

セミナーに参加することにしてから私たちは週に一回集まってテレビ会議システムを通じて話し合いをしました。5グループに分かれて活動して、私は2グループの一員として活動しました。活動はお茶大の学生たちと一緒にテーマを決めてグループごとに話し合うことから始まりました。私が所属していた2グループは歴史をテーマにして、主に歴史問題に対する両国の態度や慰安婦問題や歴史教科書の歪曲などを扱いました。そして、私たち大学生ができる歴史問題の解決方法を見出すために何が必要なのかを一緒に考えました。テーマを決めてから、発表の準備をするために両国の大学生の歴史認識に関するアンケートを行いその結果をシェアしました。そして、持続的に互いの進行状況を話し合いました。発表以外にセミナーでの出し物の話もしました。全ての準備が終わってよいよセミナーが始まりました。初日の歓迎会を経て開会式、文化体験、伝統衣装体験、一次発表、見学、最終共同発表、合宿、グループ行動、歓送会まで、ぎっしり詰まったスケジュールをこなしました。

1.2 私の学び

セミナーに参加することになってテレビ会議システムで話し合いながらあまり知らなかった韓日歴史をもっと詳しく勉強しました。主に独島の領有権問題と慰安婦問題に関して話し合いましたが、普段両国の間に歴史的な問題があるのは知っていましたが、内容については詳しく知りませんでした。それで、お茶大の学生さんたちと一緒に対話するためには具体的にどんな問題があるのか知る必要性を感じ、インターネットや本など、いろいろな方法で勉強しました。セミナーを準備しながら歴史認識に関するアンケートも行いましたが、その結果を見て両国共現代人は歴史に関心がないことを知ってこんな現状を切なく感じました。そして、文化体験の準備をしながら両国の伝統衣装の用途や名称、着付け方法なども勉強しました。セミナーが始まり、他のグループの発表を聞きながらいろいろなことを学びました。女性の社会進出に関しては韓国と日本の状況がほぼ似ていると思いますが、各国の対策は違いがあることを知りました。また、反日・嫌韓問題に関してはその実態と各国の国民の認識を知ることができました。そして、民間交流に関しては様々な文化の交流が見られましたが文化交流祭りの紹介を聞いて参加してみたいと思うようになりました。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

セミナーでお茶大の学生さんと一緒に合宿して感じた文化の違いは身についた配慮です。もちろん韓国の学生さんたちもそうだと思いますが、昼ごはんのメニューを選ぶ時もいちいち気を使ってくれたり相手のことを考えてくれるのが印象的でした。

言語行動の違いとしては韓国人に比べて他の人の話に相槌を打つことが多くて、日常会話で擬声語や擬態語をよく使う傾向があると思いました。そして、良い悪いの意思表示をやんわりとするとしました。また、考え方の違いとしては何か決定をする時に慎重に考えると思います。ショッピングする時もすごく悩んでいる姿をよく見かけました。それが

ら韓日関係に対しての両国間の違いは温度差だと思います。同じ事件に対して韓国人は感情的になりやすいですが、日本人は関心を持たない場合が多いと思います。従って、韓国人には理性的に考える態度が必要で、日本人にはもっと関心を持つことが必要だと思います。

2.2 日韓関係に対する学び

韓日関係について私はもっと仲良くなれたらいいと思います。なぜなら、嫌韓・反日感情がいまだに解決されず互いに大きな損をしていると思っているからです。普段、韓国人は日本という国に対して好感を持ってないことが多いです。その原因は歴史的な問題または日本政府の態度などがあると思います。また、このような考えが国と国民を含めた感情になり全体的なイメージが悪くなりました。しかし、韓国と日本は東北アジアを代表する国であり、互いに協力せざるを得ない関係です。ですので、嫌韓・反日感情を解決しながら仲良くするのが両国の経済成長に繋がると思います。

3. セミナーについて

セミナーに参加したことは私に本当に良い経験になったと思います。まず、教育的によかったと思います。日本人の学生と韓国人の学生と一緒に合宿しながら日本語を使わなければならない状況だったので日本語科の私にとって会話の勉強をする時間になりました。また、一次発表は相対国の言語で発表したのでお茶大の学生さんたちにも新鮮な経験になったと思います。そして、一緒に生活しながら互いの文化をシェアし今までの偏見を考え直すきっかけになりました。また、いつも日本の国民性が高いと思っていましたが直接に会って話し合いながらやはりそうだと思います。大学に入学して初めての国際交流セミナー参加でしたが、今までのセミナーとは違って学生主導のものだったのでいろいろ準備をしなければならなかったのが大変でした。しかし、その大変ささえ良い勉強になりました。機会があったらまた参加したいです。

反日・嫌韓ではなくて無関心だった？

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

まず、事前学習では、各国で「反日、嫌韓の感情」の実態と原因について調べるためにインタビューを行った。そして、韓国でのセミナー期間中は、インタビューの内容と1次発表の内容を中心に、大学生のレベルで実践可能な解決策について模索した。

1.2 私の学び

韓国側で実施したインタビューを通じて、韓国人が反日感情を持つ対象は、主に日本政府であり、日本人に対しては非常に多くの関心を持っているということを知ることができた。そしてこのことを1次発表で伝えようと努力した。そしてお茶大の3グループの1次発表のインタビュー結果を聞いて最も驚いたのは、日本側は嫌韓感情を抱くより、韓国に無関心な人の方が多いということだった。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

私は実際に日本に数回行ったことがある。旅行で訪れたり、短期交流を行ったりしたこともある。しかし、事前学習や合宿を通し、共に最終発表を準備する形のセミナーは今回が初めてだった。事前学習の期間は、一対一で話すように互いに経過を報告することはあったが、各国でインタビューを行っていたため、一緒に何かをするという意味合いは弱かった。しかし、このセミナーを意義あるものにしたのは、合宿であると考えている。それも韓国人と日本人が同じ部屋で一緒に生活したからこそであるということを強く主張したい。同じ部屋を使わず、発表準備のための時間にだけ会っていたら、最終発表準備は可能だったはずだが、互いの国の習慣や言動、考え方について気付くことは難しかったはずだ。

韓国語には、体でぶつかってみないと分からないという言葉がある。約2週間、一緒に食べ、遊び、寝て、勉強し、直接関わることで、「あ、日本では、このような状況でこのように言わなければならないのか」、「このような状況で、日本人はこういう行動をとるのか」ということを自ら感じることができた。

そして最終日は、時間が経つのが惜しかったため、部屋で夜遅くまでおしゃべりをしたが、普段韓国の友達といろんな話をするように、相手が日本人であることは全く関係なく、一緒に共感して部屋に笑い声が響いていたのがとても幸せだった。お茶の水女子大学の友達を「他の国」の友達ではなく、韓国の友達と同じように「友達」として受け入れるようになった。

2.2 日韓関係に対する学び

日本と韓国は、決して無視できない関係であり、地理的にも隣接しているため、よい友好関係を築けば、東アジアにいい影響を与えられると思う。個人的には日本で旅行や短期交流に行った時に、とても親切な待遇を受けた記憶があるために、日韓関係が冷え込んでいることが残念だった。

しかし、セミナーを通じて国民一人ひとりの感情よりも、国が政治的な部分や国際社会での地位を意識しすぎているために、それが誤解や衝突に繋がっているということが分かった。

た。現在の日韓関係はとても深刻な問題である。しかし、国民の誤解と間違った認識を改善していく努力をしていくことは、長期的に考えると、後に国家間の関係改善に繋がると思う。

そのためにまずは、これから各国を率いていく私たち学生たちが先頭に立って正しい交流姿勢と価値観を持つように努力しなければならない。そのためには、このセミナーがとてもいい例であるため、このような活動が広く社会に広がって欲しいと思う。

3. セミナーについて

教科書ではなく日常生活を通じて実際に使われている日本語を学ぶことができた上、前述したように合宿しながら一緒に過ごしたため、より簡単に、自然に、自国と違う文化について受け入れる姿勢を養うことができた。

10 日間最終発表の準備をする中で、最初はよく理解できない部分もあったが、対話を通じてお互いを理解しようとする中で、それぞれが受けてきた教育と環境も異なるので、同じテーマについて話をしても異なる意見が出ているということが分かった。大きな観点から見ると、各国の国民が見て接する資料が異なるため、国家間の対立が生じてしまう可能性があることが分かった。そのため、今回のセミナーは、継続した対話を通じ、韓日問題を解決するように努力しなければならないということを学ぶことができたいい機会だったと思う。

忘れられないセミナー

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

韓国側と日本側がそれぞれ反日感情と嫌韓感情に対して調査を行い、その原因は何なのか、そして解決策にはどのようなものがあるか討議しました。

1.2 私の学び

一番強く感じたのは、韓国と日本で、お互いの誤解が深いということでした。日本の学生に会うまでは、日本人は皆、韓国人のことを嫌がっていると思っていました。同じく、日本側も韓国人は日本に悪い感情しか持っていないと考えていました。しかし、実際に反日・嫌韓感情を問うアンケートを行い、その結果を分析してみると、意外にも韓国人は日本政府に対しては否定的な立場でしたが、日本人には「やさしい」とか「礼儀正しい」など肯定的な印象を持っていることがわかりました。そして日本人も韓国を盲目的に嫌う極端な人は少なく、ほとんど韓国に無関心だということがわかりました。つまり、両国は私たちが考えたように憎みが深くありませんでした。それで私たちは、何よりもお互いの誤解を解くことが重要で、回りの人に私たちが今回のセミナーを通じて知ったことを知らせて、両国の関係改善のためにがんばろうと約束しました。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

発表の準備をしながら、私たちは日本と韓国の考え方の違いを強く感じました。その中で一番衝撃的だったのは謝罪の表現の違いでした。韓国側は、「なぜ日本は慰安婦問題に対して謝罪するのを避けるのか」という疑問を日本側に問いました。そこで、日本側はむしろ自分たちはもう謝ったのに韓国はそれを無視したと答えました。日本は過去、戦争賠償金として韓国に謝罪を終わらせたと思っていました。しかし、慰安婦の被害者方々は、お金ではなく、日本の真の謝罪を求めています。つまり、日本は「被害者に実際に役に立つ物質的な補償」を一番重要だと考えているのに対し、韓国は「心からの反省の気持」を謝罪だと思っていました。そこで両国の誤解が生まれたと思います。そして、日本は謝罪する時、「残念です」など曖昧な言葉で良く表現しますが、韓国はストレートな「ごめんなさい」の言い方をすることも違いでした。

2.2 日韓関係に対する学び

私たちは日韓関係を改善するためには何よりもお互いの違いを確実に認識するのが重要だと思いました。謝罪の概念や表現方式に違いがあつて、それがわからない以上、両国の和解は難しいのではないかと考えました。いつか日本が韓国の求める真の謝罪をするなら、韓国はそれを無視せず、受け入れる姿勢が必要でしょう。

3. セミナーについて

今回のセミナーは私にとって忘れられない経験です。大学に入って、ある程度日本語の実力が高まったと思いますが、セミナーで日本の学生にあつて話してみたら、まだ未熟な部分が多いと感じました。試験のためではなく、友だちと話すためにもっと必死に日本

語を勉強することができました。

そして、本ではなく、日本の文化や、人のことをもっと理解できるようになりました。たとえば、「日本人は本音と建前があって、日本人の本心を知るのは難しい」と教科書では書いてありましたが、実際に会って話してみたら、彼女たちはすぐ本心話をしてくれました。むしろ固定観念にとらわれていたのは自分で、私が本心で彼女たちに向かい合うと、相手もそれに応じてくれることがわかりました。

また、2で書いた通り、日本と韓国の違いを感じることができる機会でした。重要なことは、違いを認識し、認め、相手を理解しようとする姿勢だと思います。日本と韓国は隣国ですが、まだこんな姿勢が足りないのではないかと考えています。そして私たち大学生も責任をもって日韓関係のため頑張らなければならないはずです。

日本と近づく

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

本セミナーが始まる前は、テレビ会議やラインのチャットルームなどで意見を交わすことができた。私たちは反日・嫌韓の感情に対する一般人の意見を聞くために、両国でアンケート調査を実施した。アンケート調査の結果は両校でそれぞれ分析して発表に反映させた。韓国での8泊9日の日程は、グループ活動が中心となった。会議などを通して、韓国側と日本側の意見を一つにまとめ、共同発表を行った。また、韓国の観光名所を訪問したり、美味しい店をたずねたりするなど、韓国の文化を知る時間も持った。

1.2 私の学び

韓国メディアによって描かれる日本人のイメージには、とても恥知らずで、韓国に敵対的であるというものも含まれていて、私自身もメディアの影響を受けて、そういうふうになっていたのかもしれない。しかし、同じグループのお茶大生の発表を通じて、日本人が持っている嫌韓感情に対して直接体感した時、私の考えが間違っていることを認めなければならなかった。日本人は私が予想したよりも、韓国に無関心だった。韓国人なら、日本との関係で慰安婦と独島を真っ先に思い浮かべると思うが、日本人は、韓国人が深刻に考えている問題についてあまり大きな関心を持っていなかった。しかし、敏感で、妥協点を見つけるのがとても難しい問題であったにもかかわらず、お茶大のみんなは、私たちの言葉を理解して、包容しようと努力した。過去の歴史の問題について、韓国はまともな謝罪を望んでいるだけだという意見を示したときは、「日本が心が狭い」とし、認めている姿も見られた。議論の余地があるのは対話を通じて解決すべきだということを改めて感じた。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

生きてきた環境と学びの違いから来る乖離は非常に大きかった。細かいことから、私たちはみな違っていた。日本人は婉曲的に話す。一緒に生活しながら一番ビックリしたことの一つは、「遠まわしに言う」ことだった。韓国人は何かを「もらってもいい？」とは聞かない。「私にそれ貸してくれ。」と言うだけだ。日本人は礼儀たたく、すべての行動に気をつけ、それだけ壁をなくするのが難しいという感じも受けた。

しかし、その乖離を縮められるのがまさに人対人の交流だと思う。韓国のメディアは、刺激的な内容で韓国人の世論を形成し、すぐに熱くさせている。しかし、人と人の対話はお互いを理解するうえで理性的思考を可能にしてくれる。直接経験して感じてみると、是非を判別できる問題ではないということがすぐわかるようになる。私はこのセミナーを通じて人的交流の重要性を痛感した。

2.2 日韓関係に対する学び

セミナー前は、韓日両国の関係はこれからどうなるのか見当がつかない関係だと思った。韓国は反日感情が大きな国で、私もそんな雰囲気の中で育ってきたからだ。私が今まで受けてきた教育で、日本はいつも友好的でない国だったために、日本語を専攻に選択してからも韓日関係についてあまり深く考えたことはなかった。しかし、セミナーの準備をしながら、

韓日関係に関心を持ち始めた。アンケートと資料調査は日本に対する韓国人の世論を調べるだけでなく、私自身が韓日関係について深く考えてみる契機になった。

そして、本セミナーに参加しながら日本の文化と日本人の考え方を体験してからは、客観的な見方から韓国と日本の関係を考えられるようになった。自国の利害関係を超えて活発な人的交流と相手国の文化に対する理解が後押ししたら、改善の余地は十分あると思う。

3. セミナーについて

外国語教育の面で、同セミナーは非常に素晴らしかった。教科書で見えていた硬い文語体の日本語ではなく、同年齢の女性が使用する言語を接したのはとても新鮮で特別な経験だった。

お茶大生は、韓国の雰囲気と文化を直接体験したためどうか分からないが、同徳女子大生は、日本現地で日本文化を直接体験したわけではないので、日本の文化を理解するにおいてリアリティは多少不足したと思う。しかし、お茶大生の話を彼女たちの言語で聞くことで、日本に対する理解は深まり、成熟したと思う。また、お互い育った環境も、学んだことも全部違うために、一方的に意見を強要してはならないという点を習ったことが最も大きな収穫だった。

お互いの違いを分かって、理解すること

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たちのグループのテーマは反日・嫌韓感情を調べて解決策を見出すことでした。まず、第1次発表では韓国と日本で、別々にアンケートを取って、各自の国民が相手の国をどう認識しているか、分析しました。韓国人の対日感情はどうか、その考えは政治とスポーツなどに、どのような影響を及ぼしているかについて発表しました。両国のアンケートの結果をもとに、みんな一つの部屋に集まって、午前4時まで話し合いました。それまで一緒に生活しながら、お互いを誤解していた部分や、驚いたことを素直に話しました。その上で、反日・嫌韓感情を私たち大学生なりに、乗り越える方法を探しました。発表以外にも、いろんな活動が行われました。パディにハンボクを着てもらったり、パディの浴衣を着させてもらったり、ドラサンと第3トンネルを観光したり、美味しい食べ物を一緒に食べたりしながら、彼女たちに韓国の文化をもっと知ってもらうように頑張りました。

1.2 私の学び

第2次発表の準備をしながら感じたのは、今の韓日関係をよくするために、このようなセミナーが必要だということでした。一緒に生活してこそ、お互いの価値観の違いが分かって理解することが出来るからです。実際に朝、目覚めたときから寝るときまで一緒にいて、私の考えが間違っていたことに気づきました。一つ目は、私が会った人は皆、以前知っていた「日本人」ではなかったということです。建前と本音があると思っていたのに、全然違いました。むしろ、素直でした。自分が思っていたことを話したり、今の感情をまっすぐ受ける部分があったからです。二つ目は歴史や領土問題で、日本人のことを誤解していたことでした。両国は子供の頃の記憶が違い、教育も違い、生きていたほとんどの時間が違います。だから、価値観の違いがあることは、当然なことなのかも知れません。しかし、韓国人は皆、日本人を韓国人として見ていました。韓国の考えで、価値観で、判断したから、お互いの問題が解決できずに、残ってしまいました。私たちのグループはこのセミナーで、素直に話して、意見をぶつけてみて、日本人の立場も、韓国人の立場も分かりました。このように、話してお互いの違いがあると思うことは、すごく大事なことだと思います。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

寮で一緒に生活しながら感じたのは、日本人はお礼の言葉をよく使うことでした。すごく小さなことにでも、「ありがとう」と言うのは、韓国人が日本人に学ばなければならない部分だと思いました。例えば、エレベーターに乗って下りるとき、誰かが開きボタンを押して、みんなが下りることを待っていてくれると、全員忘れずに感謝の言葉を言います。また、部屋に入る前に、ドアを開けて待っている場合、少し走って来て、ありがとうと感謝の言葉を伝えます。感謝の言葉を忘れずに伝えるのは、日本人の言語的な、文化的な習慣だと感じました。「他人に迷惑かけない」という教育を受けて、成長してきたからだと思います。特に最近、韓国で「パワハラ(갑질)」(強い立場の人が立場を利用して弱い立場の人に不利益や不快を与える行為)という言葉が流行して、話題になっているから、小さな

ことにも感謝の心を忘れないことが、どれだけ重要なのか、韓国人が分かっただけいいなと思いました。そんな日本の友達を見ながら、韓国人も少しずつ、そのような習慣を持つようになったらうれしくなると思います。

2.2 日韓関係に対する学び

一人一人が会うことでは、国家間の関係を回復させることはできないと思っていました。どうやって、国が解決できなかった、解けなかった韓日関係を、個人が元に戻すことができるか、疑懼の念をいだいていたからです。だから、テーマが「反日・嫌韓」に決まった時、お互いの敏感な部分は侵さないまま、形式的な議論だけで、そこそこに発表が終わると思っていました。しかし、そう思っていた自分が恥ずかしいほどに、みんな頑張って発表しました。心からお互いの話を聞き、理解するように努力して、知らなかった部分も、理解できるようになって行きました。自国の主張だけして、声を上げるどころか、全く思ってもいなかった相手の考えについて知って行くにつれて、相手の話を聞こうとしなかったことが、どれだけ間違っているのか分かりました。

3. セミナーについて

日本語を専攻としているが、1年生のせいなのか、基本的な日本語会話だけの授業だけでした。今回のセミナーは、日本語の会話の実力を身につけることができる良い機会でした。特に、教科書では、学ぶことができなかった新世代の用語や若い言語を感じて、実際に、会話の中で使うこともできました。彼女たちの言葉で、コミュニケーションしながら、韓国とは異なる文化を受け入れ、理解することもあり、単に断片的な韓日関係にとどまらず、国際の情勢を把握して、現実的な韓日関係についてさらに詳しく見ることができました。セミナーの中で一番良かったのは、初めて会った人同士で、1週間以上の時間を過ごすことでした。特に、私のような場合には、他のグループが韓国人2人に日本人2人のとは違って、日本人の3人に私1人だけ韓国人だったので、初めて会った人と外国人と、一緒に部屋で過ごすのが大きな負担に感じたこともありました。しかし、むしろそのように生活していてよかったと思うことができました。もうちょっと日本語で話すこともできたし、日本について気になっていたことや、普段から聞いてみたかったことも聞くことができた、いい機会だったと思っています。以後、後輩たちに推薦して、絶対に参加しなければならないプログラムだと言いたいです。

国際交流セミナーをして

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たちのグループは韓日間の交流について調べ、その交流の問題は何かを考えたり、その問題点をどうすれば解決できるか考えてみました。そして、私たちのグループはセミナーの前に日本文化院を訪問したり、アンケートを行ったり、ネットでいろいろな韓日の交流について調査をしました。そして、日本の友達と合宿した時には、韓国の友達と日本の友達と一緒に会って、各グループで行ったアンケートを参考にして日本人が韓国について持っているイメージと韓国人が日本について持っているイメージを比較してみました。そして、どうすれば韓日間の交流の問題点を解決できるか、またどうすれば両国が交流を通してよりよい関係を持つことができるかを考えてみました。発表以外には、みんなでソウルの有名などろに行き、韓国の食べ物を食べたり、観光したりしました。

1.2 私の学び

私がまずびっくりしたことは、韓国人が日本について持っているイメージがそんなに悪くなかったということです。韓国と日本は過去の歴史の問題があったため、韓国の大人は日本について悪いイメージを持っている人が多く、私みたいな 20 代とか 30 代の人も同じような意見を持っている人が多いと予想しましたが、そうではありませんでした。若い者は日本の音楽やドラマにすごく関心を持っているし、機会があったら日本に旅行したいと答えた人も多かったです。そして、日本人が韓国について持っているイメージも予想外でした。韓国の新聞とかニュースでは日本についての悪い記事が多く出るから韓国人は日本について悪いイメージを持つようになります。私は日本のマスコミにも韓国についての悪い記事がよく出て日本人が韓国についての悪いイメージを持っているはずだと考えたのに、日本人はそんなに韓国について関心を持っていなかったということが驚くべきことでした。そして、日本人は韓国と日本の悪かった歴史についてよく分からないということも驚くべきことでした。

そして、グループの活動から分かったことは、思っていたより韓国でいろいろな韓日間の行事が行なわれていることです。でも、広報が不足して多くの人達が参加できないという問題があります。もっと活発な交流のためには様々な方法で広報することが必要だと思いました。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

まず事前の遠隔交流から感じた韓日間の文化の違いは、日本人はいつも意見を聞いた後ではありがとうございますということです。韓国人よりあいさつをよくすることがわかりました。そして、合宿するときにも韓日間のいろいろな違いを感じました。小さいことですが、韓国人はほとんど朝に髪を洗うけど、日本人友達は全部夜に髪を洗いました。そして、韓国人は特別な日程がなかったら朝遅くまで寝るけど、日本人友達はみんな朝早く起きました。最初は慣れなかったけど、後では私も日本人の友達みたいに朝早く起きて発表の準備をしたり、平素は食べなかった朝ごはんを食べたりしました。一日を早く始められてよかったです。日本人はまじめだと思いました。そして、発表の準備をする時私達のグ

ループはトッポギを配達してもらって食べましたが、日本には配達文化がなく日本人の友達がみんなびっくりしていました。配達費を払わなくても、寮まで配達してくれるのが本当にすごいと言いました。また、韓国の大学生はほとんど休学して就職の準備をしますが、日本人は留学すること以外には就職の準備のためにあまり休学しないということが分かりました。日本の大学生はほとんどすぐ卒業して就職すると言っていました。日本人と韓国人は似ているけど、小さな違いがあるという事実を知りました。

2.2 日韓関係に対する学び

最近安倍首相のあきれするような発言のせいで韓日関係が悪化しました。このセミナーに参加する前は、日本人全員が安倍首相みたいに日本が韓国にしたことについて全然謝罪したいとは思わず、韓日関係は改善されにくいと思いました。でも、セミナーに参加した後は韓日関係についての私の意見が変わりました。日本では日本が韓国に犯したことについて教えないので、予想以外に日本人の友達はそれについてよく分かっていませんでした。たくさんの日本人の友達がこのセミナーの後で韓日間にそういうことがあるなんて知らなかったと言ってすまなかったと言いました。そして、セミナーの中で森山先生が安倍首相の話をして涙する姿を見て、韓日間の関係改善に希望を見ました。たとえ今安倍首相のせいで関係が悪化しても、私たちからお互いを認めながら継続的な交流を続けるなら今よりはるかに良い関係を持つことができると思いました。

韓国と距離的にも近く、私たちの生活のなかで切り離すことのできない日本。これから良い関係を築いていけると期待しています。

3. セミナーについて

このセミナーに参加して一番良かったことは日本人の友達との合宿です。短い期間だったけど、一緒に生活しながらいろいろなことを習うことができました。日本人の生活スタイルとか習慣を知ることができました。そして、いつも一緒にいるから日本語の実力が向上しました。初めて日本の友達と会った時は日本語がよく聞きとれないし日本語で話すことが難しくてあまり話をしませんでした。でも、2日ぐらい後には日本人のともだちと日本語で話しながら笑う私を発見しました。コミュニケーションがよくできるようになったので、様々な話をすることができてお互いの違いをもっとよくわかるようになりました。

そして、2回の発表と討論を通して韓国と日本をめぐる問題について深く扱いながら互いを理解する機会を持つことができて本当に嬉しかったです。すごく尊い経験でした。また、敏感な問題を扱いながらも喧嘩することなく合意点をさがす姿が印象深かったです。全般的にすべての方面で満足したセミナーでした。

でも、いくつか残念なことがあります。一つはグループで自由時間にほとんどソウル観光しかしなかったということです。グループで自由時間をあげるよりもっと多様な韓国伝統文化体験をする機会があればよかったと思いました。そして、2回目の発表の準備時間が少なかったということです。時間が十分にあったら、さらに多様な話を交わしてもっと良い物を作り出すことができると思いました。

セミナーを通じて学んだ韓日の姿

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私が属した4グループは歓迎会と交流をテーマにセミナーの準備をしました。交流をテーマに、韓日両国で、どのような国・都市間の交流、民間交流が行われているかを調査しました。また、実際に交流プログラムに参加してみるために在韓日本大使館の公報文化院が主催する2015夏の日本の文化紹介展にも参加しました。そして、事前に歓迎会の場所を探したり、日本の学生たちに韓国でやりたいことを聞いたりすることで、その活動を行うために最も適したところがどこなのかを調べました。また、グループ別の出し物のためにダンスを練習しました。

セミナーが始まってからは日本の友達を出迎えたり、一緒に寮で生活をしたり、第2次の発表を準備したり、ソウルの色々な地域を見物しながら、時間を過ごしました。

1.2 私の学び

今回のグループ活動では今までやってみたいことがなかったものをいくつか体験しました。私は公報文化院の行事に参加したことも、他人の前で踊ってみたこともありませんでした。また、日本語科の学生でありながら、韓日関係がどのようなものか、実際に何の交流が行われているのかもよく分かっていませんでした。これらすべてをセミナーで準備して活動していく中で、初めて詳しく学びました。

また、日本の学生たちを案内して質問に答えてみると、私は韓国人でありながら、韓国についてよく知らないことが、まだたくさんあるということが分かりました。日本の友達の質問にもなかなか簡単に答えることができず、セミナーが終わった後は、歓迎会の準備が少し足りなかったのではないかと、もっといい所へ連れて行けたのではないかと思いつても残念でした。他国の人に韓国を知ってもらうためにはまず、私が韓国についてよく知っていなければならないということを実感しました。もしこのような交流の機会がまたできたら、そのときは、事前に韓国に対する勉強を一生懸命頑張りたいと思いました。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

実際に日本の学生たちと直接会って話してみると遠隔交流を通じて話すことの間には大きな差がありました。遠隔のチャットを通じて話すときは、言葉もとても早いし、発音も分かりにくくて対話がうまく通じないという感じがしました。しかし、実際に会った日本の友達との会話はそれとは異なりました。相手がよく聞き取れないと分かれば、何度も簡単な言葉に言い換えながらゆっくり、また説明してくれました。日本人は、他人に対する配慮を重視するというのを、何度か学んだことがありましたが、それを自ら体験することができました。

そして日本人は本音と建前というものがあり、表と裏が違うという話をたくさん聞きましたが、これもまた、一つの偏見だということを感じました。セミナーで会った日本の友達はしたいことがあれば、だいたい素直に言ってくれたので、友達が望むものを探して案内することができました。もちろん、素直に話してくれない部分もあったと思います。特に食べ物を食べる時ですが、セミナーの途中、一緒にトッポッキを食べたことがあります。

その時、日本人の友達は辛くてあんまり食べることもできなかったので心配になりましたが、そう言いながらも「おいしい、おいしい」と言ってくれて、少しは安心しました。

意外だった点は日本の友達が思ったよりスキンシップに違和感を感じなかったことです。日本では同性の友達同士は手をつないだり腕を組んだりすることはあまりないと思っていましたが、先に手を握ったり、腕組みをしたり、抱き合ったりする姿が不思議でした。

2.2 日韓関係に対する学び

韓日関係は最近、最悪の状況にあると思います。安倍首相の談話も、朴大統領の対応も良いとは言えず、お互いにあまり友好的ではありません。韓日間の冷ややかな雰囲気解消することを政府にもう期待することはできないと思います。

それなら、韓日関係をどのように回復しなければならないのか。これに対しての回答は民間交流だと思います。韓日の政府間の仲は良くないですが、今も両国では様々な民間交流が行われています。政府や各都市で開かれる韓日交流お祭り、朝鮮通信使のお祭りなどの様な行事から個人同士の交流まで、数年前から行われる行事は古いだけに、歴史もあり、行事が行われている間は、交流が活発に行われますが、実際は行事が終われば、交流も終わってしまう単発性の交流に過ぎません。そしてこれらの交流は広報もうまくいかず、両国の韓日関係について無関心な人にはあまり効果がありません。

むしろ大きな効果を期待できることは直接体験をすること、あるいは自分の周りの人の話を聞くことだと思います。普段、韓日関係についてよく主張している人がSNSに書き込みを掲載すれば、何も考えずに読み飛ばす場合が多いと思います。しかし、韓日関係に関心がなかった人でも、自分の友達がSNSに韓国(あるいは日本)に行ってきた、韓国で旅行する間の出来事などを載せれば、そのSNSを読みながら、少しでも韓国に対する関心を高めることができます。今はSNS時代なので、韓日関係がさらに良い方向へ進むためには私たちの努力が必要だと思います。

3. セミナーについて

今回の韓日交流セミナーは、日韓両国の政治、社会、文化などを理解できる良い機会だったと思います。日本人はみんなこう考えるはずだという偏見を無くすことができた上に、特に敏感な問題である独島や慰安婦問題などの様々な歴史認識について話すことができた点がとても良かったです。韓国人、日本人という両極端的な思考ではなく、国際社会と一緒に暮らしている市民という認識を積むことができました。

理解すること

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

4 グループは民間交流について調査しました。そのために、私たちはアンケートと民間行事を準備しました。まず、自分の意見を集めて、それでアンケートを作りました。民間行事は各々が探してみても、共有しました。それでパワーポイントを作りました。そうして4 グループは歓迎会を任せられてそれを準備しました。例えば、フェイスブックで食べたいものを調査したり食堂で食べてみたりしました。

1.2 私の学び

私の学びは「責任」です。同徳の方はセミナーに参加しても単位も出ないしセミナーの期間もちょっとたいへんでした。でも、各々皆がなんとか時間を作ってパワーポイントと台本を作りました。その過程で私たちはひとつになってセミナーのために頑張りました。そうして自分の責任を担いました。でも、私は皆と親しくなることができたので大変ではなくて、むしろ楽しくて嬉しかったです。そうして私たちがしたいことをテーマにして責任がそんなに重くありませんでした。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

まず、韓日の文化の違いは日本人の友達に会って話してから分かりました。日本の友達は優しいです。相手の言葉に耳を傾けました。例えば、相手が話す時には「うん」、「そう」と言って聞いてくれました。韓国人はそんなに反応が大きくなくて、話すときにはスマートフォンを見ている場合もけっこうあります。それで優しくて相手の言葉に気を遣うことを感じました。それで私もそんな態度を学びたいと思いました。

そうして日本人友達は皆、朝食にパンを食べました。細やかなことですが、韓国人は朝食にパンを食べるのは健康によくないと思うので、私も皆の健康をちょっと心配しました。韓国には「力は飯から作られる」という言葉があるほど朝食にご飯を食べることが大切です。それで、日本の友達は朝食を軽く食べるのがとても不思議でした。

この他にも日本の友達は質素な感じ、お風呂の大切さ、言語の差（母国語の干渉）、別々の好みを尊重することなど、色々と違いを感じましたが、一番おもしろいと思ったのは排便について全然話さないことでした。韓国人は排便（特に大便）は健康にとって大事だと思うので、私の個人的な意見ですが、皆がもっと共有することも良いと思いました。

2.2 日韓関係に対する学び

政治的なイメージはよくないと思いますが、民間の関係はそんなに悪くないと思いました。他の人の意見は聞いたことはないですが、お茶の水女子大学の皆さんはよくなるために努力する意志は感じられました。私たちがすることは小さいですが、その風は小さくないと思いました。一番大切なことは自分で正しい態度を持って正しい目で相手に対することだと思います。私はその点で日本語科の学生として、かけ橋の役になりたいです。

3. セミナーについて

第一に、外国語教育は同徳の学生にはすごく役に立ちました。とりわけ私も日本の友達とバディーに色々なことを学びました。特に日本語の会話が上手になりました。でもお茶大の学生さんに役に立てたかどうかは分かりません。個人的にはすごく勉強になりました。

第二に、異文化理解教育と国際理解教育で役に立ったと思います。まず、異文化理解教育の面では韓国人と日本人が実際に会って話して、お互いを理解できるようになりました。特に韓国の方は日本語科なので日本に興味もあるし、むしろお互いを理解していく過程が楽しかったです。国際理解教育の面ではもっと時間があれば良かったと思いました。皆がもっと勉強して国際理解の面で話せる時間と計画があったらもっといい結果が出たと思います。

第三に、シティズンシップ教育の面も良かったと思います。セミナーで個人に会って自分の意見を共有するのがシティズンシップの形成に良いと思いました。

新たな縁

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

- 1) テレビ会議を通じてテーマを決めること
- 2) 日本の学生たちに対するセミナーの進行計画の準備
- 3) セミナー以外の自由時間などにおける日本の学生との自由行動の内容決定

1.2 私の学び

最初に、国際交流セミナーに参加する過程でとても悩みました。最も大きな理由は、私の日本語の実力のためでした。日本語について関心がないわけではないですが、学習が難しく、日本語が不得意であるため、この国際交流セミナーの活動において多くの迷惑をかけるのではないかと心配でした。

申請をしてからグループが決まり、発表のための日本の学生に向けた様々な計画を立てる過程において「あ、本当に私がセミナーを準備しているんだ」という考えと共に負担はあるものの、私ができる限りでのテーマ提案など色々なことをしました。私の所属する4グループの場合は、日本観光交流について調査しました。観光交流事業というので、お互いの観光地を調査しなければならないとも考えましたが、韓日交流に重点を置いたことで、結果的にはお互いが調査した部分が合致する部分があり、幸いでした。私のグループは本格的な調査を開始する前に家族、友人、知人 130 人にアンケート調査をしました。どうしてもテーマは観光に向けられるため日本に対する基本的な関心や、日本旅行や日本の観光地などに対するアンケート調査をしました。おおむね肯定的な反応が多く、テーマが題材として難しいという考えも、本格的なテーマの調査において解決をすることができました。

テーマの交流の案は都市間の交流、民間交流と大きく2つに分けて調査しました。まず、都市間の交流は、朝鮮通信使祭り、韓日交流ハンマダンのように韓国と日本の自治体でお互いの交流のために行う行事です。私が調査した韓日交流ハンマダンの場合は、毎年韓国、日本で1年に一度ずつ開かれ、数万人の韓国人と日本人が1つになってつくっていく最大規模の韓日交流行事です。韓日文化交流、市民交流、青少年交流、地方自治体交流など多くの意味を持っており、祭りを通じて韓日間の文化の違いを理解してお互いをもっと尊重する契機になって、どのような悪天候でもいつも進むべき方向を教えてくれる灯台であり、一緒に韓日友好の象徴として成長することを主催側は望んでいます。さらに、この「祭り」が若い世代につながり、未来に向けてさらに大きくなることを期待しているため、多くの韓日青少年たちが参加する事例が多いです。私も高校生のときに参加し、いろいろな日本の文化を見聞きすることができたので今後も韓日関係にとって良い方向に持っていくことができる部分だと思いました。

次に民間交流といった場合は、都市間ではない民間個人の交流を見られる部分で大学生が大幅に接することができる部分は、韓日交流サークルや韓日関係の増進のためのコンテンツまで広い分野がみられました。韓日交流のクラブのような場合にはセミナーと似たように日本の人々に実際に会って、お互いの国に訪問するなど、交流に対する真面目な話にとらわれず、本当に些細なことからお互いの文化の話などを通して交流をしていました。また、日韓関係の増進のためのコンテンツ部分でも、日本の漫画の原作が、韓国でミュージカルやリメイクドラマになって興行をする部分もあるため、私が感じた民間交流は、韓日

友好関係という大きな目標を1つだけを置いて些細なことからたわいない話を始めるということをととも感じました。

このように調査をしていると、思っていたより韓日関係に向けた、いろいろな行事や活動がたくさんあり、私たちのセミナーも韓日関係に向けた1つの案になっているんだということをとたくさん感じました。私の4グループのような場合は第2次発表のセミナーを準備して、韓国ができる交流案には、どんなものがあるか考え、私達の間を維持するためにフェイスブックページを作りました。今日のSNSは直接会って話をするのが容易でない国際交流において最も大きな役割をすると考えたからです。現在4グループの学生たちがみんな管理者であるため、互いの話ができますし、韓日関係のためのイベントが開催される度に、書き込みを掲載しています。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

最初、日本の学生とテレビ会議をすることから始めて8泊9日という決して短くない時間の間、一緒に暮らすという話を聞いた時、私は日本語で話をするのがなかなかできないのではないかと胸がドキドキしました。お互いに言語の違いだけでなく、習慣や行動のような部分で違いがたくさん出るだろうと考えたからです。そしてセミナーが開始され、実際に会って話をする度に日本と韓国は距離的にも近く似たような点が多いですが、それでも明確に他の国というのが実感できました。

まず、日本は気候的に夏に湿度が高く、暑いので人々が夏に日焼け止めクリームや汗拭きシートなどを必須で持っていますが、韓国は日本より湿度がそれほど高くないため、夏用のものがそんなに発展していませんでした。今回のセミナーも8月で、韓国では一番暑い天候であったため、このような部分で韓国人学生たち、日本人学生の違いを見ることができました。

二番目に、話す言語行動でも韓国人学生たちはお互い話をする時なら、直接的に率直に言う学生たちが多い一方で、日本人学生は、韓国の生徒たちが話をしたのを聞いて、日本ではそんなに直接的に述べないと教えてくれました。お互いに礼儀を守ろうとする日本の建前、話し方でのマナーまでも差があるんだと感じました。

言語的な部分でこんなに差がある一方で、似た点としては、日本も新造語、略語が韓国のように、ある程度はあるという点でした。セミナー期間中、自由行動をするため、移動をして韓国の「ボカチュン」のような略語について話が出て、日本もそんなことがあるのか、流行する言語があるか訊いてみたところ、日本では女子高生たちをJKと呼ぶと教えてくれました。女子のJ、高校生のKを取ってJKになるということを聞いて韓国語ではない外国語にもこのような略語が確かに存在するということが不思議で驚きました。

また、日本の学生たちは韓国の政治的な部分でも関心を持っていました。韓日関係において歴史的な部分で大きな影響を占めているのが政治的な問題であるとお互いに考えました。第2次の発表を準備しながらお互いの現政府に対してどう考えているかも聞いて、私たちはどのように進めていけばいいか話をしながら、今後私たちが親しく過ごすことができたならいつかは、韓日関係も友好的な関係を維持することができるのではないかと考え、フェイスブックページと一緒に運営するという結論が出ました。

2.2 日韓関係に対する学び

韓日関係は今後も我々が解決していかなければならない課題の1つだと思います。日本、そして日本語について学んでいる韓国の1人の学生として韓日関係がよくなって欲しいという思いは大きいです。歴史的な問題の観点から見れば、互いの立場を尊重をしなければ

ならないと考えます。日本人の学生も韓国人の学生も幼ない頃から今まで、歴史問題について学んできた方向が違うと考えるためです。日本人の学生も韓国人の学生と同じ位韓国の政治的な部分に対して関心を持っており、第2次発表の準備をしながらお互いの現政府に対してどう考えているかも話し合いをし、私たちが今後どのように韓日交流を進めていけば良いか議論を重ねていきました。その中で、セミナーが終わった後も私たち自身が交流を継続し、この関係を継続していくことができれば、韓日間の友好的な関係を維持することに少なからず影響を与えようと考え、フェイスブックページと一緒に運営するという結論が出たわけです。このように少数のグループでも努力をすればいつかは、多数の人々を巻き込むことができるはずで、今後の韓日関係の展望は明るいものになっていくと考えます。

3. セミナーについて

お茶の水女子大学の学生たちと一緒に過ごした国際交流セミナーで総合的に感じた部分を述べるとすれば、すべての部分において役に立っており、今後も継続されなければならないセミナーだと思います。特に異文化理解教育において、セミナーの本活動ではなく、自由時間にご飯を食べたり、どこに行こうと移動する時もお互いの文化的な違いを知ることにつながったと思います。あまりにも些細な部分なので考えていない部分も1つの違いと感ずることができるきっかけになる活動であったからです。

外国語教育の部分ではセミナーをする過程で、外国語を学ぶきっかけが他にない、日本語ができない学生にとっては、初めはちょっと難しいのではないかと考えていましたが、ある程度日本語を学習した学生なら、日本の学生たちと話をしながら基本的な日本語会話をすることも可能であり、日本語を学ぶことにおいて難しい部分であることも聞けるため、役に立つ話をすることができます。異文化理解教育や国際的理解教育の部分においては、上記で述べたように、セミナーという名前で行う活動であるため、韓日関係を改善するという部分において確かに役立ちますし、総合的にもよい行事だと考えます。翌年度にも参加したいくらいに良い思い出、いい友達に会う機会となりました。

交流から学んだこと

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たちは、日本と韓国の間で行われている様々な交流について事前に調べて発表しました。グループワークではそれらの交流が行われているにも関わらず、だんだん韓日関係が悪化していく理由は何か、また、それを改善するために国や私たちができることは何だろうかと考え、話し合いました。広報が足りないからなのではないかという案から両国で行われる交流行事を紹介するFacebook ページも作りました。そしてそれらをパワーポイントでまとめ、第2次発表を行いました。

1.2 私の学び

今回のセミナーから私はお互いの国をもっと理解するためには、まず私たちから声を出すことが何よりも肝心だと学びました。事前調査を行ったとき、初めて知った行事が多かったことからこういった行事の広報が足りないということに気が付きました。かなり多くの人が知っている有名人が参加する行事でさえもちゃんと広報されていない、それが互いの文化を理解することに支障をきたしていると思いました。そしてグループの皆と話し合ってからSNSなどでこういった行事を紹介することは最初こそ個人の一言かも知れませんが、広がって行くにつれてもっと多くの人々に知らせることができるという案が出ました。まず私たちから声を出して韓日交流を知らせると、それはバタフライ効果のようにだんだん多くの人に伝わることを学ぶことができました。

お茶の水女子大学の皆と話し合いながら学んだこともあります。それは話し合っただけでは始まらないということです。今回のセミナーの準備で私たちは互いが相手の国をどう考えているか、どう学んでいたかなど、普段話す機会の少ない話題で話し合いました。その会話で得られたもの、それは、自分の誤解だった部分に気が付き、日本という隣国を見る視界が広がったということです。そこで私は敏感な問題と避けているままでは何も改善されることなく、ただ関係を悪化させるだけだと気が付きました。話し合っただけで自分の間違っていたところ、相手の間違っていたところを訂正することから改善は始まるのだと学びました。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

韓国人は準備とか仕事が上手く進まない時に、「何とかなる」または、「締切が近づいて来ると、できるはず」というように考えることが多いです。個人だけでなく、グループでの活動でも特に思い浮かぶことが無い場合「もっと考えてからでもいい」のような考え方をよく見ることができます。でも今回のセミナーでお茶の水女子大学の皆と一緒に発表準備をしながら、日本人は少なくともグループワークでは「後にしよう」ということが無いと感じました。思い浮かばなかったら調べたり、聞いたりして何とか案を絞りだそうとする、それが韓国と日本の違いだと感じました。

そして、服を着るスタイルや化粧法も違うと感じました。韓国ではだいたい体の線を強調することができる服が流行ります。ぴったり合う袖無の服や、短い半ズボンなどを主に着ます。そして皆流行っている服を着ているため、歩いていると同じ服を着た人をよく見

かけることができます。それに対して日本の人は、少し少女めいた服や、大人しい服を好むように見えました。化粧に置いても、韓国では自然で化粧をしていないかのように見せるやり方をよくしますが、日本では頬を紅くする化粧が多いように感じました。

2.2 日韓関係に対する学び

お茶の水女子大学の皆と歴史に関して話したことがありました。私は「本当に日本では韓国を支配したという過去を学ばないのか」と聞きました。日本人が韓国に対して行ってきたことを認めないのはそれに関して学んでいないからと聞いた覚えがあるからです。でもそれは私の誤解でした。まず、韓国人は皆日本が昔韓国を無断で支配し、悪行を繰り返したと学んでいます。そのゆえ、韓国人にとって日本は何度謝っても許すことなどできない国になりました。一方、日本では、昔日本が韓国を支配した際の詳細についてあまり教えていません。詳しい過去は高校でしか教えないし、その授業も選択科目であるため、高校でその授業を選択して学ばないと、歴史に関して詳しく知ることができなくなるのです。それに最近では政府がその過去を美化しています。それで日本の人はそういう過去について詳しく知らない人も多いです。片方は相手が昔過ちを犯したと学び、それを認めようとし、もう片方はやっつけてすらいないと学んできたというのに自分の国を悪くばかり言う相手を憎む。それが韓国と日本の関係を悪化している、と考えました。それと共にこの状況を乗り越えるためにはどうすればいいのかについて考えてみるいい機会になりました。未だ思い浮かぶいいアイディアはありません。でもこれからもそれについて考えてみるつもりです。

3. セミナーについて

今回のセミナーを通して、私はいろいろな体験をし、いろいろなことを学ぶことができました。まず、学校の授業以外で使われる日本語と違う、現在の日本の若者が使う日本語をたくさん知ることができました。日本では今何が流行っているのか、どんな流行り言葉があるのか、そしてそのきっかけはどんなものかに対して話して日本という国をもっと理解することもできました。発表の準備は、国際社会の一員である私たちができることは何かについて考えることができるいい機会でした。私たちは国際社会の一員として、自国の立場から互いの関係を見るのではなく、相手を理解しながら両国を見る必要があるということを学ぶことができました。何故なら、自分の立場だけを重視し相手を理解しようとし、しない姿勢からは真の交流は果たせないと思ったからです。このセミナーで私はもっとたくさんの日本語を学び、日本の若者の文化を学び、そして国際社会の一員である私たちはシティズンシップを持って韓日関係を見るべきだってことも学ぶことができました。今後もこのように韓日関係を客観的に見て、関係改善のためどうすべきか等に関して考えられる行事があったら参加したいと思いました。

日韓セミナーの学び

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

5 グループは、日韓 50 周年の共同声明をテーマとして発表することになりました。慣れないテーマだったので、最初に少し戸惑いましたが、結果的にとても良い経験をしたと思います。テーマに対し、まず各大統領の談話と声明を調べる必要がありました。日韓の国交回復以降、各国では無数の努力を傾けてきました。今までよく知らなかった部分でした。日韓関係において一番に思い出されたのは文化という語でしたが、交流において政治的な面も見逃してはいけないと考えるようになりました。発表以外の文化交流体験では韓国的な面を日本側の学生たちに経験できるようにしてあげたくて、伝統家屋を探訪したり、韓国固有の食べ物を食べに行ったりしました。そんな時間を過ごしながら、互いに近づくことを感じてとても貴重な時間だったと思います。

1.2 私の学び

私は今回のセミナーに参加するのは二回目でした。初めてとは違い、今回は、韓国側の学生たちが日本学生たちを歓迎する形ですべてのプランを立てなければなりません。5 グループは共同声明と送別会を担当しました。最初の心配とは違ってメンバーたちの努力と思いやりで成功裏に終わらせることができました。各自の引き受けたことに最善を尽くしているメンバーを見て良い刺激を受けて、私も引き受けた仕事に最善をつくすことができました。セミナーを過ごしながらすごく仲もよくなり、今も良い先輩後輩として残っています。学校で、あまり作ることができなかった関係を持つことができてとても嬉しいです。送別会の準備は皆が力を合わせて準備できたからさらに意味深い時間になったようです。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

セミナーを通じて日本の友達の積極性について驚きました。最初は日本人たちがもっと消極的で自分の意見を表さないと思いましたが、いざセミナーが始まると、日本の友達の積極的な態度が目立ちました。発表会時間にみんなが他のグループの発表に集中してメモをとったりすることに驚きました。質疑応答の時間にはもっと詳しく知りたいところを質問したり、発表に対する考えを話したりしました。これを見習って、韓国側の学生たちもより授業時間に積極的な態度をみせるべきだと思います。

2.2 日韓関係に対する学び

今回のセミナーは、日韓関係についての私の考えと態度を大きく変化させました。いまだに解決しなかった多くの歴史的な問題によって心のどこかには日本に対する敵対意識が残っていました。しかし、共同声明という発表を準備しながら気付いたことがたくさんあります。話を交わした日本人の友達は私たちがよくテレビで見ていた政治家たちとは違いました。彼らの過去について、心を痛めながら心から謝罪を伝える姿はすごく感動的でした。特に、靖国神社が持つ参拝の意味とかは、悪い部分だけ受けようとした自分がむしろ恥ずかしくなりました。もっと広い心で彼らに先に手を差し伸べることのできる勇気を持

たなければならないと思います。

3. セミナーについて

多方面で色々な経験をしました。今までこんなに外国人の友達と直接的に交流することが多くなかったためにもっと意味深い場だったと思います。まず、言語を専攻とする学生として、実際に話を交わしていく時間を通じて、たくさんの自信と勇気が得られました。言語の壁を越えて、お互いの距離感が短くなる時間を通じて、私がなぜこれまで何のために勉強してきたか気付きました。歴史や政治的な部分でもお互いに誤解を解き、近づこうとする努力を通じて心が暖かくなってくる感じがしました。今回が二回目のセミナー参加でしたが、回を重ねるにつれてセミナーがさらに発展していくのを感じます。2年前よりももっとも記憶に残る時間になったようです。お互いに他の国で生まれて、違うことばを話して、別の生活環境で育ってきた友達が作り出した10日間の思い出はこれからも記憶に残る大事な宝物です。

セミナー

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私たちが選択したテーマは、共同声明であった。これは、私たちに不慣れのテーマだったので、これは何をするものであり、どのような目的を持っていたのか、今までどのようなことが発表されたかなどのいろいろなことを調査する必要があった。共同声明は、それぞれの国で国の代表がその時代に合わせて発表するので、私たちのグループは日本と韓国のような共同声明について調査して、SNSを介して調査した内容を共有した。

1.2 私の学び

事前学習では、日韓関係について学んだ。朴正熙大統領の時から現在までの日韓関係がどのように変化し、その中間にどのような出来事があったのかを知った。日韓関係はあまり良くなかったが、お互いに多くの影響を与えたので、緊密な関係だった。なぜ日韓関係がこのようにされており、韓国の認識に悪いイメージが継続して植えつけられてきたかについてよく知ることができたし、韓日両方大統領と首相がどのように態度をとって行動するかに応じて関係が変化するということが分かった。それぞれの事情があるようだ。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

日本の学生と10日間一緒に過ごしながらか、いろいろな話をたくさんした。セミナーのテーマについての話もたくさんしたし、そのほかに、日常的な話もたくさんした。日本についての一般的なイメージ、例えば、個人主義的であることや本音と建前といった話をたくさん話しながら過ごしてみると、韓国人と似ていると感じました。もとより、彼らがより配慮し、理解してくれたので、大丈夫だったのかもしれませんが、私が感じたのは、彼らはただ言語と住む場所が違うだけだということだった。意外に、非常に些細な部分で違いを感じた。それは、韓国の女の子の場合には、ある程度親しくなったら汚い話をよく話すのに日本人は、イメージが悪くなるのではないということである。そして、日本の恋愛スタイルも韓国とは違っていた。一方、時には利己的であると思われる行動をしたが、その時、「そうかもしれない」と言いながら通り過ぎた。そのような人もいるし、そうでない人もいますので、違いを認めた場合は、人の間にあるわずかな違いは理解することができるのだと考えた。私はまた、日本の学生たちと過ごしながらか、様々な些細な違いは、そのように克服していった。

2.2 日韓関係に対する学び

韓日関係は良いとは言えない。それで、韓日関係については、残念だと思う。しかし、韓日関係は、国家間の関係と国民の関係は少し違うと思う。韓日関係は良くないが、それはあくまで国家間の関係を意味するもので、一般的な市民たちは、関係が良いとか、悪いとか一談に決められないと思う。もとより、日本について直接的な経験を持ってない人たちは国家の態度や国家間の関係、そして、今まで学んできた歴史から、日本に対し悪い感情を持つことになる。しかし、今回のように韓日国際交流セミナーなどのプログラムを通し、日本人と直接な関係を結んでみると、今まで思っていた日本に対する考えを大きく変

えることができる。国家間の関係は、私たちでは変えることは難しい。しかし、国民同士はより良い関係を作ることができると思う。

3. セミナーについて

外国語教育として、今回のセミナーは、文法能力や会話能力などの日本語能力には大きく影響を及ぼさなかったと思う。しかし、外国人と外国語で会話することの恐怖をなくし、話すことの楽しさを感じさせてくれたと思う。このような経験は韓国では簡単に得られない経験であるため、学生に良い影響を及ぼすと考えた。また、国際理解教育の面でも、セミナーの発表を通じて韓日関係について学ぶ機会になり、各国の学生との話を通して、その国の人たちの考えを知る機会になった。異文化理解教育については、今回のセミナーは、多くの影響を与えた。一部の例外を除き、ほとんどの学生は、韓国でずっと生きてきた。私も今まで韓国でずっと生きてきて、外国人とそうのように過ごす機会がなかった。それで、今回の機会のおかげで、些細な異文化の違いを発見し、理解できた。しかし、市民性教育としての効果を見るにはセミナーが少し短いのではないかと思う。10 日間、毎日会っていたとはいえ、初めて会ってお互いに慣れ、楽になるまでの期間を除けば、私たちがお互いに完全な私の姿を見せた時間は少なかったと思う。したがって、その中にある、お互いの本質を把握するには短い時間だったと思う。

交流と学びの場の第 10 回韓日セミナー

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

セミナーの前には韓国のグループの中で、主題について「どの部分をどのように書こうか」を議論して調査した。そして、1 次発表のため PPT を作ったり、原稿を直したりして韓国の学生同士のセミナーの準備をした。また、グループの韓国の学生が受け持ったセミナーの歓迎会、歓送会を楽しく準備した。お茶の水女子大の学生たちに会った後には、対話をし、一緒に韓国のあちこちを訪ねつつ心の交流と文化交流をした。何よりも最後の合同発表の準備過程に熱心だった。各自の考えを交換してお互いの考えを合わせながら意味のあるまとめを作り上げた。お互いに作成した部分を検討し、一緒に修正して真の韓日大学生の戦後 70 年談話文を発表した。

1.2 私の学び

日本の学生たちと今まで問題となってきた歴史、慰安婦、独島などの問題についての話を通じてお互いに対する率直な考えを聞くことができた。韓日関係の悪化の原因について直接に本気の話ができる機会がなかった以前は、ただマスコミによる日本人の考えを聞くだけだった。しかし、私と同じ年の日本の大学生の話を直接に聞くと、「なぜ韓日関係はこれほど悪くなければならないのか」と思われ残念でならなかった。お互いに持ったいろいろな疑問（韓国人はいつまで謝りを要求するのか、靖国神社参拝など）を説明して理解しようとする過程で今まで知らなかったことに気づいた。私たちが持っていたのと同じお互いに対する関心と関係回復の努力があれば十分に韓日関係がよくなる可能性があるような気がした。また 1 次発表を準備しながら、今まで知らなかった韓日関係の歴史や問題の原因などについて、韓国人として、また学生として初めて向き合った。これらは学校でも詳しく学ばないので今回の機会は生きている歴史学習の場でもあった。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

以前には「日本人は小さな事でも大きく気にする」と考えた。でも、会って一緒に生活すると、特別に「日本人はこうだ」というところはなかった。興味深く感じることも似ており、韓国人よりもっと活発で積極的な面もあった。食べ物好みの味に差はあるが、おおよそ大きな問題もなくよく食べていたようだった。いくつか韓国人と違う点を感じたことを挙げるとすればまず連絡に関することだった。これは話を通じて知ったのだが、友だちや恋人の間で韓国人のように様々な日常の話をたくさんしないということだ。韓国人の多くが自分のことを絶えず人々と文字メッセージやメッセージングで共有して話しをするが、日本人たちは主に用がある時に連絡し、それでさえ電話を多く使うということだ。そして、「ありがとう」とよく言うのも違う点だった。友達の間でもとても小さなことにもありがとうという挨拶をよくする。特にエレベーターで他の人が降りるまで待つずっと開ボタンを押してくれることに対して、韓国ではただ通り過ぎるだけだが、友だちにいつもありがとうという姿に驚いた。

2.2 日韓関係に対する学び

韓日関係が良くない時点で日本人と韓国人がお互いに対して 100% 良い感情を持つことが難しいということはわかっている。しかし、セミナーの間には、韓日関係が良くないという思いがしないほど、互いが国家関係を越えていい友達になろうという雰囲気しかなかった。言語が異なること以外は差がないという気がするほど同じ時を同じ気持ちで送った。その土台になる「理解する姿勢」と「共感する姿勢」が韓日大学生たちのいい関係を維持するのに貢献したと思う。韓日関係の改善に向けて韓日の学生たちが特別努力をしたわけではないが、偏見もなく相手を受け止め、国家的問題も開かれた姿勢で向き合うということから良い関係の第一歩が作られると感じた。

3. セミナーについて

セミナーに参加することにより、少し日本語で話すことに対する自信が持てた。母語話者ではないので日本語が未熟なのは当然だが、日本語が専攻であるため日本語が上手ではないことに対する恥ずかしさがセミナーの初めにあった。しかし、話し終わるまで、じっと待っていてくれて親切に教えてくれる日本の学生たちのおかげでその考え方はすぐ消え、違っても自信を持って私の考えを話すことができた。また、逆に、韓国語を知りたい日本人の友達らに喜んで教えてあげた。セミナーが生きている外国語学習の場になっており、本では得難い、本当の日本語も習うことができる時間だった。セミナーのプログラムを通じて初めて浴衣を着て浴衣の魅力を感じた。日本の学生たちが話してくれた日本の文化や生活は非常に興味深かった。これは日本で直接に生活して体験してみたいという考えを持つ契機になった。他の文化に対する関心と理解を自ら感じることができる良い機会だった。伝統服を着ることのほかに、異文化を共有できるプログラムがもう少し多かったらいいなという気がした。

セミナーの前には日本の学生たちとこれほど仲良くなれるとは思っていなかった。しかし、1次発表の時から、誰が先にするということなく、互いに応援してくれてほめてくれる姿には心が温かくなった。特に、歓送会が終わり嬉しくも残念な気持ちで、みんなで肩を組んでカラオケで一緒に歌った曲を再び合唱したときは本当に感慨深かった。10日間、思った以上に成果のある交流をしたんだなという思いと同時に開かれた心さえあれば国籍は関係なく、誰でも十分に気持ちを分かち合うことができるということを自ら感じたセミナーだった。毎時間をすべての学生が意味のある時を過ごしたいと思い、頑張って一緒に良い時間を作っていこうという思いを分かち合えた、意味のあるセミナーだった。セミナーを通じて学んだ事実や考えとともに、瞬間瞬間に、感じた大切な感情と思い出たちは忘れたくないものだ。

心の交流を感じる

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

セミナー前、私たち5班は、戦後70周年の記念として、韓日共同声明をテーマに現在までの韓日関係を簡単に整理して韓国側の共同声明を作成した。韓日の間に残された問題の解決と両国が協力的な関係を構築するための話し合いをした。第1次発表を経て、私たちはお互いに知りたいこと、問題解決に向けた私たちの態度に対して、長い時間討論した。これを通じて私たちは謝罪の意味を再確認し、両国に対する誤解と偏見を解消して、肯定的な発展関係の意志の元話し合いを重ねた。その他にも、坡州の統一展望台を見学したり、景福宮や北村韓屋村見物した。

1.2 私の学び

一週間の交流の間、知的にも、経験的にも多くのことを学んだ。第1次の発表を準備しながら、各大統領の在職中に何が問題になったか、またどのような対応をとったかなど、関係史と流れを把握することができた。過去だけでなく、現在の韓日関係の流れも前より比較的正確に知ることができた。言語的な側面からも学ぶことが多かった。会話の授業を聞いているが、授業では知ることのできない流行の言葉なども知ることができた。似たような年の友達との会話も面白かった。また、韓服と浴衣をお互いに着てみる活動を通じて各国の伝統衣装について学ぶことができた。バディの友達がひな祭りについて話してくれたのが記憶に残る。ひな人形を遅く片付けたら結婚が遅れるという俗説のため、母と父の意見が対立したと言っていた。日本語や文化についてもっと学ぶことができた時間だった。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

寮で一緒に生活しながら文化の違いより同質感が感じられた。お茶の水女子大学の友達は親切で配慮が深かった。公式日程のほかに、ソウルのいろいろな所に行ったが暑い天気にもかかわらず、疲れた気配もなく、連れ添ってくれた。おいしい食べ物を食べる時や化粧や理想型に対して話をする時、国籍を離れて私たちは心が通じ合う紛れもない女子大生だった。韓日関係について最も大きな違いを感じたことは謝罪の意味だった。私たちは互いに知りたい点について聞いて答える時間を持ち、お茶大の学生はどの程度の謝罪を意味するのか知りたいと言い、私たちは彼女らに対して謝罪と行動が一致しないことが納得できない理由だと答えた。また、代表の主張が国民全体の主張を代表するのではなく、多くの国民が心を開いているということが分かるようになった。

国交正常化を結んで50周年、これまで多くの交流があったが、韓日関係は依然として冷却されたまま対立している状況だ。また、様々な問題について「各国は解決しなければならない」と明確に結論が出たわけではない。ただし、大学生たちにできる方法を探してこれを実践して拡大していけば、両国の友好的な交流に少しでもプラスになれるんじゃないかと考えるようになった。両国民が肯定的な感情を持ってお互いを見ることができるとを期待したい。

2.2 日韓関係に対する学び

発表準備をしながら、韓日関係にある未解決の事柄について韓日間の考えの違いについて分かるようになった。セミナーに参加する前に対立的だと思っていた韓日関係を友達と一緒に共同声明を作りながら友好的かつ相互発展的な関係に進むことができるだろうと思った。

多くの話を交わしたが、その一方にのみ偏って考えていなかったらどうかと反省することもあった。刺激的なメディアの報道だけを信じて戦うという関係より過ちを認め合ってお互いに合致した行動をとり、これを基に信頼を築いていける関係になってほしい。お互いを理解する過程には多くの時間と努力が必要だが、小さな努力が重なれば、いい友達になれると信じている。

3. セミナーについて

私は今回の韓日交流セミナーを通じて多くのことが得られた。一週間を日本人の友達と一緒に生活しつつ、多様な単語を学ぶことができた。日本人の友達は日本語が下手な私を理解してくれ、対話がうまくいくように支えてくれた。セミナーのお陰で日本語に対する関心と情熱がさらに高まった。

また、他文化に対する理解と尊重とは何なのか分かった時間だった。お茶大の友達は配慮心がとても深かった。対外的に知られている日本人の姿のように本心を隠して心をよく表現しないのではと思っていたが、全然そうではなかった。それで楽しく過ごすことができた。

交流に参加した学生の中には、台湾人の友達もいた。台湾と韓国は交流が少なく、韓国に対するイメージは良くはないと言っていた。しかし、セミナーに参加したり、思い出を作りながら、次第に、韓国について肯定的な考えをするようになったと言ってくれた。たとえ小さな力でも、今後こうしたセミナーが、国家間の疎通と交流の場になって大きな役割をしたらいいと思った。長いと思っていた一週間は本当に短く感じた。習うことも多かったが、それほど心残りも残っている。日本語がもっと上手だったら、私が言いたいことをより正確に伝えることができたかもしれないという残念さが一番大きかった。果たして本当に友達になれるのだろうかという気がしたが、日本の友達は、古い友達に会っているように身近で、活発だった。セミナーを通じてよい経験を楽しむことができ、あらゆる活動が記憶に残る大事な思い出になった。今後このような交流プログラムが活発化し、関係の改善にプラスになったら良いと思う。

国境を越えて

1. グループ活動報告と学び

1.1 活動内容

私は5グループに所属し、戦後70周年を迎えた韓日談話を準備しました。談話は、歴史、政治、文化、経済などにわたる韓日間の複合的な問題を論じるものでした。従って、事前学習の時、多くの準備が必要でした。そこで、私たちは韓国政府が始まった李承晩政府から現在の朴槿恵政府に至るまでの韓日関係を整理し、その間、解決されていない問題らを今回の70周年の談話で取り上げることにしました。そして、その調べたことを土台に韓国の学生の立場で、談話を作成しました。韓日が協力していくためには「過去史」に対する正しい認識が必要だという内容が主でした。そしてセミナーに参加して第1次の発表の中で、日本の学生たちの談話を聞きました。そして第2次の発表前までお互いの第1次談話の内容をもとに質疑応答をやり取りしました。ここで、韓日関係に対する両国の学生の認識の差、第2次の共同声明で扱う争点を確かめることができました。これをもとに作成された第2次共同声明では、国民間の交流をもとに、友好的な感情を積み重ねていくことが必要であり、何よりもお互いが理解しようとする態度が必要であることを強調しました。

1.2 私の学び

私は今回のセミナーを通じて、一方的な偏見から脱し、もっと広い視野で韓日関係を見つめることができました。今回のセミナーはメディアと各国の首脳の否定的な言動によってなかなか向い合うことができなかった日本の学生たちの韓国に対する率直な認識を聞くことができたよい機会でした。韓国と日本は辛い過去を持っているため、お互いの国家に対する否定的な認識を全部捨てるということは簡単ではないでしょう。特に国家の経済事情が苦しくなればなるほど、ナショナリズムを刺激する首脳らの言動が続いて、各国の政策と文化を事実以上に悲観的に見る記事が報道されたりもしました。したがって、第1次の発表を準備する前に、私たち韓国の学生は心配をしていました。もし日本の学生たちも韓国を否定的に見ていたらどうでしょうか……。しかし、予想外に、日本の学生たちの第1次発表には、韓国に対する深い配慮がなされていました。慰安婦問題をはじめ、過去史において謝罪の意味を明確にして、対話と協力のため、先手をうってくださいました。このような友好的な雰囲気の中で、ともに第2次談話を準備しながら「謝罪」、歴史教科書問題、独島問題などについて話し、お互いの認識の差を認めて、これを縮めるための対話を行うことができました。セミナーを通じて、国家の首脳と一部の嫌韓団体の発言が国民全体を代表するものではないという事実を知ることができました。また、客観的な目で、報道された事実を確認しようとする努力が必要だということも学びました。

2. 日韓の文化の違い・日韓関係に対する学び

2.1 日韓の文化の違いと学び

教育をはじめ、環境の違いが認識の違いを作ったことを確認することができました。まず、多くの韓国の国民は「独島はわが領土」と主張する一方、日本国民は、独島を「紛争中の土地」と認識していました。この背景には、各国の歴史教育の差がありました。お互いが歴史教育を通じて学んできた内容を交わしながら、領土に対する認識の違いがどうしても存在してしまうことを理解しました。

また、「謝罪」に対する意見の差も狭めることができました。ここで私たちは、日本政府の韓国に対する「謝罪」が声明にとどまらず、持続的な政策につながってほしいという韓国側の意見を伝えることができました。領土問題など、国益と関わる問題に対する認識の違いは、争いの種になりかねないし、感情的反応を引き出すこともあります。しかし、各国の教育がある程度のナショナリズムを伴っていることを認めて、環境の違いを受け入れることで認識の違いを縮めることができることを確信することができました。

2.2 日韓関係に対する学び

私は談話の準備のため、「テーマと争点で読む 20 世紀韓日関係史」、という本を読みました。ここでは韓日条約を締結した当時、日本の韓国強制占領が違法かどうかに対する両国の認識の違いが縮まらなかったのが、現在の韓日対立の出発点だと書いてありました。これは後に請求権、被害者補償など経済的問題につながっており、それに対して両国の政府は一寸も譲りませんでした。このような政治的なレベルでの韓日関係は、あまりにも複雑に絡み合っています。しかし、韓日の政治的な関係の悪化が国民間の関係の悪化にまでつながってはならないと思います。悪化した韓日関係を解決できる鍵は国益のための戦いではなく、両国国民の友好的な関係であるからです。セミナーで、日本の学生たちと心を開いて対話をしたように、両国国民がお互いを理解しようとする心が、両国の共存のための政治を生み出すと思います。

3. セミナーについて

10 日間、学術的なセミナーと文化体験が並行できたというのが、今回のセミナーの最も大きな特徴であり、長所だと思います。同じ寮に泊まって、ソウル市内を観光したり、江華島に合宿に行ったりしながら、私たちはお互いを韓国民、日本国民として見る前に同じ年代の友達として見ることができました。このセミナーが単に形式的な学術セミナーだったら、私たちはお互いを「友達」よりも「他の国の人」として見ていたかもしれません。しかし、文化体験を通じて近づいた私たちは、友達としてお互いの立場の違いを理解することができました。このような体験が「シチズンシップ教育」の一つだと思います。グローバル化が進んで国境が薄くなっている今この時期、「違い」という理由で、違う国籍の人を差別する態度はまだ世界の各地に残っています。しかし、このような差別は、紛争を引き起こすだけです。「多文化」の世界は必然的にあります。多文化の世界に向き合う私たちが取るべき態度は、差別でも、紛争でもない、平等と共存です。したがって、私たちは同じ地球で生きているという「共通点」に注目して、お互いの違いを認め、和解の道に進まなければならないのです。今回のセミナーでは、韓日の共存を模索するとともに、異文化を理解してシチズンシップを向上させることができました。